

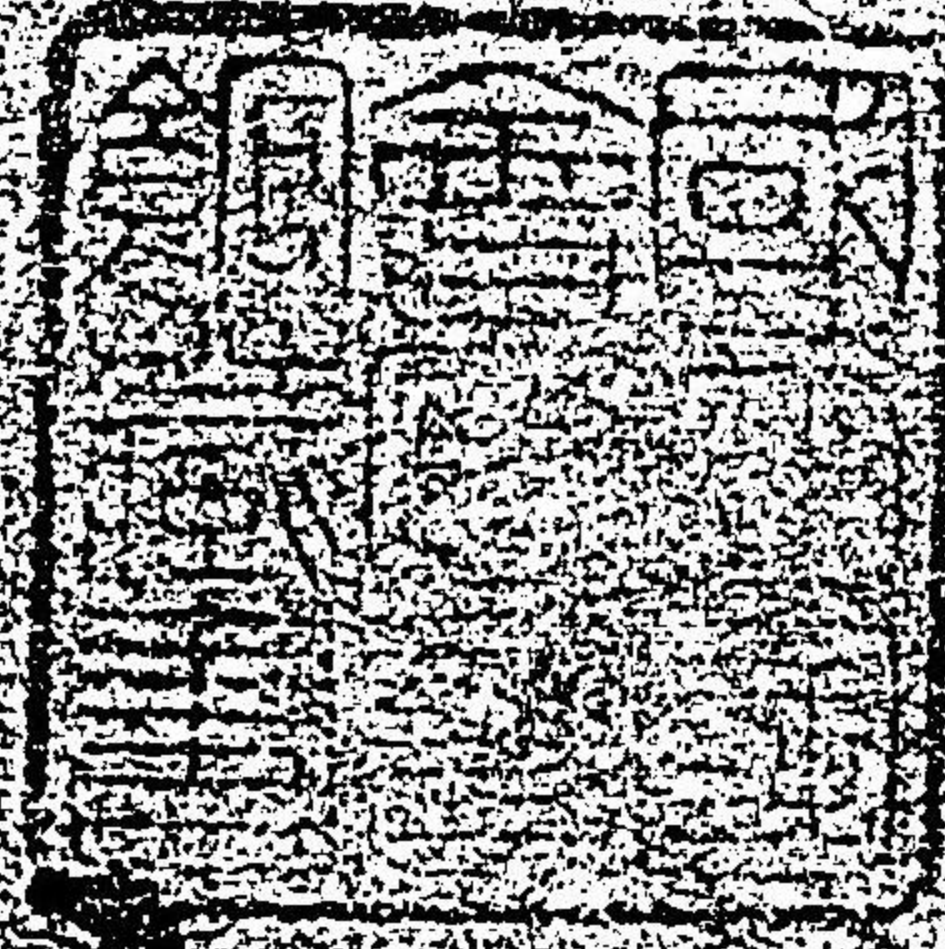
今古雜譚



上

古今雅談序

此篇内外古今の賢豪才俊。文人墨客より。車丁馬卒の卑  
 きをも厭はず。玉石雜陳。もと其人を選ばずと雖も。其の  
 擧る所の一事一行は。悉くこれ珍奇妙異。其の採る所の  
 片言隻語は。悉くこれ慧機靈想。驚くべく。笑ふべく。喜ぶ  
 べく。又娛むべし。今爾其紛々議論の口角を拭ひ。察々窮  
 理の眼睛を洗ひ。而して後。快讀一過せよ。一段の興味。幾  
 許の情趣を覺ゆべし。余嘗て思へらく。雨中燈前。閑を消  
 し。悶を遣るの料。此種の掃具に若くは。かすと。亦以て有  
 耶無耶の胸。三寸の關門を打破して。開口一笑。天地の寬  
 きを悟り得ればなり。知らず世間。幾多名利に奔走する



280.8H654R

No.

家雅  
庭倉

古雅談序

篇内外古今の賢豪才俊。文人墨客より。車丁馬卒の卑  
 きをも厭はず。玉石雜陳。もと其人を選ばずと雖も。其の  
 擧る所の一事一行は。悉くこれ珍奇妙異。其の採る所の  
 片言隻語は。悉くこれ慧機靈想。驚くべく。笑ふべく。喜ぶ  
 べく。又娛むべし。今爾其紛々議論の口角を拭ひ。察々窮  
 理の眼睛を洗ひ。而して後。快讀一過せよ。一段の興味。幾  
 許の情趣を覺ゆべし。余嘗て思へらく。雨中燈前。閑を消  
 し。悶を遣るの料。此種の掃具に若くハかしと。亦以て有  
 耶無耶の胸。三寸の關門を打破して。開口一笑。天地の寬  
 さを悟り得ればなり。知ふず世間。幾多名利に奔走する

の人。其の昏々擾々たるの間に。幸にも一たび此等の快  
書を繕き得るや。否や。又能く願を解き頭を點し。儼然昨  
非を悟りあたふや。否や。余は此數語を卷首に題し。爾輩  
の來り讀むを待つ。

明治廿五年八月

市島春城識す

藥の能書はいづれも萬病を治して、  
序といふものゝ無用なる月夜の提  
灯の如し。卷首よ白紙の餘分あるを  
其儘よも置き難ければ何なりとも  
と望まれて、數千言の媒人口はうる  
さし、

夏の夜は話上手に明けにけり

明治壬辰仲夏

紅葉山人

例言

一此編多く古今賢豪學者の性行逸事及び文壇の珍事  
逸話を掲ぐ。素より大人一夕の談柄に資するに足ら  
ずと雖ども亦以て少年後生の坐側に備へば談笑讀  
過面白き間に知らずく訓誡指導の效なしとせず。  
要するに此編は一方に向つては消閑の雑話たり。又  
一方には少年學生の好伴侶たり。故に此編は學校及  
び家庭に於て子弟訓養に與つて補益あること尠少  
ならざるべし。

一古今文壇の逸話珍説少なきにあらずと雖ども今は  
最も趣味あつて風流なるものを採る。則ち此編が他

の泛々なる雜著と。其品位を同ふせざる所以にして。編者が此々群書を涉獵して。其粹を集めたるの勞實に此に在るなり。

一編者が力を此編の纂輯に致したるは一朝一夕の事にあらず。而して事。歐米の偉人學者に關するものは。材料を春城學人市島謙吉君に得る最も多し。編者は深く同君の厚意を謝せざるを得ず。

一和漢歐米。若くは學者文人。画家俳士等。一々其部門を設け。其類別を立つる時は。繙閱の間同種類の者交々相接して。反つて讀者の厭倦を來さんことを恐る。故に部門を設けず。類別を立てず。

一此編引用の書目頗る多く。一々之を歴舉するに暇あらず。編者の力めて字句を穩當にして。童幼婦女にも解し易からしむる様になしたり。

明治廿五年八月

編者識

今古雅談

目錄

ビスマーク翁と徳川家康	一	丁
余が肩に上せて相應なる首わりや	一	丁
コレリツジ愚弄せんとする者を愚弄す	二	丁
頼山陽と大槻盤溪	三	丁
二葉の草稿五百圓	四	丁
哲學者の頼智フレデリック大王を服す	五	丁
菊池容齋石橋の舞を書く	六	丁
詩人を逐ひ出すべし	七	丁
著述家を罰するの奇法	八	丁
鬪争を好む魚の事	九	丁

曆博士の失敗	十丁
有情か無情か	十二丁
玄米ならば早く棺を遣れ	十三丁
蠻人尺牘に驚く	十五丁
柳里恭大雅堂の諫を容れず	十六丁
寶生彌五郎の妙技	十八丁
歌を詠むの難事にあらず (香川景樹の逸話)	十八丁
諧謔餘意あり (山崎宗鑑)	十九丁
大學校長の鸚鵡返し	二十一丁
歴史家の落膽	二十二丁
言辭の誤解多數の癡狂人を生ず	二十三丁
足下に金を貸したる覺なし	二十四丁
貧窮政事家の頓才	二十六丁

ピルコンスフ井ルドの頓才	二十七丁
才子は跋なり佳人は眇なり	二十八丁
活人の心臓を試験す	二十九丁
意外の問に意外の答 (チャールス、ラム)	三十丁
帽子屋の看板	三十一丁
四面の碁盤二妙手の才力を判定す	三十二丁
巻菱湖柳灣の失敗	三十三丁
曾我耐軒の逸事	三十四丁
謝蕪村寺僧を驚かす	三十五丁
茶人一日釜の蓋を開けず	三十六丁
希臘古代の娼妓	三十七丁
頓才の畫工帖木兒の像を畫く	三十九丁
下院に於ける小供	三十九丁



下院議員は猶猴の如し	四十一丁
國會議員の滑稽	四十一丁
歌を以て巧みに詩を譯す	四十二丁
好事家のいましめ	四十三丁
林羅山俚語を解釋す	四十三丁
酉の日の奇話	四十五丁
和漢同情	四十五丁
芭蕉翁二虫の字に讚す	四十六丁
人は亡ぶも理の存す	四十六丁
詩人コレリッジの奇行	四十八丁
三大儒椅子とテーブルに辟易す	四十九丁
宮本武藏の風流	五十丁
林子平嫂と同衾す	五十一丁

大雅は毛氈の下に在り細君は唐紙の中に在り	五十二丁
秦皇の土功も亦驚くに足らず	五十三丁
俳優松本錦升の妙技	五十五丁
寧ろ舌を斷つに若かず	五十七丁
支那拳	五十七丁
一對の風流(芭蕉と李白)	五十八丁
相撲と三味線	五十九丁
磊落家の年賀	六十丁
文祿の軍人毛氈の用を知らず	六十一丁
林羅山白の字に閉口す	六十二丁
物徂徠鼠の婚姻を釋す	六十二丁
笑堂福集 三則	六十三丁
草書体の演説	六十五丁

南華嶺鼻輝に書き盤溪之に賛す	六十六丁
蟬丸	六十七丁
善言を賣るの僧	六十八丁
悠長なる職業	六十九丁
支那の藝妓及酒間の遊戯	七十一丁
王將と玉將の名	七十一丁
曾我蕭白の逸事	七十二丁
箱入娘、鼻毛長し、蓼食蟲	七十三丁
葛飾北齋交を瀧澤馬琴に絶つ	七十五丁
國會は猶猫の如し	七十六丁
徹夜國會の議事を開く習慣	七十七丁
國會議場の夢物語	七十八丁
議員撰擧御免の出願	八十丁

夫子自ら言ふなり（飯盛、岡持、墨金）	八十一丁
蠅蠅請求の動議	八十二丁
最長時間の議事	八十三丁
勅語の讀直し	八十三丁
月界より來る	八十五丁
盜賊に非ざれば國事犯人ならん	八十七丁
兩學士蛇肉のヌチユーに辟易す	八十八丁
詩人自ら鬼神なりと稱す	八十九丁
書籍館は字引なり	九十一丁
書籍を列すれば十五英里に達す	九十一丁
細君嬌臍を發して良人の草稿を焼く	九十二丁
トーマス、カムベル英皇の厚遇を蒙る	九十三丁
電信奇話	九十四丁

佳人才子の奇遇	九十五丁
忍耐家の頓才	九十七丁
非凡の記憶力を有する通信者の事	九十八丁
鐘聲を聽いて婚姻を決す	九十九丁
國手の頓才損害を回復す	百一丁
裁縫の術を知るや否や	百二丁
謹んで星に謝す	百二丁
書籍を借るに抵當を要す	百三丁
處女の著書全都の紙價を貴からしむ	百四丁
フランクリン時間を惜む	百五丁
世界第一の奇癖	百六丁
ペートル大帝齒醫者となる	百八丁
復た熱病に罹る勿れ	百十丁

狀師は蜘蛛の如し	百十一丁
化學者の金嫌ひ	百十二丁
讀む者の勝手に任す	百十三丁
一人の傍聽、廿年後の邂逅	百十四丁
佛王の冷語	百十五丁
文學者蜘蛛を食物とす	百十五丁
小説家スコットの大迷惑	百十六丁
武田信玄の男色	百十七丁
豊太閤の尺牘	百十九丁
尼將軍の書翰一通	百二十一丁
古政事家の屋内運動法	百二十二丁
ニユートン翁シヤホン玉を吹く	百二十四丁
喫煙の代りに砂糖を嘗めたる時代	百二十五丁

英國々會議事録の不体裁	百二十六丁
傳道師、俳優は如うす	百二十八丁
寧ろ二十五歳の良人二個を欲す	百二十八丁
良人は隣家の造靴師なり	百二十九丁
治安裁判官たること易し	百三十丁
余は愉快を好まず	百三十一丁
一彈以て二百頭の水牛を殺すべし	百三十二丁
學士ブットマン散髪師と誤解せらる	百三十二丁
兩脚を失ふて自ら知らず	百三十四丁
ダウ井イ狂人と誤認せらる	百三十六丁
チャールス、ラム吃辯の爲めに自ら苦しむ	百三十七丁
雇人請宿をケイアンと呼ぶ由來	百三十八丁
高尾の實事	百三十九丁

木戸内閣顧問の葉唄	百四十丁
鞆暖を取る	百四十丁
奪刀の代りに自盡を賜ふ	百四十一丁
四韓、四上野介	百四十一丁
空椀	百四十二丁
明人櫻を畫き邦人虎を畫く	百四十三丁
淺野吉良の菩提寺は同號なり	百四十四丁
耐軒能く溝の深淺を知る	百四十四丁
麵湯の饜應	百四十五丁
禽獸の刑罰	百四十六丁
壽命を豫知する法	百四十七丁
他人の年齢を覺る法	百四十七丁
國君の頭上に黄雲あり	百四十九丁

辨慶と長範の状貌	百四十九丁
午睡の自由	百五十丁
野人尙波師とするお足る	百五十一丁
莞翁鴨に換ふ	百五十二丁
文晁にわらず鶴なり	百五十二丁
都還りの盃	百五十三丁
俳優の風流	百五十三丁
鸚鵡石	百五十四丁
牧童名畫を笑ふ	百五十五丁
類三樹春雨の曲を賦す	百五十五丁
名妓の風流	百五十六丁
華盛頓死去の時日の奇なる事	百五十七丁
動物の壽命の發情期に五倍す	百五十七丁

市川白猿の逸事	百五十八丁
石谷十藏能く人を薦む	百五十九丁
野中兼山の江戸土産	百五十九丁
耳目の賊は鼻の監察を要せず	百六十一丁
黄門光圀淀屋辰五郎を憐む	百六十一丁
銀錢を以て護身符となすべし	百六十三丁
近松門左の才識	百六十四丁
酒瓢勇を勵ます	百六十六丁
寶井其角高野の小僧にへこまさる	百六十八丁
搖かして見れば石なり苔の花(支考)	百六十九丁
術の交換	百七十丁
權家の茶番	百七十一丁
名古屋の鯨	百七十三丁

狂歌凶兆を轉じて吉となす	百七十四丁
柳澤淇園風流の丐兒を訪ふ	百七十五丁
蜀山人桐の木を賣て一丸を饗せんとす	百七十七丁
柴栗山大雅堂の紀念碑を案す	百七十八丁
奇童	百七十九丁
淨瑠璃の冒頭	百八十丁
王安石經濟を知らず	百八十一丁
龍陽	百八十一丁
太宰春臺徠門に冠たり	百八十三丁
開元三詩人の雅遊	百八十四丁
蜀山人幕吏となつて職を勉めず	百八十六丁
蜀山人老僕を扶助す	百八十七丁
米元章の奇僻	百八十八丁

赤色の河骨	百八十九丁
狂歌師の伸直り(四方側と六樹園側)	百九十一丁
秀吉ハ皇胤なり	百九十一丁
點墨も梅花の觀を爲す	百九十三丁
英一蝶が乾魚の消息	百九十四丁
怨靈平九	百九十六丁
古川古松軒盜物を詮議す	百九十七丁
文法は卑語の中にも存す	百九十九丁
將基の傳來	二百一丁
忠臣藏お輕の實説	二百三丁
谷風小野川の話	二百五丁
梁川星巖髪を削つて花柳の債を免かる	二百七丁
叩々老人幽靈に扮す	二百十丁

畫幅を以て棍に易ゆ	二百十二丁
王安石の字説	二百十三丁
和歌を以つて罪を謝す	二百十四丁
雅典の兩畫工技倆を闘はす	二百十五丁
煙草叢談	二百十六丁
連歌狂体彙聞	二百十八丁
葦芽を以て盜を知る	二百十九丁
候べく候	二百十九丁
近松門左一夜に院本を作る	二百二十丁
冬日の薄羽織	二百二十一丁
千鳥の香爐	二百二十一丁
多年の夙志は蚊帳一張り	二百二十二丁
三好長慶危變に臨んで驚かず	二百二十四丁

榎本其角俳句の點料を只取にす	二百二十四丁
日本に婦人決闘の習慣あり	二百二十五丁
風呂吹大根の事	二百二十七丁
其角宗珉の名刻を借りて返さず	二百二十八丁
成瀬正成奇獄を斷す	二百三十丁
上杉景勝一生中纒かに一笑す	二百三十丁
刺客の異人同名	二百三十一丁
織田信長の明察	二百三十二丁
板倉勝重絹を争ふ者を判決す	二百三十二丁
歌人秀吉の心を決せしむ	二百三十三丁
紹鷗利休の秀才に感ず	二百三十三丁
演劇俗傳の辯	二百三十四丁
午頭天王の胡瓜	二百三十七丁

書を撰ぶの遠慮	二百三十七丁
趙陶齋大に富て權家を拆く	二百三十八丁
勘亭流の書、葦手書の繪	二百三十八丁
古雅の招牌	二百四十丁
女房はまだ泣かぬか	二百四十丁
利休の風流豊公を驚かす	二百四十二丁
塙保己一夫婦の俳句	二百四十三丁
箱根山の分拆	二百四十四丁
野田笛浦損料の刀を借りて二百金を利す	二百四十四丁
圓山應舉と鴨長常	二百四十五丁
此所小便無用	二百四十六丁
鼻口聰敏	二百四十六丁
加賀侯久隅守景を養ふ	二百四十八丁

三本杉	二百四十九丁
兩歌人の決闘	二百五十丁
筑後の奇僧桃水の事	二百五十一丁
宮筠圃妓を以て仁と爲す	二百五十三丁
證左明白の講釋	二百五十四丁
古池や蛙飛込む水の音	二百五十五丁
三絃の妙手	二百五十七丁
土佐節の元祖	二百五十八丁
渡邊華山の門下に奇士あり	二百五十九丁
只一樹にて足れり	二百六十一丁
鮑屑の巻物	二百六十一丁
大石眞虎の謝罪證文	二百六十三丁
蜀山の狂歌奇禍の媒をなす	二百六十六丁



蜘蛛を嫌ふ人と鼠を悪む人	二百六十七丁
楓橋夜泊の詩	二百六十八丁
蘆雪十六羅漢の印章を用ふ	二百六十九丁
横井也有的の小話三則	二百七十丁
寝ながら観の櫻	二百七十二丁
茶番狂言の由來	二百七十三丁
小野小町の髑髏	二百七十六丁
私窩子の別名	二百七十七丁
狩野元信鬼の繪を案す	二百七十八丁
北村雪山酒家の帳附となる	二百七十八丁
家を造るを普請といふ事	二百八十丁
母ををカ、サマと稱する事	二百八十丁
細君を山の神と云ふ事	二百八十丁

金のなる木	二百八十一丁
川師と山師	二百八十一丁
細腰を指して造物者の無盡藏となす	二百八十二丁
朧月夜	二百八十三丁
雲介老人河原巧兒を罵倒す	二百八十三丁
十返舎一九最後の滑稽	二百八十五丁
今様の秀歌	二百八十五丁
由善機智を以て放蕩子を誡む	二百八十七丁
唯だ顔を見るための謝金	二百八十九丁
三井養安奇骨あり	二百九十丁
老武者の失敗	二百九十二丁
大高源吾と細井廣澤	二百九十三丁
水戸西山公の逸事	二百九十四丁

瀧野瓢水の洒落	二百九十六丁
英一蝶石燈籠を買ふ	二百九十七丁
大石良雄の葉歌	二百九十八丁
文字の死活	二百九十九丁
藤田東湖と趙子昂	三百丁
手取笠	三百丁
著作家の奇癖	三百三丁
加賀の千代蕪村の書に題す	三百五丁
頼三樹番所の番人に向つて論語を講ず	三百五丁
嫁入の辨	三百七丁
尾上の遺書	三百九丁
身体の矮小能く志氣を鼓舞す	三百十二丁
八の數	三百十三丁

黄蘗山門の額	三百十四丁
苗村介洞藥を與へず	三百十四丁
武將の風流	三百十五丁
伊藤介亭謹孝にして人を憐れむ	三百十六丁
昔時の花柳	三百十八丁
室鳩巢蘆東山の前途を卜す	三百二十一丁
貝原益軒の小話	三百二十二丁
一字亦忽にすべからず	三百二十二丁
難題の俳句	三百二十三丁
里村紹巴太閤に事ふ	三百二十四丁
豊太閤壯士の罪を赦す	三百二十五丁
尺八の辯	三百二十五丁
郭巨の金釜	三百二十七丁

楠氏家紋の由来	三百二十八丁
加茂季鷹東山に遊で敷物を借る	三百二十八丁
印度の盗賊	三百二十九丁
トオカミエミタメの説	三百三十丁
怨	三百三十二丁
字義の辯	三百三十三丁
俳優小話	三百三十五丁
夢中讎を報ゆ	三百三十七丁
天野桃鄰手拭を盗む	三百三十九丁
本阿彌光悦の能書	三百四十丁
蟹の滑稽踊	三百四十一丁
秘露國の結繩文字	三百四十二丁
謝生童子を欺いて満引す	三百四十四丁

宗祇の佳話	三百四十四丁
太田道灌の幽懷	三百四十七丁
水鳥記	三百四十九丁
近松巢林の遺文	三百五十七丁
揚屋の差紙	三百五十八丁
遊園と幸四郎	三百五十九丁
偷詩	三百六十一丁
謠歌、史傳を補ふ足る	三百六十一丁
勝川春亭細君に謝す	三百六十五丁
鞭撻に代るに新聞を以てす	三百六十五丁
能辯家の戦慄	三百六十六丁
位爵を見ること糞土の如し	三百六十八丁
政治家小説家を弄ぶ	三百六十八丁
鬚を切れとの命を受けざるべし	三百七十丁

コレリツジ兵營 <small>ま</small> 在つて奇才を現はす	三百七十丁
人造の美人	三百七十三丁
一書の價三千圓	三百七十五丁
詩人ポープ <small>ウオルテール</small> を打つ	三百七十七丁
ヒヤ／＼の失敗	三百七十九丁
賊詩人を切かす <small>(東西一對の談)</small>	三百七十九丁
ウオルテール <small>鷺</small> を愛す	三百八十一丁
詩人グレイ、伯爵夫人の賜を受く	三百八十二丁
簡單なる書翰を作るは難し	三百八十四丁
白髮三千丈演説を聴くに因つて長し	三百八十五丁
ニユートン翁の逸事	三百八十五丁
ミルトン、ゼームス二世を罵殺す	三百八十七丁
耳なき羅馬法皇	三百八十八丁
狙魚	三百八十九丁
以上三百三十六項	

### 今古雅談

如不及齋 市島謙吉 校閱  
紫山人 堀成之 編纂

#### ●ビスマーク翁と徳川家康

故卷菱湖寫す所の東照公の「世の中は重荷を負ふて遠き道を行くが如し云々」の遺訓は日本久しく摺本として行はるゝ所なるが流傳して獨逸國に至り宰相ビスマーク翁之れを獲て珍重措かず乃ち親しく其後に書して曰くこの文章は平々淡淡々、極めて至近至淺たり凡庸の人と雖ども亦之を言ひ難からず然れども躬之を行ひ之を實踐せんとするに至つて則ち之を歐洲の大に用ゐるとも復た尙ほ綽々として餘裕あるを覺ふ徳川家が東洋に在つて三百餘年の大平を維持せる蓋し偶然に非ずと歎じたりとなん語に曰く英雄知英雄と亦た知遇と謂ふ可し

#### ●余か肩に上せて相應なる首ありや

英王ヘンリー八世と佛王フランシスとは同時代の君主にて共に激烈なる氣象を有せる

人なりし兩主互に其の氣風を知るが故に或る時英王は佛王を怒らしめんと心算かよ巧みて過激不敬の掛合状を認め閣臣トーマス、カムプベル氏を召して其使節に命せり氏は此命を受けて頗る當惑し王に向つて曰く佛王の如き短氣の人に若し勅諭の如きことを傳へなば必らずや足下の首の肩と分離するならん王曰く決して恐る、勿れ若し佛王よして斯る無禮の振舞を爲すに於ては朕は佛國幾百萬人の首をして皆な其肩上より退去を命すべしカムプベル曰く如何にも難有仰せに候得共臣恐る佛國幾百萬人の首の内臣が首の後代りよ丁度臣が肩上に乗る者或は無いかも知れずと

●コレリツジ愚弄せんとする者を愚弄す

英國詩壇の老將軍と聞えたるコレリツジ先生は極めて馬に騎ることを嗜める人なりしかと其術、頗る拙劣にして街上の通行人の如きは氏が前後に立塞かり幾んど山を爲して見物する程なりし會つて氏がダラムと云へる田舎にありし時一日馬に跨りて此方彼方逍遙してありしが通り掛りたる一人の男は氏が騎り様の餘りよ奇なるを可笑く思ひ詩壇の老將軍なりとは更らに知らざるを以つて此奴一番戯むれ呉れんと用事ありげの

顔色にて先生を呼び留め「卒爾ながら御身は途中にて仕立屋にお遇ひなされませんでしたか」と尋ねしよぞ披らぬコレリツジ氏は間に應じて答て曰く「仰の通り遇ひましたるして其の節仕立屋は二三丁も行けば必らず馬鹿物よ遇ふだろうと云ひましたるが足下の事だか知らん」と澄したる顔色にて馬の歩を早むるにぞ戯むれんとしたる通行人は却て愚弄する所となりそこゝに姿を隠したり

●頼山陽と大槻磐溪

大槻磐溪翁青年の頃會つて京師に遊ぶ時に頼山陽翁の儒名天下に鳴る於是四方の書生來り調を乞ふ者日々數十人に下らず然れども翁人に許すと甚だ少れにして多くは皆な謝して面せず磐溪亦其中に在り而して其催詩樓の記一篇を袖にし以て翁に示さんと欲し不本意ながら空しく之を置いて去る山陽翁其文を一讀するに及び忽ち案を拍つて曰く如此の佳客豈に共に一盃を傾けざるを得んやと乃ち急に喚び迎へしめ臂を把りて文を論じたりと世に傳へて佳話と爲せり山陽翁尤も經義に邃く詩文筆札亦皆な妙に造らざる莫し然れども常に諧謔を善くし人をして笑つて口を掩ふ能はざらしむ嘗つて友人の

家に飲む酒間謂ふて云く昨夜近街の花市を觀る寒蘭の一盆あり必ず之を得んと意ふ而れども彼れに我が意中を知られんことを恐れ殊更らに他の零碎物を指して個々に其値ひを問ひ而る後漸く蘭に及ぶ彼れ果して我術中に落ち廉價を以て購ひ得たりこれ所謂明かに棧道を攻むるの狀を爲して暗に陳倉を度るの軍法を用ゆるものなりと因て大に笑つて一大白を引けりと其洒落なる概ね如此し

●二葉の草稿五百圓

名家高人の手跡とし云へは片紙零繅も時ありて數百金の價を有すると我邦などには極はめて多き例あるが此事は獨り我邦のみに限りたるも非ず英國著名の詩人トーマス、グレイ氏の暮邊懷古と題する自筆の詩稿二葉に處々改削を加へたるものが龍動なる競賣場に出てたると其場も會せる者初十ポンド(我五十圓)の價を付けし者ありしが夫より十五ポンド二十ポンドと競争者を生じ遂は七十ポンド七十五ポンド迄にせり揚げ果ては百ポンド(五百圓)の價を付する者ありて遂に其手に歸したりと云ふ先年セークスピアの院本の草稿數葉が百ギニイの價を有したるとありしが其れ以來の高賣りと謂ふべし

●哲學者の頓智フレデリック大王を服す

第二世フレデリック大王はメンデルソンと名くる哲學者が滑稽の才に富めるを愛し寵顧殊に優渥なりし會つて其才を試みんと紙の小切に左の數字を書し執事に持せて之れをメンデルソン方に贈れり

Mendelssohn is an ass.

Frederick II.

メンデルソンは之れを一見し固より王の手書なることを知れど態ど知らざる顔色にて驚ろきながら執事に語りて曰く何人なるか陛下下對し容赦す可らざる無禮の侮辱を加へたる者なり、これ見給へメンデルソンは野暮である、フレデリックは第二の野暮であるど認めあるにわらずやと蓋し原文の意はメンデルソンは一の野暮であるフレデリック第二よりとあるをメンデルソン氏は頓才に富めるを以てフレデリック第二とあるを態どフレデリック第二とは解釋せず直くに本文の「一の野暮」とあるにかけ第二

の下に野暮の字省略しある者と解釋せるなり王は之れを聞て愈々氏が才を感賞せりと云ふ

●菊池容齋石橋の舞を畫く

徳川幕府の末路に當りて繪畫を以て一家を成し後には日本畫士の稱號を得たりし菊池容齋翁は始め高田圓乘の門に入りて畫法を學びしが遂に應舉北齋杯の風に土佐四條派の趣を雜へ取りて古人の未だ畫かざる所のものを圖し好みて南朝の人物を畫きて頗る尊王の氣象ありし人なりき去れば翁の畫の今に世人に持て囃さるゝは翁が世に在りける頃より價昂の畫世に散布ける有様を想像しても知るゝなり何時の頃にや有けん某侯より能舞の中なる石橋といへる獅子頭の異人の赤き長やかなる毛髪を打振りて戯るゝさまを金屏風又畫きてよと詔らへられしを翁頗る諾ひて只今先づ五拾兩の金を賜はらまはしと云へるにぞ侯の使者も翁の腹きたなきに興さめたれど己が主公の意をも測り兼ねて心ならずも乞はれし儘に調へて贈りぬさて翁は頓かて此金を懐にして幕府の能役者觀世大夫の許に至り先きに己れが乞ひし畫様の事共詳らに語り出でゝあは

れ石橋の能を一曲舞ひて見せたまはれかし其舞はるゝ態を寫し度くこそ侍れと懇ろに乞ひて其謝儀にとて彼の五十金を大夫の前に据へたりければ然らば舞ひて見せ申さん石橋の乱れといふはなかくに筆もて寫し取らるゝ如く緩なるものに非ず見るさへいと目眩さほどの技なりと云ひつゝやがて裝束して舞臺に下りぬ扱その舞へる様を見るに言ひしに違はず手の舞ひ足の踏む所宛から烈風の樹木を吹き怒濤の船舶を覆へすかと怪しまるゝ計りにて如何にも其技倆の優れたるゝ驚きぬされど翁も流石に老手なれば舞の終ると共二様の圖を製りて示したれば大夫も此處はしかく彼處はかくく己れが思ふ節々を残りなく語りて遂に完全なる石橋の圖を成したりければ彼の使者後に洩れ聞きて痛く愧ぢ入りしと云ふ

●詩人を追出すべし

「フィアリー、クイーン」と題する數萬句の長篇は英國古代の文學社會に其人ありと知られたる詩家エドマンド、スペンサー氏の著なり初め氏が此の長篇の稿を脱するや之れを當時の貴族ノルサムプトン侯に呈したるに侯は受けて之れを誦すること數句に及

び執事を召し詩人に賞として廿「バウンド」(我が百圓許)を興へよと命し尙は誦すること數十句に及び愈よ妙を覺ゆるにぞ再たび執事を召し更に二十「バウンド」を興へよと命し尙は誦すること百餘句に及び愈々益々妙味を覺ゆるにぞ三たび執事を召し更らに二十「バウンド」を興へよと命じたり然るに候には誦するに隨ひ益々佳境に入り愈々妙味を覺るにぞ思はず案を撃ち退て、執事を召し今度は二十「バウンド」を興へよとは云はず意外にも夫の詩人を一刻も早く我館より追出すべしと云へり執事は不審顔主人に向ひ詩篇の内何か御氣に障りたることにてもありしやと尋ぬるに候曰く否とよ彼れを追出せと云ふは去ることあるが故にわらず彼れが詩篇を愈々誦すれば愈々妙味を感じ幾んど測る可らざるものなり若し妙味を感じる毎に二十「バウンド」ツ、を興へは篇を終すして余か家は破産するに至るべければなりと

●著述家を罰するの奇法

露西亞全國に言論の自由なく苟も政府を抗撃するの論文を印行し若くは著書を世に公けにするもの處するに嚴罰を以てするとは人々の既に知る所なり露政府がこれまで

此種の犯人を處罰するに種々の工夫を運らしたる中に就て最も奇罰と覺ゆるは著者に食はしむるに其の著書を以てすることこれなり今其の大畧を擧ぐるに先づ著者を監獄に拘禁し置き日々刑場に引き出し獄官醫師立合の上著書を寸断せるものを取りて之れを犯人に食はしめ醫師が充分なりと云ふを聞いて初めて止むの法なり日々同様の事をなし發行の著書盡くるの時を以て満期と定め刑人を解放すと云ふ枚數及び發行部數少なき書物の著者の兎も角も大部を著し多くの部數を發行せるものの如きは生を終るまで監獄に拘束せらるゝも或は食ひ盡すこと能はざるべしと米國教育雜誌の叢話中に見えたり

●闘争を好む魚の事

暹羅と云へる國に「ベツタ、ビユーナー」と名くる小魚あり恰かも我國に於て金魚を翫ふと同しく同國人は甚だ之れを賞翫し或は池水に養ひ或は盆水に入れ坐上の樂とするよしなるがこの魚の性質頗る闘争を好むと見え二尾を同處に置けば忽ち怒れるが如き形容を顯はし鱗を張り口を開て互に相搏を常とす又一尾のみの時にても若し鏡なごに



己れの形の映するを見るどきの敵手と思ひ違ひ忽ち身構をなして相争はんとするの状あり備て此魚平時に於ては甚た醜き色を備ふれども一旦激するや満身朱を灑たる上に金色を帯び光彩燦爛得も云はれぬ美觀を呈す是れ同國の人が此魚を大に賞翫する所以にして之れを購ふて産を傾け家を破るもの甚た少なからずと去れば同國政府は之れに重税を課し大に歳入を助くるといふ

● 曆博士の失敗

一、百年以降英國社會に行ける、曆を作りたるを以て其名を知られたる曆博士バルトリツジ氏に就て一小話あり何時の頃にやありけん氏は尋ぬる人ありて旅行を思ひ立ち馬に跨りて十數里を行きたる頃一旅店に入りて暫時休憩し日の高さ内に尙ほ數里を行くべしとて旅店を出でんとする節其主人の見送りながら氏に向ひ今夕の私方に御一宿なりての如何、今一二時間も経ぬ内に必ず大雨催し來るべしと止むるにぞ氏は曆博士の事なれば更らに其言を耳にも入れざる風にて嘲けりながら左様な心配は決してなし、若し御身の言ふ如く大雨降り來らんには歸路に立寄りたる節必ず六「ヘンス」(貨幣

の名)を與ふることを約すべしと目禮しつ馬の脚を早めて凡そ二「マイル」程も行きたりと覺ゆる頃遽かに一天かき曇り俄然覆盆の大雨といなれり流石の曆博士も目前の事實には争ひ兼ね前刻逆旅の主人の言を納ざりしを内心恥かしく思へど去りて前途を進むことも得成難ければ止むを得ず馬首を回らして先きに憩ひたる旅店に立戻りしかば主人之れを迎へ微笑してそれ御覽なされ私の言ふことに僞は有るまじと云ふに予氏は懷中より一圓の貨幣を取り出し之れを主人に與へ且つ如何よしして斯く大雨の來るを前知したるやと切に問ひけるに主人曰く別に前知する法とては知らぬを弊家にはバルトリツジと申す者の作りたる曆を所持せり全体此人は餘程の虚言者と見ゆ例へば曆に晴天と書いてある日の何時も雨の降るが常なり故に晴雨を知らんとする時にはこの曆に記載せる事實を反對し解すれば必らず間違あることなし現に今日の六月二十一日にて曆には晴天と書いてあれを常の如く反對に解して大雨を前知いたしたりと此の客人ころ乃ち例のバルトリツジ其人なることを露知る由なければ田舎漢の常としていと得意顔に話せしうば流石の氏も内心大いに辟易し思はず顔を赤らめたりと云ふ

有情か無情か

米國華盛頓府の近郷に住居する年壯の一紳士或時所用ありて市中に出でたるに折節暴りに雨の降り來りて偶々雨傘をも携へざりしかば何處にか雨宿をせんものと思へども生憎近邊に憩ふべき家もなかりしかば或る高屋の廊下に立寄りシヨンポリと恨めし氣に空を打詠め居たる偶と璃窓の裡より十六七計りとも覺しき嬋妍たる佳人が幾度となく此方を覗き見るに壯年初めて心附き忽ち自惚心を起し落花已に情ありとの想像をハヤ胸中に畫き居たるに内なる婦人は壯年よ斯る野心あるべしとも心附かず唯た雨に困じ居るを氣の毒に思ひ下婢に命じて一本の傘を貸したるに壯年は愈よ喜び其儘之を受け忝けなしと厚情を謝しつゝ立ち歸りたるが扱て壯年は家歸りても此事を忘るゝ能はず何とてかして我が意中の程を通せんものと思ひ色々考案を回らしたる末、彼の佳人の手から借し與へたる古傘を其儘返したるにては尋常にて面白からずと最も高價なる傘を買ひ求め躬ら之を持參して彼の家に至り幾きの美婦人に面會を求めてイト懇ろに前日の惠みを謝し件の傘を返したるに美婦人は先きに貸與へたる傘なりと思

へば能くも目を注げずして受取りたるも壯年の美人を見て益々前日來の仕打の如何にも我れに意あるが如くなるに心酔ひ窃かに惟らく無端雨宿りに佳人才子が互に戀々の情思を通はすの端緒となるとは今更ら珍しき譚柄に非ずア、斯る事は小説稗史中の事どのみ思ひしに今は我身の上となれるこそ裏愧かしくも又た嬉しけれど意馬心猿の動き易さの年壯なる男子の常情なれば何時しか遠慮の緒も断れて追々ナマメキなる文句の言語の内に交るに婦人も初めて其意を推し忽ち容を改めて壯年に向ひ爨の人情人が我家に過ぐるの約あり今や遅しと待詫びて窓より覗き居る折柄貴客が雨を避けんとて生憎にも妾の目前を遮ぎられたるが物憂さに餘義なく雨傘をお貸し申して去を希ひたるなりといと無情なる一言を遺して其坐を立ちたれば壯年啞然として暫くは爲す所を知らざりしと

立米ならば早く棺を遣れ

一千八百四十九年は米國の大饑饉にて各州ともに米麥登らず民皆な菜色あるが中よも北部の諸州殊に甚しき不作にて金氣屋を潤はすの資産家と雖ども日日の食物を求む

るに窮する程なりしが、コ、に素貧苦となん呼べる一の懶惰生あり此人豊登の歳に於てとら公費の救助を受けるにあらざんば衣食する能はざる境界なれば況して斯る饑饉に際し坐食し居らるべきにあらす去りて又た斯る凶歳に一州の厄介物を公費を以て救助すべきにもあらざれば一州の公民は協議を遂げ遂ひに不憫ながら此の厄介物を生きながら埋葬するところ得策なりと決し素貧苦にも其の由を言ひ含めたるにこれも早速承諾しければ取急き粗末なる棺桶を出来て之れも入れ墓地を指してぞ昇せたり然るに途上一の老翁あり通り過ぎながら昇夫に向ひ「誰何の葬禮ですか 昇夫「例の素貧苦です 老翁「エ、彼人は死にましたか 昇夫「イヤ死んだでいありませんが御存じの通り平生餘り怠惰で此節柄食ふとも出来ませんから生き埋めする筈ですこれには當人も同意だと云ふことです 老翁「ソレの餘り残酷だ文明國の体面にもかゝる、食へぬからとわらは少々なれども米を五升計り與ふるは必に素貧苦強ひて死ぬことの見合してハドウジャ」忽ち棺中に聲あり「ソノ米は春いたのですか 老翁「イヤ玄米です併しお前自身で春くなり人に春せるなりするがよい」棺中再び聲あり「イヤイヤ玄米ならば面倒

だ昇夫早く棺を遣せ！

●蠻人尺牘に驚く

英國の宣教師ゼイ、ツ井リヤムス嘗て布教の爲めラロトンガと稱する蠻島に赴ける際一の教會堂を設置せんと許多の土人を集め自ら其の棟梁となりて日々造營に従事してありしが或る朝例の如く工場に出で繪圖を作らんとするに生憎定規の持合せなかりしにぞ寓所より取寄せんと小さき鉤屑又炭片もて二三の文字を認め扱て工夫の内頭立ちたる者を招き、急きこれを余が家へ持ち行き妻に渡すべしと命するにぞ文字を知らず況して尺牘通信の便を知らざる蠻人は更に其意を解せず初の内は戯むれと思ひ笑つて應せざりしが宣教師は焦ち「此の木片を持ち行けは用事の辨すべし速かに行け」と云ふにぞ蠻人の愈々不審の顔色にて木片を手に取り「此を持つて行くのですか……令室は私しを阿房者だと仰しやるでしやう 宣教師「決して左様の事は云ふまじければ急き持ち行くべし急に入用のものがある」蠻人は稍々決心せる様子にて「然らば之れを令室に差上げて何んど申し上るのです 宣教師「これさへ渡せば何も云ふに及ばぬ此

の木片は御身の代りに私しの思ふ通りの事を云ふならん蠻人は驚きながら「此の木片がドウシテ物を云ひまきものか 宣教師「議論は無用だ早く持ち行け」と少しく怒氣を合ひで急ぎ立しにぞ蠻人も已むなく命の如く之を宣教師の寓所に持ち行きけるが夫人は之れを手に取りて一閱し了り其儘側へに投げ棄て早速定規を渡しければ蠻人は更らに一層の不審を増し「令室のドウシテ用事が譯りました」夫人「御身は今木片を私しに渡したではないか」蠻人「その木片が何にか物を申しましたか」夫人は笑ひながら「左様御身が齎らしたる木片の悉く良人の用事を傳へたれば速かに此の品を持ち行べし」蠻人は驚きたる顔色にて側へに棄てありたる木片を拾ひ上げ走りながら其場を去り不可思議の木片を手の及ぶ限りさし擧げ途中聲高らかに「看よ英國人の不思議の術を有するを看よ、英國人の隨意に此の木片に語を發せしめたり」と叫びながら工場まで駆け來り定規を宣教師に渡し扱て部下の土人を集めて其の不思議を語り聞かせたるにぞ衆皆な驚歎せりとウヰリヤムス手記の紀行中に見ゆ

● 柳里恭大雅堂の諫を容れず

身十六藝の多きを該ねたりとて文人社會に稱せらる、淇園柳里恭の大和郡山の人あり爲人曠達物に拘らず客を好むで其才不才を問はず家に寄食せしむるもの幾人と云ふ數を知らず或の偶然に來り訪ふものまでをも年を経て還さず家祿少なきにあらざれども之れが爲め乏を告ぐるに至れりと云ふ會つて京都に遊びたる頃大雅堂を訪ふて交を結び爾來懇意の間となりしが大雅が大和を漫遊せる際旅費の盡きたれば淇園に借らんと其の門を叩けるに淇園其訪問を喜び例の如く門を閉して還さず淹留數月を経るも去るを許さざるにぞ大雅も遂には困じ果て淇園の家臣に就て辭し去るの策の無きやと謀りしに家臣は打ち笑ひ客を愛するは我主人の癖なれば容易に去り玉ふことは叶ふまじ幸ひにぞ、まりて主人が房事を好むを諫め玉へ多情の爲に身を亡し給はんの口惜きことなりと大雅は肯づきながら折もわらば諫めんと或時其の由を淇園に説き若し余が諫めに従ひ給ひ、余も貴命に應じて此家に止まらん若し聞き給はずば速かに還らんと云ひけるに主人首を左右に振りて諫めにも従ひ還しもせじと益々門を堅くして守らしめたるに大雅は得堪へず終に裏庭の垣を越て逃げ去れりとなん

●寶生彌五郎の妙技

幕府の時に寶生彌五郎といふ者あり散樂を以て當時に鳴り殊に道成寺の曲に妙を得たりしが或時某侯寶生を招き件の曲を演ぜよとありければ寶生則ち女子の態に装ひ廳て舞臺に上りつゝ得意の技を演せしが例の如く鐘の中に入り鬼女の面を被ひりてイザ早や變りと云ふ場合に至りしに初め入れ置きたる假面のあらず寶生心も思ふやふ切ての同業が余の藝を妬み我を狼狽せしめんとて斯る惡戯を爲したるにやあらん憎べし奴等りなど切齒憤怒に堪へざれば他に詮方あらざればヨシ／＼なま中狼狽して觀者の笑を招かんよりはと忽地とおのが小指を噛み切り滴たる血汐を前曲も用ひたる假面に塗り付けしに鮮血淋漓として鬼氣眞に逼る寶生之を鬼面に代へて舞臺に出けるに怒氣胸中に充滿するの折なれば平生にいやまして動作殊に勇壯に假面も一入奇なるが故に看る人皆な感嘆して暫しは鳴も止ざりけり技終りて後、侯、寶生を召し事の顛末を聞き給ひ其頓才の凡ならざるに感し給へり

●歌を詠むは難事にあらず（香川景樹の逸話）

著名なる歌人香川景樹の許に或人來りて歌は詠たさるものなれど如何にせん倭詞を知らざるを、扱ても倭詞を知るよは如何にせば可ならん教へ給へと云ひしに景樹打笑ひて世間の人、歌といへば先づ倭詞とてにをばしと云ふて最六ヶ敷事の如くに思ひ合へり去れど歌詠むことは斯く六ヶ敷ものよあらず倭詞を習ふにも及ばず「てよは」よも構はず唯思ふ儘を常の詞にのせて云ひ出すが歌なり耳遠なる詞を用ひ面倒なる「てには」をつかつて詠み出したるは拵へものとなりて歌にはあらずと語る折しも表の方に豆腐屋の聲聞ゆるを景樹は指さして彼の豆腐屋にても歌はよまるゝなりよく「思はれよ」今そこに豆腐屋の聲聞こゆなり」是れにて上の句なり、扱て下の句は「おさん出てゆけ行すぎぬまに」是よて歌は出來たるなりと語りしとぞ又頼山陽と相携へて京都の稻荷山に詣りし時、頼門の書生歌よむ心得を問しに景樹取敢へず「歸るにはまだ日も高し稻荷山伏見の梅の盛り見てこん」と詠みて歌の前に趣向を求むるに及ばず只わりのまゝに詠むものなりと語りたりと

●諧謔餘意あり（山崎宗鑑）

昔し逍遙院實隆卿の許へ當時著名なる歌人山崎宗鑑來りて種々物語ありける折柄古歌の事を談じ凡そ何れの古歌を撰ばす一の下の句にて之れを受け意味連續して感慨其の古歌よりも深く思はるゝ句あり、そは「といひし昔のしのばるゝかな」といふ句なり假令は「田子の浦にうちいでゝみれば白妙のといひし昔のしのばるゝ哉」といへば赤人の田子の浦にて不二を詠めし當時を思ひ又「世の中は常にもかもな渚ごとといひし昔のしのばるゝ哉」と云へば鎌倉右府北條の專權を憤りつひに跡を山林に晦まさはやどの情より此歌をよみ出たるならんどの感慨をおこす又「風吹ば沖津白浪立田山といひし昔のしのばるゝ哉」と吟ずれば男のうかれあるさは咎めず夜陰蕭條たる山路をしも一人にて越ゆるならんか盜賊さへ出るといふなるものと孤燈筆々物業じたる貞女の昔を思今の世の浮薄を惡みたる情言外に溢る如何に面白ろからずやと云はるゝを宗鑑打聞て暫く考へ居たりしが忽ち嗟然として打笑ひ左様の上品なる句にては衣食住ども不自由の事なく書を披て常々古人に對し筆を投て時に世態を嘲ける御方々の地位には實に面白しども申べし唯我々如き卑賤の者にては斯悠長なる事を面白しども

面白からずとも品評する違なく我々が何れの歌の上の句につけても不都合なしと思ふは「夫はさておき金のほしさよ」とこそ申す可けれ即ち「田子の浦に打出てゝ見れば白妙の夫はさておき金のほしさよ」と云へば不二の高根に雪が降ふと降るまいと一向かまはず只だ金が欲しひと云ふ事又「世の中の中にもかもな渚ごとく」風吹けば沖津白浪にせよ「秋の田のかりほ」にせよ先づそれ等はどふでもよし唯金がほしいと云ふ情となりて卑賤の者の眞情をわらはし出す事はより切なるいなしと答へたりと諧謔餘意ありと云ふべし

●大學校長の鸚鵡返

トリニテイ大學の校長マソン氏は或る日書を知人の許に寄せ其藏書を借覽せんことを請求せり然るに左の如き返書到來せり  
 (前畧)早速高需に應ずべき筈に有之候處小生の家法として藏書一切家門外に出し不申由りて自儘ながら高需に應じ難く候但し拙宅へ御枉駕の上御覽の儀は何時にても差支無之候草々

其後程を経て今度は藏書を貸すことを謝絶せる人よりマソン氏に宛て其所有せる火起機械を借らんことを請求せりマソン氏は由りて左の如き返書を認めて遣したり

(前畧)早速高需に應すべき筈に有之候處小生の家法として火起機械は一切家門外に出し不申由りて自儘ながら高需に應じ難く候但し拙宅へ御枉駕の上御使用の儀は何時まで御使用被成候共決して苦しく無之候草々

●歴史家の落膽

英國の故人ウオートル、ラレイ氏の著にかゝる萬國歴史の氏が國事犯罪の爲め囹圄に繋留されたる時多年の辛苦を積ひて執筆したるものなり其の文章の富麗なる其の事實の精確なる歴史の摸型と爲すも愧ぢざる程の者なるが此の書の一缺典とも云ふべきは其完備せざることは是なり今其所以を釋ぬるに氏の出獄の後此書を上梓せんと夥多の草稿を机上に置き一日頻りに校正してありしに窓外に噪々敷聲の聞ゆしにぞ何心なく覗き見るに二人の醉漢あり途上にて何事か争ひ居たるが果は腕力沙汰となり各々必死に闘ふ中一漢の力や優りけん痛く他を打据る遂に死に至らしめたり此時恰かも氏が家の

戸を叩きて入り来る二人の友人あり氏に一禮して急がはしく今街上にて目撃したる事を告るを氏は初より黙して聞て居りしが兩友の言ふ所就も己が自ら目撃したる所と多少事實に相違あるに予氏は忽ち不興の顔色を呈し「事の起てより未だ五分時間を経過せざる内卿等までも斯く事實を誤傳する上の余が多年の辛苦を以て蒐集たる歴史の材料も馮んや誤謬の事實にあらざるを知らんや嗚呼余か數年の辛苦は實に無汰骨折なりし」と云ふさま手に握りたる數千枚の草稿をば傍の火爐に投げ入れたり思ひ寄らざる珍事に兩友の打ち驚き遠て、手を火中に差入れ草稿を取り出したれど其の幾分は既に灰滅し又た回復する術もなかりしと斯る偶然の出來事の爲め此の好歴史の幾部分を失ひたるは實に惜むべきことにぞある

●言辭の誤解多數の癡狂人を生ず

佛國ドルドグと云ふ地の縣令取調の事ありて管内の癡狂人の數を書き出すべき旨を管内へ達したりしにタリエース村の戸長は賤しき職業を營なむ者にて文字を知らざる者なりしかバ「アリエチー」即ち癡癡人と云ふ義を解し得さりし故之れを副戸長に問

ふも副戸長も解せず相對ひて當惑せし折柄偶々某區の代書人此の戸長役所に所要ありて來りしが縣令の達書の事をば語らす單に「アリエチー」とい何の義ぞと問ひたり然るに此代書人の常に好んで談話を爲す人にてありければ縣の達とは知らず此字は説教聽聞人と云ふ意味なりと云ふよ二人は大に喜び我々も大概の然ならんと思し事なりとて則ち日曜日待ちて村の寺院に赴き聽聞人を數ふるに合せて三百人に出です依りて戸長の考ふるに我村の人口百餘よして三百人にては僅かに三分一のみ若かず人數を多く書出して他村より信神者の多きに誇らんと則ち當村癡癡人凡七百人但し正副戸長共算入」と書き記し縣廳へ届け出でたり

●足下に金を貸したる覺かし

トムソンに云へる詩人は「四時」と題する詩篇を著し英學の文學社會を壓倒したる人なり詩人の常として氏も亦貧乏を極め此の詩篇が文學社會の評判を博したる節の如きは貸金の催促を爲すの時節到來せりと債主は氏が家を取り圍み門前恰か市を爲したる有様なりしと云ふ此人その後龍動に來りたる際も赤貧洗ふが如く安旅籠屋に身を置

くの有様なりしが此の詩篇の購讀者中に多少文學社會に名聲あるクインと呼べる人あり氏が不幸を傳承し最も氣の毒の事に思ひ一日朝早く氏が旅宿を尋ね扱て云ふ様未だお目にかゝりたる事は無けれども小生事のクインと申すものにて少しく用事ありお尋ね致したりトムソン曰く仰の如く未だお目にかゝりたるもの無れども御姓名は夙に承知致し居れり見苦しけれど小生の居室へと案内し頓て寒暖の挨拶終りてクイン曰く甚だ失禮乍ら只今料理方に朝食を調へよと命じ置きたれば最早持ち參るべし願くは足下と飲食を共に致したしと兎角する内早や朝食の用意整ひたれば互に麥酒の杯を傾け酔酩酊する時クインは容を改めて曰く小生の今日お尋致したる用事は他あらず實に足下より金百パウンド(我五百圓)を拜借致し居りますれば今朝返金の爲め推參致したるなりとトムソンの意外の事に驚ろき不審の顔色よて考へ居りしが且らくありて曰く小生は如何に考へても足下に金を貸したる覺えはなしクイン曰く然云ひ給ふ可らず小生は確かよ百パウンドを拜借したることありと早や懷中を搜りて銀行手形を取出し之れを渡さんとするにぞトムソンの愈よ不審に思ひ少しく改まりたる面色にて其故を



問ふにぞクイン曰く實は足下の著いされたる四時の詩篇の梓に上りたる節は小生眞先に之れを購ひ得て一讀無量の快樂を覺へり由りて其の謝意を著者に表せんと疾くより兒孫に申付け若し余が没したるときは財産の内より百パウンド丈の足下に贈るべき様遺言致し置けり然るに此程承はれば足下は御出京の由に付兒孫より差上るまでもなく小生が自身に罷出で差上ることに致せり小生の用事は是れのみなりと百パウンドの銀行手形を座敷に差置きたるまゝ急ぎ立去れり

○貧窮政治家の頓才

英國下院に於て一時雄辯の聞こえ高かりしセリダン氏は一國の財政を料理する大才を有せし人なれども政治家の常として一身の家計に隨分不取締の人なりしと見ゆ會て或る富豪家に就て五百「パウンド」(我二千五百圓)を借用せることありしか契約期日を経過するも返金せざるにぞ債主の焦立て氏を訪ひ返済期日の経過せるを告げ嚴重の督促を爲し若し即時返金せざる時は出訴及ぶへしと迫れり氏は流石の老練家なれば更らに動する氣色もなく聲を和げ種々申譯を云ふて詫びたる後更に語を次ぎ「甚だ申

兼ねる儀なれども此頃は交際に多費を費し困難致し居りますゆゑ願くは只今二十五「パウンド」(我百二十五圓)程御貸し被下間敷や」と依頼するに債主は此の鐵面皮敷請求を聴き少しく怒氣を含み聲を荒らげて曰く「左様な事は決して出来ません貴方は未だ舊債すら返済なさらないか」氏は之れを聞き態と心得ぬ風をなして曰く「貴君の小生の請求を無理だと言ふれど貴君の請求に較ぶれば尙優るべし貴君の小生に五百「パウンド」を請求されるれど小生は僅くも二十五「パウンド」すら請求せぬ者を

●ヒ井コンスフ井ルドの頓才

英國の宰相ヒ井コンスフ井ルド氏が多年の文勳よりて貴族に列せられ下院より上院に轉じたる頃、一日龍動の街上を漫步してありしに圖らずも同僚なる某貴族に行き遇ひたり某貴族はヒ氏が新たに貴族に列せられたる榮を賀し「定めて君に於ても此度の榮叙を満足に感ぜらるゝとならん」と挨拶せしにヒ氏は此の榮爵を以て愉快とも満足とも感じ居らざりければ平常の滑稽にて「上院に入れられて恰かも生理にせられたる様も感じませ」と對手の貴族なることよ心附かず無遠慮に返答せしかば某貴族の意外

の返答を得て不快の色面に顯はれたり流石のビ氏なれど此は遣り損なひたりと心付き直に語を次いで「イヤサ安樂淨土に埋められたる心地して最も愉快に感じます」と漸やく其の場を繕ふたりと云ふ

●才子は跛なり佳人は眇なり

タレイランド及び其夫人マダムド、ステイル夫婦の共に佛國の史上に隠れもなき一對の俊秀にてありしかど天、佳人才子に幸せず良人は生來の跛、夫人は生來の眇にてありし夫婦の間柄の極めて睦まじかりしも中心互に不具を恥づかしく思ひ居るものから一方より他の不具なるを彼れ是れ云ふことあれば一方よりも亦た他の不具を鳴し其度毎に口論舌戰の生ずるとも數々なり、由りて夫婦は覺る所あり相約して曰く「お互に身体の缺所を云出せばこそ一家紛紜の種ともなれ互に言はずバ口論舌戰を爲すの機會もなき筈なり今後は屹度戒めて双方の缺所を云ふ可らず」と其後の互に戒めてありしが一日良人の庭前に徘徊し居る様の餘りに可笑く見ゆけるを夫人は兼ての契約に心附かず先づ戒を破りて「貴方は一脚を何かなさりましたか」と戯れしに良人の復讐心忽ち

ち勃如として起り「お前が視る如く己が脚は曲つて居るぢやないか」と答へたり

●活人の心臓を試験す

英王チャールズ第一世の時に當りモントゴメリイ家に屬する或る年若き貴族の一日戯れに高處より飛下りんとする際誤りて胸部を樹木に撃ち付け爲めに肺心兩臓を露出する程の淺うらぬ瘻を受けたり而るに其後、日を経て漸やく快方に向たるも其の瘻口と容易に愈えざるに予王は之れを聞き活人の心臓を目撃するは最珍らしき事なりとて一日右の貴族を招き當時著名なりし醫學博士ハルウ井イ氏を立會はせて心臓を見んことを請求せり固より王命なれば貴族は憚るとなく胸部を現はして患所を天覽に供したり扱て其際ハルウ井イ氏か試験する次第を記載したる者を見るに曰く「患者の瘻口の充分廣潤にして余か兩指を中へ差入るゝに足れり余は兩指を以て心臓を探り患者に向つて感覺如何を問ふに少しく苦痛を覺ゆと答へたり余由りて思へらく其痛味を感ずるは余か兩指を差入るゝ際誤りて瘻口に觸れたるが故ならんと更らに注意して今度の毫も瘻口に觸るゝことなく靜かに心臓を抑へて其の感覺を問ふに何物か觸れたる心地すと答

ふ余由りて更らに思へらく是れ恐らく心經の然らしむる所ならんとい一の工夫を運らし  
黒巾を以て患者の面を覆ひ患者をして試験の模様を知るよ由なからしめ今度は王親ら  
兩指を瘻口に當て給ひ心臓に觸るゝこと再三再四し給へるも患者の毫も之れを覺らざ  
りし」云々活人の心臓を試験し得たるの随分珍らしき事といふへし

●意外の問に意外の答（チャールズ、ラム）

英國著名の文學士チャールズ、ラム氏は曾つて其寓所を距ると百「マイル」許の近村に  
旅行せんと乗合馬車に打乗りしが乗合客の中一個の俗人あり此もの免角獸居すること  
の出来ぬ性質を有すると思見氏に向ひ無遠慮にも種々譯けも分らぬ問題を起して話し  
掛るにぞ氏も初めの内の好い加減に答て居りしが終には如何に説明しても了解すべし  
ども思はれざる理學上の問題に移りしかば氏も五月蠅事と思ひ立場もあらば他の馬車  
に乗り代へんと心組みてある内忽ち滿望田野の場所に到りたる時右の俗客は學士を煩  
はすの一大問題を提出し來れり即ち其問に曰く「今年の如き天氣續きの時候は胡蘿  
節の風味の何んな者でせう」學士は意外なる問も遇ふて五月蠅まされに答て曰く「ソ

レの勿論「スチウ」の料理加減に由るに相違あり

●帽子屋の看板

著名なるフランクリン氏の知人に帽子製造を營業とせるジョン、トムブソンなる一商  
人あり或る時己が店頭に掲ぐる看板を作らんとて其の商標文言等を頻りに工夫せしが  
終に一案を得、上邊に帽子の形を畫き其下に「帽子屋ジョン、トムブソンは現金にて  
帽子を製造販賣致し候」と認むる方適當ならんと豫じめ意を決し試みに之を諸友人に  
謀りけるが甲なる友人は曰く「冒頭の帽子屋とあるを刪るべし既に帽子を製造云々と  
ある上の帽子屋なること明らかなればなり」とトムブソンは如何にも其言に同意し  
て先づ帽子屋の三字を刪除せり然るに乙なる友人の曰く「製造の二字無用なるに似た  
り、何となれば願主は誰の帽子を製造したりとて固より頼着する者にあらず何人が製  
造したる者よても其意に適へる者を求め意に適せざるは買はざるべし去れば製造の  
二字刪る方穩當なるべし」とトムブソンは如何にも理りなりと此二字をも刪れり其後  
丙なる友人の更らに評して曰く「掛け賣りをするとは當地方の習慣に無き所なり別

段現金と断わらずとも差間なかるべし刪りたる方穩當なるべし」とトムプソンは如何にも又同意を表し果ては「ジョン、トムプソンの帽子を販賣致し候」との數字を殘すに至れり然るに丁なる友人之れを評して曰く「今日一業を營むもの豈に無代價にて物を他人に與ふる者わらんや必竟販賣致し候と断わるか如きは冗語を臚列するに過ぎず宜しく刪るべし」と僅かにジョン、トムプソンの二字と帽子の二字とを餘すに至れり然るに此の僅に助からんとせる帽子の二字も上に帽子の形ある上の無用なりと忠告する者ありて終に帽子の圖とジョン、トムプソンの二字を認めて看板とすることゝなせりと我邦人の如く漫り又閑文字を臚列する者は宜しく之れに鑑みて謹しむべきことなり

●四面の碁盤二妙手の才力を判定す

本因坊道策は著名なる圍碁の妙手なりし察元亦た當時有名の妙手なりしかば兩人の手合せするとも時々ありしが其技倆や相齊しかりけん常に勝負たがひにして其優劣を見るとなかりける然るに或るとき餘りに勝敗なきは興なしとて試みに碁盤を四面並べて

之を一面となし勝負を争ひしが察元の大に敗を取り其後幾回とたく試むれども毎に敗を取りて一回も勝を得たることなりしと云ふ是れ必竟盤面廣くなれば眼力行届かず全局を見る能はざるが故にしてこゝに初めて二妙手の優劣判然せりと云ふ嗚呼これ圍碁に於てのみ然らんや

●菱湖柳灣の失敗

菱湖、館柳灣共に新潟の産にして幼より友とし善し一は能書を以て一世を風靡し一は詩名を以て文壇に聞ゆ共に天性磊落にして小節に拘はらざりし事の普ねく世人の知る處なるが何時の頃にやありけん相携へて諸方遊歴せる折り一日不圖山路に踏み迷ひ人里に出でんと彼地此地頻り又徑路を辿る間に遂に日は西山に傾きぬ素より案内も知ぬ山中の事ゆゑほどく困じ果て漸くにして但ある一茅屋を認めれば兩人打悦び戸を叩きて事の由を告げ一泊を乞ひふるに主人の兩人の風采を見て其文筆に遊ぶの人なるを察して直ぐさま承諾し最と懇ろな待遇したるに兩人素より洒落の性質なれば遠慮會釋もなく痛飲飽食して寢所に入りたりしが早速又眠られざるにぞ床の間に一部

の五經ありたるまゝ、各一卷づゝ取りて仰天に臥しながら大音讀み居たるに主人の入り來たり此休を見て大いに立腹し「卿等は文字を解する者と認めたるは依り儂れ曩も宿泊を諾したるは今聖賢の經書を臥しながら展讀せらるゝの無禮至極なり我家貧なり」と雖も年來聖經を研究して怠らず稍や其道を知るを得たり然るに之を輕んずると卿等の如き無禮者は我家に寸時も留め置き難し之れより速りに立去らるべし」と最と嚴ろかに睨め付けられ流石の兩人も閉口して深く無禮の罪を謝し夜も太く更けて外も人家もなければ何卒一泊を許されたしと哀願せしも主人の固く執りて聽き入れざるにぞ是非なく兩人の其家を立ち出で、徹夜徒行したりと

曾我耐軒の逸事

或時遠州金谷の社中曾我耐軒翁を同驛の養命酒樓に聘し講義を乞へるに翁儼平として先づ論語入脩の篇より始む樓婢時間を過まら憂々ど杯盤を擎げ來る於是忽ち翁の目の論語を離れ斜に杯盤を睨む即ち咳一咳して云ふ是可忍也孰不可忍也と直に見臺を片附け先づ一杯を傾く衆皆一笑して翁の意に従ひたり又一日某の家に入浴せるとき

下婢背を流さんどて浴室に入しが忽ち驚きたる体にて奥へ趨り入り先生様のお手拭には紐が付て居ると云ふにぞ細君何事にやと至り見れば越中禪を手拭の代りを用ひ先生平氣で顔を洗ひ居たりしか心細君も可笑く思ひお手拭を進げませふかといへば先生始めて心附き是れは粗勿致したり併し最早濡しましたから手拭を拜借するには及ばずと澹泊に挨拶せりとぞなん

謝蕪村寺僧を驚かす

有名なる畫人謝蕪村は攝州東成郷の産にして幼より丹青に志深かりしが或時近郷なる某寺に開帳の執行ありたるに例により其の所藏の古畫數十幅を衆庶の展覽は供へたれば蕪村も日々群集する善男善女と伍を成て一日も欠かさず參詣したるを以て僧は蕪村を熱心なる隨喜者と思ひ一日袖を引ひて庫裡に誘ひ茶菓を供して頻りに其心掛の善さを賞め讚すを蕪村初めは心付かずいと不審の事と思ひ居たるも遂に信仰者と誤認せられたるを知りて微笑しつ「予れは佛に倣するものに非ず日々此に通ひ來るは全く古畫幅中なる衡山の山水を慕ふてなり」とて早々に立去れり

●茶人一日釜の蓋を開けず

茶人といへば今こそは人並外れて風雅らしき事をのみ爲すもの、様に思へども往時幕政の頃は頗る眞面目の者にて其式作法の如きも最も嚴格なるとなりしが茲に或る有名なる宗匠が一日茶を點せんとして爐邊に坐を占め將さ釜の蓋を取らんとするに當り偶々天井にて鼠の騒ぐ音の聞えければ宗匠は塵の落るを恐れ其蓋を取るを見合はし鼠の騒ぎの静まるを待つて始めて之を開きたるに一坐の賓客は頻りに其の注意の至れるを感賞し此事早くも茶人社會の美談となりたり一茶客あり此話しを聞付けて何の是式が難かしりるべきや余れも能く爲すべしとて一日點茶の會を催さんとするに先だち一人の質朴なる下僕に命ずるに坐敷の天井は潜み居て鼠の眞似を爲すべきとを以てし扱當日となりければ賓客も夫々打ち揃たるにより主人は徐かに釜の前に坐を占め將さに其蓋に手を掛けんとするや果して天井にてガサ／＼音の爲たりければ主人は暫しと手を収めて其音の罷むを待ち居りたるに暫らくして罷みたれば再び蓋を取らんとするにまたもや天井にて初めの如くガサ／＼音のするにぞコハ仕損じたりと心に思へども似

せ鼠の騒ぎは罷まざるにぞ不得止また手を引ひて其鎮まるを待ち今度ほど手を蓋に掛けんとするれば又々天井なる下僕が板の隙より主人の様子を偷み見て言ひ附けられたる如く再三再四ガサ／＼と怪しき音を發するに不此日は終釜の蓋を開るの機會を得ず衆人の胡盧どなれりと

●希臘古代の娼妓

歐洲諸文明國の内其十が八九は娼妓を以て恰かも穢多の如く一種劣等の人類と看做し賤蔑到らざる所なしと雖も獨り古代の希臘國に在りては然らず娼妓は恰かも貴族の如く社會最上流の位地を占め國政風俗の上に著大なる影響を及ぼし文學技藝の上に卓拔なる裨益を興へたり去れど當時同國に有名なりし文學者は孰れも競ふて其の傳を記し今日に傳へるものも少からず今其の重なるもの、一二を擧げんにザルヂリヤと呼べる婦人は小亞細亞ミリスウス府の娼妓なりしが波斯國王ゼルゼスが希臘に侵入せるとき王其の才學を聞き之れを用ひてセツサリイ政府と商議せしめたり之れに由りて考ふるも當時娼妓の占めたる位地の賤しからざりしを想像するを得べし後此の娼妓ハセツサ

リイ王は嫁したり云ふアフバシヤと呼べる婦人はアゼンの都府に一大娼閣を起こし  
 アイオニヤの諸府より婀娜嬋妍たる美婦人を迎へて營業を始めたり然るにアフバシヤ  
 の才學ある婦人なりしかば娼閣をして専ら淫を鬻ぐの所とはなさず抱衾の婦女及び遊  
 客の前に公然、文學理學等の講義を傳へたるにより名聲四方に馳せ此の家に遊ぶの狎  
 客の孰れも當時希臘社會に上流の地位を保つの人にして今日まで文學社會に名を知ら  
 れたるソクラテス、ペリクリス等の人も又皆な狎客中に算せりと云ふ」又ヒリイン  
 と呼べる有名なる娼妓と鉅萬の財産を有したりければ歴山大王がゼピス府を蹂躪して  
 全都府を破壊せる後自費を以て都府を再築せんことを欲したれども人民之を諾せざり  
 しと云ふ此の婦人の情郎は皆な當時傑出の人物にて有名なる演説家ヒペリデス畫家ア  
 ヘルレス彫刻家ブラキステルス等も此の中に算せり就中アヘルレス、ブラキステルス  
 の兩人は其の職業の徳に由りて彼れが裸身を見、其の嬌体を摸寫するを得たり此れ  
 其の狎客中最も豪富の者にさへ許さへりし特例にして當時の人皆な兩氏の艶福を羨め  
 りと云ふ

● 頼才の畫工帖木兒の像を畫く

其身を蒙古の一蠻族より起し亞細亞全洲を席卷して遠く歐羅巴亞非利加までも武威を  
 輝りしたる元朝の始祖帖木兒可汗の醜貌にして左眼眇なりしよしは古史の載する所な  
 るが一日高名なる某畫士を召し己が眞像を寫すべきを命せり、而るに可汗の其性苛酷  
 にして少しく其意に稱いざるとわれは輒ち嚴刑之れに隨ふといふ如き恐ろしき人物な  
 りければ畫士の以爲らく我れ若し可汗の容貌を眞のまゝに寫さんには其醜さを怒りて  
 罰せられんと必然なり然りとて刃りに之を辭退する時の却つて亦嚴しき咎を蒙らんと  
 大に窘窮したれど兎に角其命を拜し退いて百万工夫を逆らし終ひに可汗が弓を彎き滿  
 を持して狙ひを擬したる様を畫きて之れを進めたるに（蓋し元人の狙ひを定むるや常  
 に左の目を閉つるの習ひあるが故に可汗の眇目なる醜貌を掩はん爲め斯る意匠に出し  
 ものなり）可汗の圖を見て大に喜び數多の賜物を取らせて之れを賞せしとぞ醜を蔽ふ  
 て其眞を失はず禍を轉じて却つて福となしたる畫士の奇才巧匠劇だ感服すべきなり

● 下院に於ける小供

英國に於て國會を開きたる當初は未丁年の議員多く撰擧されたりと見えエリサベス女王  
 王時代の國會の有様をロバルト、ノントン氏が記述せる書中に云へるあり曰く「實  
 に方今の如く乳臭を脱せざる多數の小供を以て我國會を組織すると不安心の極にして  
 吾人の轉々往昔ゼームス王の時に當り彼のマーテン氏が爲したる演説を想ひ起さる  
 を得ず蓋し當時四十人程の議員の擧な盡く少年にして或い二十歳に満たず中には未だ  
 十六歳に達せざるものさへありしなり去ればマーテン氏は曰く「抑も社會の年長が其  
 小兒を支配せんが爲めに法律を制作するは古來の慣習なるに今や全たく之を顛倒して  
 小兒は反つて老親を支配するの法律を立つるに至れりこれ豈に自然の習慣を打破する  
 の惡弊に非ずや云々」と古代は斯く少年を國會議員に撰出したると多りりしものと見  
 らハットセル氏の著書中にも有名なる詩人ウォーラル氏は一千六百二十二年に當り十  
 七歳未滿にて選れて國會議員となり其後ウィリヤム王三世の時に至り其弊を改めんが  
 爲め二十一歳未滿の者の被選を得ずとの法律出たるにも拘はらず彼國の舊慣を重んず  
 るや斯る法律も充分の効力を有せず現に其の後に至りチャールス、ゼームス、フォツ

クス氏の十九歳にて國會議員に撰出せられたるの例もありたり

● 下院議員は猶猴の如し

英國下院に於てデグビー侯が爲したる演説中滿場議員に好うらぬ感觸を與ふる言論の  
 ありければ一同憤然として怒氣面色に顯はれ將さに侯に向つて大に其の理由を問は  
 んどせる際突然侯の上院に召び去られたることありセルデン氏此事を記し「侯の演説  
 將さに下院の糾問に遭はんとするに際し倏忽上院に引揚げられたるの狙公が猴の惡戯  
 を懲さんと鞭を執るや否や猴はツルツルと屋上に攀ち上りたるに能く似たり」と評し  
 たるは比喩適切なりと云ふべし

● 國會議長の滑稽

一千六百四十一年十一月中開會の英國々會には英國史上に最も大問題の一と算へらる  
 一大事件の出來せしとありしが當日下院に於て議論百出滿場沸が如く數時間に涉り  
 て漸く決を採らんとするに當りジョン、デグビー氏は議席に在らざるに不且らく採決  
 を控へてありけるが氏之間もなく入場し來り己が議席に就かんと徐々段階を上る中に



何に思ひけん中段に至る頃躊躇して進まざるにぞ着席遅しと待ち構へたる議長は焦ら  
ながら氏の方に向ひ「貴君は何故絞首臺の段階を上る刑人の如く斯く躊躇するや」と  
呼び掛けたるには當日の大問題に激昂し居たる滿場の議員も一同に抱腹絶倒せりと云  
ふ

●歌を以て巧みに詩を譯す

詩を歌に譯し歌を詩に譯しする例は甚だ多けれど多くは皆な拙劣にして誦するに足ら  
ざるが詩人大窪詩佛が「待てよ船、船よまてくまて事問はん君は何處の何なる國ぞ  
わたしや難波の里生れ」といふ歌を作りしは崔顥が長干行に「君家住何處、妾住在横  
塘、停舟暫借問、或恐是同鄉」といふ詩を譯せしにて船饅頭とも云ふべき賤妓の商船  
の客を呼かけて馴々しく物云ふさまを能く言ひ述べたり「ほんまにか夫じやおまへは  
私と共に、ひとつ難波の堀江の生れ、ちいさい時からしらなんだ」と云し、次の詩の  
「家臨九江水、來去九江側、同是九江人、自少不相識」といふ譯せしなり馴々しく呼  
かけたる妓の詞に應へうまく調子を取りたる客の様、見るが如くにして面白ろき趣向

なり横塘九江を難波堀江と譯したるも由ありて面白し、また郭震が子夜歌の陌頭楊柳  
枝、已被春風吹、妾心將斷絶、征人何得知、と云ふを柳澤其園が「街のやなぎいとた  
をやりにおれ春風が吹くわいな、私が心のやるせなさ、思ふ殿御にまらせたい」と譯  
したるもあどけなき婦人の言辞を其の儘に出してなまめかしく言ひとりたるまことに  
面白し、すべて原詩歌の落想を取りて我有となすにあらずんば斯る妙なる反譯は出來  
難きものと知るべし

●好事家のいまめ

昔し石昌言、李廷珪の墨を藏し人の之れを磨るを許さず、ある人戯むれて曰く「子墨  
を磨らずんば墨當さに子を磨らんとす」と後、昌言死し墓木拱するも墨固より恙なし  
好事家の戒とすべしと蘇東坡は云へり

●林羅山俚語を解釋す

陰見録と云へる書に曰く正保二年正月十九日の夜林羅山翁家康公に侍講せる折り列座  
の貴紳翁の博識を試みんと岡田淡洲先づ問て曰く蓬萊の島と云へる能狂言の中に鬼の

持たる寶は隠れ笠、隠れ蓑、打出の小槌、  
 のジヨ、ムジヨ、ムジヨと云ふことは如何、羅山曰く右のまなくは寶の中にて  
 も上々にして又此上に上上なしと云意にて上々無上々と云ふとなりと内田信州問て曰  
 く鎌倉に「ノツケン」堂といふあり昔し金岡納言こゝに來りてこの勝景を寫さんとす  
 るに筆に盡し難くして筆を捨てノツケになりたる故に此堂をノツケン堂と云ひ又筆捨  
 松とて今に在りといふ如何、羅山曰く金岡の筆を捨て、ノツケになりたるにわらず彼  
 堂は金澤より出る山越への坂の右の高き處にあり坂より仰ぎ見るゆゑに仰見堂と云ふ  
 と堀田加州問て曰く小兒の遊に左右の手を寄て鬼の皿と云ふ事をするに其詞に云く、  
 「タイドノ」一モタイドノ、二モタイドノ、タイガ嬢、梶原アノウン、メクラガ杖  
 ヲ、ツイテ通ルトコロヲ、サラバ、ヨツテ、ツイノケ」と云ふ事あり如何、羅山曰く  
 これは鎌倉の時、頼朝の意にくなひ威勢の強りし人々を數へ立てたるなり先づ「タ  
 イドノ」とは御臺政子なり「一もタイドノ二もタイドノ」と續けたるは並べ云べ  
 き人なさを云ふ「タイガ嬢」は頼朝の大姫君にて清水冠者の夫人を云ふ次は梶原は平  
 三景時なりこれ又た當時の寵臣なり「アノウン」とは安明寺とて時政の妻牧の方の一族  
 にて盲人なりしうは殿下に杖をついて歩くことを許され、此の人より逢ふものは皆  
 な避けて通せし故に「サラバ、ヨツテ、ツイノケ」と云ふなりと、それより段々の問  
 答あれども滞りなかりければ皆なく翁の細事に通ずるを感じあへり

●酉の日の奇答

ある人の妻、良人の爪を取りぬるをどめて今日辰の日なり爪を取り給ふ可らずと  
 云ふ傍の人これを聞て如何なる故にやと問へば辰の龍なり、龍は爪なくてかなふ可ら  
 ず大切の日なりと云ふ、傍はらの人笑てさあらば、其の許は酉の日はかりに時をつ  
 りて雄鳥をすゝめらるゝにやと云へばその妻大いに憤を洩れりとぞ

●和漢同情

大坂の一富豪妓を落籍して妾となさんとせるとき其の友人にて當時有名の俳諧師瓢水  
 と云ふもの「うちへいれなやいり野で見よげんげ草」の一俳句を贈りふりと云ふこと  
 い何人も知る所なるが支那にも「問花只合問中看、一折歸來便不鮮」と云ふ詩あり和

漢同情と云ふべし

芭蕉翁一虫の字に讚す

ある好事家に秘藏の一幅あり二虫の二字を横に書き列ねたり好事家流石に其意を解し兼ねしがあはれ面白き賛もぐなど當時名ある人々に接する毎にこれが賛を求むれども皆な其の解し難きに困む果て我の筆を下すものもなし、然るに或る日の事ありける芭蕉翁の不圖此家に宿られければ主人此上なく打喜びて急ぎ彼の幅を取り出つゝ、いかにで賛をしてよとありければ翁とりあへず

風と月裸となりて相撲とる

人は亡ぶも理は存す

理學の泰斗と仰がる、ガリレオ氏の未だ世に出でざるまでは一般に天動説行のれ太陽と太陰とたい宇宙間に回轉しつゝありて地球其外一切の天体の動のざるものなりとの妄想は普ねく人心を支配し誰れ疑ふものもなりしが氏の地動説一たび世に出づるや當時の社會の一齊に驚きたる中にも天動説を信なりと説さける聖典を金科玉條と奉ず

る宗教家及び羅馬法王は大に驚き斯る新説にして世信を得ば必竟宗教の衰微を招くの本なりと地動説を信するものを一概に邪門異端と目し苛刻なる火刑磔殺を以て處し竟に一千六百十五年に至り學士ガリレオ其人も羅馬法廷へ召喚せらるゝ事となり當時の裁判長カーデナルベラルミンより嚴重なる審理を受けたり然るに大膽にして自信の厚きガ氏も宗教の勢力強大なる當時の風潮には抵抗し難かりけん裁判長が氏若し邪説を奉ずるを斷念せずんば必ず反教者となし嚴刑に處せんとの申渡に屈從し遂に其非を改めて地動説を唱ふるを斷念せんと誓へり其後アルバン第八世が羅馬法王の位に就くや氏の以爲らく王會て余と深交ありモハヤ前説を唱導するも前日の如き咎を受くることなかるべしと是に於て氏は復び地動説を唱ひ出せしが法王も今や身、護法者の位に在れば舊知人なる氏と雖ども其儘には打棄て置くべきに非ずとて再び氏を法廷へ召喚したり此時裁判官の氏を責問すると又た前日と異なるなく氏もまた不平は益々激しきを加ふるも當時の勢ひ不得止前日同様誓約を爲さんと決答せり偕て氏は愈々法式通り嚴格なる誓約をなし終り徐ろに附添る友人を願み「トハ云ハ矢張り地は動きて罷まざ

るものを」と叫びたりとなん

●詩人コレリツジの奇行

往時より哲學者と詩人の言行に就ては往々意想外の譚柄ある事なるが中にも有名なる英國の詩人コレリツジ氏の言行に就ては最も奇談多きが如し氏の詩才は實に天賦に出でたるものと謂ふべく氏が有名なる詩篇は多く睡中ニ成れりと云ふ實に氏は平生睡中にあるか否らざるかを辨じ難きまでに、物思ひの深き人なりければ平素の談話舉動共に夢中に在るが如く見ゆるもの多かりき、或時氏は屋後の林下に逍遙しつゝありしに一人の小兒の遊び居りたるを見て氏は之を捉ひて談話を初めたり初めの程小兒も解し得べき平易諧謔の話しなりしも次第に話頭は高尚に進み其熱度の益々加はるに至るや小兒の泣叫ぶをも感せず恰かも演説者が壇上の「コップ」を振り廻はすが如く或ひは打叩き或ひは推し倒して縦横無盡に大談論を試みたるにありければ近村の小兒の氏を恐れて近つらざるまでに至りたるよしなるが尙ほ茲に右に類したる面白るき一話あり氏の友人にチャールズ、ラムとてこれも文學を以て著名なる人なり或時所用あり

てエンヒイルドと云ふ所を過ぎたるに偶々コレリツジに邂逅せりコ氏は久々の面會を悦び突然ラ氏の胸先なる鈕を捉んで四方山の談話を始めたるがラ氏は急ぎの用事あれば頻りに言を左右に構へて辭し去らんとするもコ氏の鈕の手を離さず夢中となりて談論し譚路益々進み熱中の度愈々高まるに従ひ鈕を捉みたる手のますく堅固にして何時放すべしとも思おれざればラ氏は愈々困じ果て忽ち一工夫を考へ出し「ポツケット」より小刀を取出しコ氏の捉みたる鈕の緒を切り去りて飛び退り其儘所用を果し數時間を経て前のエンヒイルドに戻りて見ればコ氏は尙ほ依然として切り離されたる鈕を手にしたるまゝ佇立して話しに餘念もなかりしと餘りに馬鹿ケたる譚にて或と多少の附加もあらんとの事なれと兎も角氏の談論に熱中するや身外一切の境遇を打忘るまでに至るの一斑を窺ふに足らんか

●三大儒椅子と「テーブル」に辟易す

或時柴栗山先生へ食卓一基椅子數脚を贈りたる人あり先生大に欣び以爲らく食卓を杯盤に充て椅子に凭りて燕飲せば最と興味あるとならんと折しも八月中秋の節に近かり

ければ十四日を卜し觀月の宴を開かんと平生別懇なる知友を招きたるも生憎其日の夕方より雨降出したれば遠方の人々は來會なくた尾藤二洲菅茶山の兩儒のみ來會す扱て三儒は椅子を鼎様に列べ酒を酌み四方八方の話をも爲す中主人は坐を立ちて勝手へ行きたれば二洲翁は直ちに椅子を下り茶山翁に向ひ眉を擧めて曰く「如何に主人の居られぬ間丈けにても姑らく坐して休息せん不慣れなる椅子に腰掛けされば兩脚に血の下りて最も苦し」と云はれたるも茶山翁も打笑ひ「何さま實に究屈の者なり」とて椅子を下らんとする折しも主人出來り此由を聞き「イヤ拙者も實は苦しき儘休憩の爲め乍失禮勝手へ立ちたるなり」とて三儒一齊に捧腹絶倒して更らに筵を陳べ着坐して歡を盡せりと云ふ

●宮本武藏の逸事

本邦二刀流の泰斗と稱せられたる宮本武藏は唯た其名を聞くだにも世人は身材長大、武骨逞ましき人物とのみ思ふなるべしと雖ども斯る猛き武士にも鶯の聲を聴く耳は別よして置くも昔し赤穂の義士が詠じたりし例しもある如く一の風流なる話あり武藏の

江戸に在るや吉原某樓の遊女雲井に狎れ情交最と濃かあり時しも寛永十五年の春の頃肥前島原の一揆も西國諸侯皆な幕命により夫々發向の砌り武藏も黒田侯の幕下に在りて彼地へ巡見として出發するとなりければ氏は雲井に告別せんとて仲の町に至り常の如く遊興の末出陣の用意を爲したるが氏の指物は篋を二本交又たるものなりければ雲井をして緋縮緬の袋を縫ひせて之を掩ひ又雲井が着用の紅鹿子の小袖を裏付したる黒縹子の陣羽織を着用して其日の扮装を整ひたり扱廓内の遊女共も早くも之を聞き付て其扮装を觀んとて仲の町に群集したるも武藏は聊か戯れたる氣色もなく悠々として通り過ぎ大門外より迎の馬に打乗りいと勇まし氣に出發せり

●林子平嫂と同衾す

豪放卓落を以て近世の偉人を壓倒せる林子平の言行に就て凡俗の耳を驚かす程のと少なからざるが茲に一の奇談とも云ふべきは氏の實兄主膳の妻が疫病を患ひ病勢頗ぶる劇なりし時親戚は皆な避けて誰れ顧るものもあうりしに氏獨り毫も怖るゝ氣色なく日夜病床に侍りて看護至らざる所なかりし然るに藥石其効を奏せず遂に敢なくも締切

れ愈々葬送の前夜となりたれば子平兄弟を始め親戚共打寄り戸を護りて伽を爲す内夜もいたく更たれば皆々其儘打臥して睡りに就きたるが夜半過ぎ頃に兄主膳不圖目を覺まし四邊を見廻はすも子平の見ぬざるに予不審に思ひ數々呼べども更らふ答へをせざりけるにぞ愈々不審と思ふうち忽ち尸衾の裡に鞠肝の聲を聞くがさゝト衾を發せ視れば子平は嫂の死体に添臥して熟睡して居れり主膳は餘りの事呆れ果て子平を喚起して之を語るに子平は喚起されて最不平なる面色し呟いて曰く「夜深く寒酷しが故に暫らく睡に就かんと欲して尸の衾を借りたるまでなり嫂已に死したるものを家兄猶は何の嫉むところある」と其儘又た舊處に打臥せりと其平素物に拘らざると大概如斯し

●大雅は毛氈の下に在り細君は唐紙の中に在り

本邦著名の畫伯中に大雅堂と云へば遠く海外にまで聞へ其豪宕洒落の風は大いに當時畫人社會の耳目を駭かしたる程なるが或時戀意なる友人氏を訪ひ來り圖らずも清談雅話又時を移して夜に入りしかば氏の留むるに任せ其家に一泊したるは相應に立派なる

郡内縞の夜具蒲團を出して敷き與へたり、されど襟の邊に垢つきて汚れたるは折々泊り客のある故ならんと思ひ何氣なく打臥したるが深更に至り廁へ行かんと起き出で勝手知らざれば主人を呼起し案内を請たるに大雅は寢衣のまゝ取次の間の毛氈の下より匍匐ひ出でたり友人は之れを見て大に驚ろき扱ては夜具の餘分なきまゝ自分の夜具を予は貸し與へたるならん最にも氣の毒に思ひ細君は尋ねたるに妻の玉瀾は諸方より執筆を依頼されたる唐紙の裡よりガサ／＼と起き出で來れりといふ古謠に最愛の鉢の木を焚きて旅客を慰めたる佐野の渡の隱士の佳話あるがそれにも劣らざる一對の佳話といふべし

●秦皇の土功も亦驚くに足らず

世の開明に進むに従つて石炭電氣等の作用益々廣く行われ來り所謂鐵世界なるの今日に及んでは人間の勞力を減省することこれを以前蒸氣電機等の發明なかりし日に比すれば實に驚くべきものあり、今左に一例を示して之を證明せんに彼の漠々茫茫日月沙より出でて沙に入る亞非利加洲中の沙漠原頭に突兀として空際に聳ゆる世界七大奇絶

の一と稱せらるる尖頭塔の古代大工事中に在りて最も駭くべきものなるこの夙に世人の稔知する所なるが曾て英國の女學士マルテノーは亞非利加洲漫遊の際尖頭塔を過ぎ其の非常の大工事なるに驚嘆する餘り其漫遊日記中に於て今日文明時代の技術家工學者も却つて遠き古代に斯る大工事を成功したるには及ぶまじと公言するや此事忽ち歐洲の一大問題となり工學士輩は競ふて其妄を辨ずるもの多く中には若しも托するものあらば斯ばかりの工事は斷じて余れ引受けて成功せんとまで斷言せる技術家さへありたるが就中デュッピンなる學士の調査の一たび世に出るや殆んど滿天下人士を絶驚せしめたりと云ふ其説に曰く彼の有名なる「ピラミット」の成るや右の學者の記述する所に據れば晝夜間斷なく十萬乃至三十萬の人夫を使役して二十年を費し始めて成功したる者なりと然して今ま之が勞力を積算すれば百五十七億三千三百萬立方「フット」の岩石を「フット」の高さに扛るに均しこれ随分過大の勞力なるが如しと雖も今や假りに埃及人をして蒸氣力を利用してせしめたりとせば僅かに十八時間にて之れを扛るを得べし即ち十八時間と以て此の大土工を成功するを得べし豈「ピラミット」の工事に

駭くを要せんや現に龍動及西北鐵道線の敷設其功を成したる勞力を前同様の法を以て積算すれば實に二百五十億立方「フット」の岩石を「フット」の高さに扛るに同じ即ち「ピラミット」の土工に比すれば正に九十二億六千七百萬立方「フット」丈大なる岩石を僅かに五年弱の時間に二萬の人夫を使役して其一「フット」を扛げたるに齊し然らば則ち漫り埃及人の大土工に駭く可らず古を羨んで今を誹るものは愚なりとの言は是を之れ謂ふなり嗚呼文明の利器も強大なる哉因之觀之若し今日に在りて苟くも秦皇漢武の冀望を存する者あらば日々に「ピラミット」を造出せんとするも亦難からざるべし豈に二十年の長日月と十萬二十萬の大衆を日夜叱咤するを要せんや

● 俳優松本錦升の妙技

俳優松本錦升中年の頃天下茶屋の狂言當間三郎右衛門に扮して演技せしとき一日土間の中央に魚河岸の若衆ども云ふべき氣負の客三四人あり口を極めて三郎右衛門を罵言しありしが伊織を詐殺する段に至り堪がたくやありけん忽ち一同舞臺を跳り上り己れ惡漢憎みても餘ある所爲かな伊織の警思ひ知れと錦升を取圍み散々に打擲せしかば

技、半ばにして幕を引き錦升急病發したる由を述べて觀客に謝し其日の代役にて演技したり、扱て打擲せし數人は固より錦升に意趣遺憾あるにもあらず唯餘りに狂言よ身が入り測らずも如此きの暴行を働きたるものにて満座へ對し今更面目なく潜かよ立歸らんとする折、錦升使を以つて只今の御禮申上度に付某樓へ立寄呉れらるゝ様にとの由を言越したるにぞ何となく底氣味悪く体よく斷はれども固く請ふて止まざれば今は詮方なく案内よ任せて某樓に至れば錦升出迎ひ恭しく樓上へ導びき欣然謝して云ふ様扱もく今日程喜ばしき事はあらず僕年來丑を専技とし今日迄種々工夫を凝し何卒看客をして精神より我技を憎しと思ひしめんと熱心せしが今日まで未だ其の人を得ずしかるに諸君の我技を鑑識給ふありて年來の工夫誠に徒爾ならざることを得たり元來諸君の僕を殿しは僕を殿ちしにあらず三郎右衛門を殿ちしなり僕の扮ちし三郎右衛門が諸君に殿るゝまで憎く見ゆるは僕が熱心したる工夫の或は熱せしなるべしと思へば誠に喜悅に堪へざるなり依て聊か祝酒を酌で諸君に謝せんと強て枉駕を乞ひたるなりとて即ち盛んに宴を開き歡を盡して去らしめたり是れより錦升の名藉々三都又遍く終る其技空前絶後の聲譽を得るに至れりと云ふ

●寧ろ舌を斷つに若かず

昔時英國の國會に於ては太く其議事の外に洩るゝを厭ひ議員の演説、議事の始末等を公刊するを嚴禁せるのみならず議員各自が備忘録を記すとさへ甚だ八ヶ間敷りし由なるが一千六百四十一年三月の國會に於て議員エドワルド、アルフォールド氏が何か手帳に書留め居る様子を前席を占めたるウヲータル、ウオル、氏が見咎め「後席なる一議員の何か手記する所あり且其隣席なる議員と密語するの後議席を立ち去れり宜しく速かに兩氏を訊問すべし」と議長に請求したることありと云ふ又或時一大問題の起れるに當り一議員は動議を起し「議長閣下の斯る重大問題の議事の中に各議員が備忘録を書留むるを殊に嚴重に制さるべし」と云ひけるよ側なる一人の諧謔滑稽に長じたるジューズ氏の微笑して「備忘録に舌なし議事の漏洩を防がんと欲せば寧ろ議員の舌を斷つに若かず」と冷評せりと又た以て當時の狀を想見すべし

●支那拳



支那にて一時元實一對といふ拳が専ばら流行せし由にて手の出し方は我國の釣瓶拳と大概同じとの事なれども流石は支那丈ありて稱呼は甚だ難かし則ち左の如し

一品當朝、兩榜材、三元及第、四季發財、五經魁首、六位大人、竹林七賢、八仙賀壽、九子連登、十足賣買

一寸聞くと如何にも不思議なれども遣つて見ると中々風雅で面白きものなりと云ふ

●一對の風流(芭蕉と李白)

三河國八ッ橋の杜若は在五中將の「からころもきつゝなれにしつましあればはるくさぬるたびおしぞれもふ」と「かさつばた」の五字を折句よして詠る古歌と共に名高き名所なり一歳ばせを翁爰は杖を曳き句を案じけるに已に中將が其趣を言ひ盡したる後なれば兎角言よる可き言葉もなく「かさつばた我も發句のこゝろあり」との一句を殘しけるを今かして碑ありて此句をしるしありと云ふ翁は流石に名人なるが故に強て蛇足を添へざりしなり又支那にても斯る類ひはある事にて李白が黃鶴樓に登りて詩を賦せんと思ひ來て見れば早や李白に先だつて崔顥が爰に來り詩を作り置きたる

を見るに甚よく出來面白き作意にてありければこれより一等上へ出る佳作したりども人の跡を踏む心地にて面白からずとてそれより所をかへて金陵の鳳凰臺に登り詩を作りたり此等また風流のわざにて芭蕉が他の趣向を言はずして我も發句の心ありとばかり云ひたると趣を同ふして風雅の意味いと深し

●相撲と二味線

岸本文藏は寛政享和の頃二味線の巧手を以つて名一時に高く弟子千人に上るに至る當時皆川淇園先生儒學を以つて名聲ありて先生の通稱も亦文藏なりしかば世人呼んで兩文藏と云ふ、文藏相撲を好み興行あれば初日より一日も欠かず見物し常に土俵際に安坐して遠慮もなく大聲に其手の巧拙を品評せしかば小相撲の輩何れも氣色あしき事に思ひ折もあらば恥しめんと心掛たりしが或時例の大聲にて左が得手だの右が得手だのと云ふは畢竟相撲を知らぬからの事なり扱々氣の毒千萬の事かなと言ふを聞くや否や平素憤り居りたる小相撲共何うい以つて猶豫ふべき四五人バラくと立かゝり、彼奴今日の悪口こそ聞き捨ならずいざ其奴を土俵の中へ埋めて呉れんと押つ取り圍み既

に斯よと見ゆければ當時の關取苦が島は急ぎ此内に飛入り弟子相撲を制し借て文藏に向ひ何故なれば得手といふが相撲を知らぬ譯なるやと詰り問ふに、さればとよ己は三絃をもて世を渡るものなるが弟子の中には一の糸が得意だの又は二三が手に入たのなと云ふものもあれど三糸とも各々其壺にはまらねば律に協ひて三絃を弾くとは云ひ難し角觥も其通りにて左の指だから勝ち右の押だから負けだと思ふは未だ相撲を知らぬ上の話にて眞の相撲となりては左右の差別に依り勝負は無き筈なり夫故餘り氣の毒なれば餘所ながら氣を注て進せし迄なりと答へければ苦ガ島は思はず横手をハタと打ち其事なり 僕が平生聲を枯して教ゆれども小奴共は更らよ合點がゆかぬなりと散々に弟子を叱り直ちに文藏を二酒樓に伴ひ厚く饗應したりと幻妙、旨を一にすと云ふべし

● 磊落家の年賀

曾我耐軒翁は江戸に生れ參州岡崎に住したる儒者にて維新の際京師に召され磊落を以て聞えたる人なり或る年の元日よ拜年の爲め知人の許に至りけるが折節主人も在宅にて先づ奥の間に通りしが暫らくして主人も出來たり互に拜年の口上も終りたれば主人

は頻りに安坐を勸むれども辭して聞かず對話の際にも始終食指を疊上へつけて離さず如何にも謹慎に見ゆるにぞ主人も「平生磊落故年頭だけは禮儀を守るにやあらん流石讀書家丈ありて妙な處に味のあるものかな」と密かに感じつゝ酒肴を出して饗應すうち翁は又た永日とてソコゝに立去りしが杯盤を收めんと翁の坐したる邊を見れば表替をして未だ日も経ざる疊に烟草の吹売の落ちて焼けたる跡のあるにぞ主人も思はず吹き出し翁の謹慎なりしは此の吹売の故にてありけりと一笑せり

● 文祿の軍人毛氈の用を知らず

昔時豊太閤薩州に攻め入りしとき赤き毛氈を獻トたるものありければ太閤は之れを諸將に配られたり當時未だ多くの毛氈我國に渡り居らざりし頃なれば諸將何れも其用を知らず打よりて何んの爲めに用ゆるものならんと語り合ふ内、一將曰く余曾つて檀那寺に物を贈りたるとありしが住持が斯る赤き断片を肩に掛けて禮に來りたり意ふにこれも必らず敬禮を表する爲め肩に掛くるものならん然らば此の御禮は此の物を肩に掛けて參る可しと相談一決し錦々毛氈を肩にして太閤に拜謝したりとぞ當時の質朴想ふ

可し

●林羅山白の字一閉口す

羅山先生林道春翁は一代の鴻儒と稱せられて博識比なかりしが當時の習ひとて多く和漢の文字を識るを物識と唱へて翁は漢文字世話文字とも拾數萬言を記憶せりと世上に言囃され自らも往々誇るとありしと云ふ一日妙壽といへる老僧翁を訪ひ頻りに其の博學を稱嘆せしに翁も誇顔にて凡そ天地間に知らざるものとはなしとまで大言を吐かれたるに老僧は微笑しながら翁に向ひ九十九と申す世話文字は如何にと問ひたり翁の曰く未だ識らず老僧の曰く白氏文集に九十九は白也とあり蓋し百に一畫を欠くが故なりと流石の翁も之を聽て赤面したりと云ふ因に記す上總の海邊に九十九里の濱と唱ふる有名なる地あり一名之を白里と稱す或人其故を里人に問ふ曰く白字の上に一を加ふれば一百なるが故なりと海濱の漁夫が偶然の下名自から理に合へるも奇なりと或老人の物語なるが道春翁の話に能くも似寄りたる話と謂ふべし

●物徂徠鼠の婚姻を釋す

享保六年の事なりとか支那より新書籍渡來せしかば將軍吉宗公は當時高名の儒者に命じて句讀を點せしめんと其の人を撰ぶに徂徠其の撰に當りければ町奉行大岡越前守は徂徠を召し將軍家の命を傳るに先だち彼れが才を試みんと書籍の事は言ひも出でず鼠の嫁入の儀は付尋ね度事ありて今日は足勞をかけたるが婿の名は何と申すやと尋ぬる詞の未だ終らざるに徂徠は子の助と申なりと答ふ嫁の名は如何にと尋るに廿日の前、舅の名は如何にと問へば忠左衛門、嫁の父はと云ば鼠右衛門、用人の名は鼠平又若黨中間の名は一人は四郎又一人は九郎と申候と答へしかば越前守は重ねて女中の名はと問るゝにおはや、おどり、おひさ、姑の名は何と申すや姑は先達て猫に取られてなしと云ば越前守も其才に感じ新來の書籍に句讀を點することを依頼せりと因に云ふ鼠の嫁入の赤本に婿の名を忠助とせるは小兒の能く知る所なるが漢土にも又此の名ありと覺ゆ抱扑子よ曰く百歳の鼠其名を仲と云ふと和漢同日の談亦妙と云ふべし

●笑堂福集三則

往時或歌人の子に資性極めて遲鈍なるものありけるが一日雅友其家に集まりて連歌の

會を催ふしたる折り之れに出題を命じたるに百考すれども案じ得ざるにぞ終には困じ果て避けて圃に赴きたるが溺する折り不圖思ひ付き坐敷も復り來り責塞ぎに「わたまふら〜平ひたく〜」と唱へ出でしにぞ一坐の思はず失笑して誰も句を着くるものなかりしが一客あり取り敢へず「水鳥の羽根をひろげて起つときは」と詠じ出せるに坐客皆な其妙案に感じたりと云ふ

又宗祇は有名の連歌師なりしが或時伊勢邊に行脚せし折り小兒の巧みに樹に登るを見て「つる〜と猿より軽く樹に登り」と詠じかけしに小兒は忽ち樹上より「犬のやうなる法師來たれば」と讀次ぎたるにぞ流石の宗祇も驚いて口を塞ぎ其儘立去れりと

又一人の貧士あり江戸淺草藏前なる或札差の方へ金子を借入れんものと其家に至り種々談じたれども一向に肯んせざりければ貧士はいと不興氣なる面色にて「九十九夜深草ならで淺草へ通ひつめたる少々の金」と囁きながら吟せしかば札差大に其頓才に感じて金を貸し與へたりと

又一盜あり處々よて盜業を行ひたる末終に公けの手に掛り白洲に於て幕府の成敗どて

糺問の上斬罪に處せらるゝ旨申渡されたれば件の盜人最と萎れたる体にて今はあぢきなき身の上とはなれり憐れ露ばかりのお情けに年頃嗜みし道の候へば今生の暇乞に辭世の和歌一首遺させ賜はれたしと乞ひたるに役人も「ソハ優しき志しなり速かに仕るべし」と許されたり盜人其許しの聲の下より「かゝるときさこそ命の惜からめかねてなき身と思ひ知らずば」と聲高らかに二度まで吟じかへしたれば役人は餘りの事に思ひ「其歌は太田道灌の名歌なるに」と答めたるに盜人は平氣にて「左様にて候これぞ今生の盜み終りに侍る」となん答へたりしと世には氣樂なるものもあるものかな

●草書體の演説

往時は英國々會議場の議論も随分粗雑にして議員の演説杯も往々聽者をして解釋に苦ましむると多かりし由なるが夫に就き茲又一の奇談ありガルウエー地方撰出の議員マ一テン氏が一日議場に立つて演説するや初めの程は滔々として懸河の辯を振ひ頗る聽者を感じしめたるが其説の半ばより如何がしけん舌頭濺ふりて聞き苦しき語句極めて

多き中も最も解し難き語を特高調子に述べたるに予聴衆も可笑しく思ひ中又はヒヤ／＼の聲を發して愚弄する者さへありしが翌朝の某新聞の演説の大要を筆記し辯士が高調子に演じたる最も解し難き語句を殊に目立つ様草書體に印刷せり（恰かも我邦文に圖點を附するが如し）然るにマーテン氏の之を讀むで誹毀の惡意に出たりとなし大に憤激し直ちに新聞社主を相手取り裁判所に告訴せり被告なる該新聞社主は其記事の眞實なるを辯疏して止まず遂に國會に請求して證人を召喚の上法廷に於て其事實なるを證明せり於是マーテン氏と對審を開かれたるに彼是論辯の末氏は終に語窮し「如何にも新聞紙上に記載の通りの説を演べたるには相違なし併しながら余は草書體の語を吐きたる覺なし」と辯じたるには法官被告人共に胞腹絶倒せり

●南華犢鼻褌に畫き盤溪之に贊す

幕府の頃東都の雅客磐溪、鉄心、海鷗、秋帆、南華等深川の飛鷺樓に會飲せるとき紅袖座を圍み絲竹湧が如く頗る盛會なりしが時恰かも三伏の節なりければ海鷗衣服を座に脱棄て別室に行きて浴してありけるは南華フト海鷗が脱ぎ置きし褌に目を着け醉に乘

と戯に筆を取て梅花を畫けるに磐溪最と興ありと稱し之れに贊して曰く昔者劉隆準解三磨儒之冠一洩三溺其中一既已爲三快事、今解三書生犢鼻褌、奮筆一掃梅花、以此防三醜夷腥膻之氣、洵爲三千古大快事一矣、抑小西行長揭三藥戶巨紙囊、以征三韓、今試以三此褌爲三章旗、橫三行醜夷之中、則其爲三快果何如也、と一坐之れを見て絶倒す

●蟬丸

蟬丸は何人も知る所の歌人なれども其履歷に就ては唯だ「誓にして歌を能し又能く琵琶を彈じ逢坂の關所近く住めり」といふの外に更に詳らかならず或は延喜帝の落胤なり杯云ふものあれども附會の説たるは疑ひなし併し何によりて斯る附會を生じたるやに至りては色々の説もあれども伊勢參宮名所圖繪に載せたる水戸某學士の説最も適切なるが如し曰く「唐南朝元帝の諱を延基と云へり延基の三男生れながら醜にて其上旨目なりければ遂に之を相關と云ふ所に棄玉ふ此子の名を彈兒と云ふ如何となれば幼年より瑟を能く彈せり故に斯く名付しなり今此事によりて日本の蟬丸の事を考ふるに延基と延喜と音相通じ彈の字と蟬の字と形相似たり相關と逢坂も義相近く又延喜帝の

子を棄て給へる事情も稍々相類するものあり去れば唐の元帝の故事を附會したるものなるべし」と此外玄同放言に曲亭馬琴の考證あれども省く

●善言を賣るの僧

その昔「タータル」の一侯に何某といへる君あり一日臣下を従へて遊獵しけるが途中にて一人の僧の聲高らかに若し千貫の金を吾に與ふる者わらば吾れ其人に善言を訓ふべしと呼はり〜街上を趨り行くを見たり侯と其僧の狀を視るに如何にも思慮ありげなるものなりければ之を聴かま欲しく思はれ即ち從者に命じて千貫の金を與へしめたり其時彼の僧は先づ其金を受け收め最も重々しく容を改め威儀を正しさも尊げなる聲音を發し「凡て事を爲さんとせば宜しく其結果の如何を熟慮すべし將來の得失を察せずして輕々しく手を下すと勿れ」と侯の從臣等ハ之を聞きて斯る陳腐の語を吐きて千金の報酬を食るとは憎くき賣僧の舉動かなど皆口々罵りければ獨り侯は心の裏に會得せられし所やありけん慇懃に僧に謝し別れて城に歸られたり其後ち數日を経て侯ハ侍臣に命じ宮中の壁障子を首めとし手近に用ふる諸の器具に至るまで悉く彼の一語

を書寫せしめ或ハ彫刻せしめたり是より一二年を過ぎたる後重臣の中に逆意を企て陰かに侯位を奪はんとする者あり侯の侍醫ハ幾許の財貨を與へて以て己の黨に誘ひ入れ侯を毒殺せしめんと謀りけり會々侯の疾に侵され侍醫を召されければ侍醫は時到れりど心に悦び即ち宮中に伺候して侯の病體を診し了り頓て毒藥を調して器に盛り恭しく捧げ持ちて侯に進めんとしける時忽ち壁の上を見るに「凡て事を爲さんとせば宜しく其結果の如何を熟慮すべし」云々の語あり顧みて側なる屏風を見るに亦同じく其語を記したり是に於て侍醫は猛然と心よ省み己れが思慮の淺くして重臣の謀に與みせしことの愚かさよと深くも恐れ悔ひければ思はず身体慄き震へ執る手も自づと痲痺れ器をばハクと地に墜せり侯は其様を視て之を異しみに急に近豎を呼びて侍醫を縛しめ痛く糺問せしめけるに侍醫は包み隠すに由なく盡く其實を白狀したり是時侯は自ら覺ゆる横手を拍ちて聲を揚げ「ア、彼の僧は眞に我を欺かず一語の價は千金よりも貴し」とて遂に侍醫の罪を宥し重臣を執へて之を誅したりとぞ

●悠長なる職業

昔時悠長なる職業甚だ多く元祿の末正徳の頃までは江戸に耳の垢を取るを營業とせるものありし由にて其角の句に「観音で耳をほらせてはどゞぎす」とあり又た京羽二重と云ふ書に唐人越九兵衛と云ふもの耳の垢取を營業とせる由を載せたり又釜を磨くを營業とせるものありしと見え西鶴織留と云ふ書に「達者なる男が釜みがきにありきける、大釜五文其外の大小によらず二文づゝ也云々手前に人を持たぬ者の勝手よし」云々とあり此等は随分悠長の職業といふべし然れども今日の人をして最も奇異に感せしむべきは當時猫の蚤を取るを營業とせるものゝありしとなり前の西鶴の織留に云く「五十ばかりの男風呂敷を肩にかけて猫の蚤を取ましょと聲立てまはりける。隠居方の手白三毛をかはゆがる人取れとて頼まれけるに一疋三文づゝに極め名譽に取りける。まづ猫に湯をかけて洗ひ、ぬれ身を其儘狼の皮又包みてしばし抱きけるうちに蚤どもぬれぬる所をうたてがり狼の皮に移りけるを大道へふるひ捨ける」云々又「舞あふぎ」と云ふ書の序に云く「大坂の西鶴が咄しにちひさい風呂敷包をせなかに掛て猫の蚤とろく」と云て口過するものありと語られし」云々とあり併せ考ふれば此の營

業ありたるに疑ひなし

●支那の藝妓及酒間の遊戯

藝妓を酒席に聘するると其玉を數ふるに線香を以てするは我邦の習慣なるが或る書に支那にも同じ様の事あるよしを載せたり唐の世の頃には藝妓を樂工と稱し酒客の之を聘するものあれば酒席に陪して興をたすけ揚代を取るなり蠟燭一本の時間錢三緡なりと云ふ三緡は開元通寶百八十枚にして今の十八錢位にあたるべし又た支那も我國の酒客が酒間を戯るゝ拳に同じき遊戯ありと覺ゆ六研齋筆記に云く俗飲手指の屈伸を以て相博す之を豁拳と云ひ或は豁指頭と云ふとこれ共に拳の事なるべし又云く唐の皇甫松五指に各々名を命じ大指を蹲鴟、食指を鈎戟、中指を玉柱、無名指を澹虬、小指を奇兵と名くと又其の掌を虎鷹と云ひ指節を私根と名け五指を呼で五峯となす云々然れば支那の往古既又梅戰戯ありと見えたり

●王將と玉將の名

將棋の駒は王將二ツあり其一を玉將として區別しあるは何人も知る所なれど其の何ん

の故なるやに就てい諸説紛々たり普通の説は據れば初めは雙方共に王將の銘ありしを地に二王ある可らずとの理に本づき一を玉將と銘するととなせりと云ふ併し隨分疑ひしき説と云ふべし其所以は王ならば單に王と銘すべく將ならば單に將と銘すべき筈なるに王と將とを混稱するの理あるまじければなり由りて將基の諸書を考證するに開祖宗桂より四代目宗桂まで代々著述せる所の將基圖式に雙方共玉將とありて王將の銘なし去れば玉を以て大將と見立て金銀を副將と見立てたるにあらざるか如斯く解すれば金將銀將の名も據りどころありて大ひに面白き様に覺ゆ

曾我蕭白の逸事

曾我蕭白は京師の人畫を能す性又剛直にして屈せず一日本願寺主、使僧をもて畫を乞へるとあり使僧は大教主の命を鼻にかけ驕然として蕭白を尋ね來り吾れは門主の御使なり蕭白在りやと音なふ蕭白之を聞き内より大聲をわけ罵りて曰く汝何物の袴子を猥りに不遜なる只蕭白と計り呼べる、蕭白はこゝに居らぬとて使僧を追ひ還せしと云ふ又九州に遊歴せる頃備前侯蕭白の能畫なるを聞き金地の屏風に畫を乞はる蕭白命に應

と潑墨淋漓一氣にして畫成る候殊に之れを賞し銀子七枚を賜ふ蕭白曰く數枚の銀子吾が大手筆に酬ゆるは足らずと賜を受けず侯大ひに恥ぢ更らに銀五十枚を賜ひたり蕭白又厚く大雅堂に交る或る時大雅蕭白に約して曰く近日吾家に尋ね來らば手打の蕎麥を以て馳走せんと蕭白固と蕎麥を好むが故に日を隔てす大雅を東山に訪ひ相對して雅談時を移す内早や午頃となれども談笑して已ます午過る頃大雅曰く吾腹枵然たり君も然こそあらんとて妻玉瀾に茗粥を煮さしめ相與に之れを喫し又元の如く風月を談じ深更に至る大雅云く君歸路に就く時此の暗夜に提燈なくては叶ふまじ去と吾家此の具なしと圓燈を以て送る蕭白直ちに之を提げ蹣跚として家に歸る二人共に蕎麥の事は打ち忘れたるものゝ如し

箱入娘、鼻毛長し、蓼食蟲

深窓の少女を箱入娘と云ひ、鑽隙の失行あるを瑕附と云ふの俗諺は漢書及び佛書より出でたるが如し漢書に曰く武帝幼なる時景帝之を問ふて曰く兒、婦を得んと欲するや否や更らに長公主の女を指して曰く阿嬌好きや否やと武帝曰く阿嬌を得ば當に金屋を



作りて之れを貯ふべし云々是此俗諺の由來せる源なる歟、又佛書普曜經に云く佛、經法を説き度する所、無量なり耶輸夫人其の子羅候羅を携へ來詣して問訊す時に王の屬僚咸く疑ふ太子國を去て十有二年何によりて子を生むと佛、群僚を告げて曰く耶輸、節を守りて瑕無し云々去れば鑽隙の失行を瑕付くと云ふは佛書より出しならん歟、鼻毛長しと云ふ俗諺も亦佛典より來れるが如し四分律に曰く比丘企あり鼻中の毛あらはる俗之れを笑ひ譏る依て佛に告ぐ是に於て佛、錮を用ゆるとを許し給ふ比丘企金を以つて之を造る佛之れを許し給はず唯だ銅鐵を以つて作れと制し玉ふ云々去れば鼻毛の長さを笑ふ風俗の蓋し古し「醜婦を愛する者を藜食ふ蟲もすきく」と云ふ佛書雜事律に曰く昔し一の婆羅門あり其妻と好からず一日婆羅門菓樹に上り自ら熟菓を食ひ不熟菓を妻と與ふ妻怒て自ら樹に上る夫乃ち下り棘を以つて樹を圍むで去る偶々重興王、獵に出で樹上より美人のあるを見て乃ちは之れを下さしむ婦人具に王に告ぐ王婆羅門を呼んで問ふ、答て曰く元と惡婦なれば我れ之れを棄てたり王曰く汝棄れば我れ之れを得んと遂に納れて夫人とす婆羅門由りて別の妻を乞ふ王乃ち宮女を集め彼れの好み

に任せて擇び取らしむ婆羅門熟見して一女の醜態鬼に似たるものを指し此婦人可なりと云ふ是れを美を棄て、醜を好むの宿因と云ふとありこれ實に我國の俗諺に適へる事實と云ふべし因に曰く藜食ふ蟲は文選放歌行に藜蟲は藜莖を避け苦に習ふて非を言はずとあり又楚辭に藜蟲は苦惡を食し甘美を食はざるものなりとあり又左思が魏都賦に藜蟲は辛を忘るとありこれ又俗諺の由來する所なる歟

●葛飾北齋交を瀧澤馬琴に絶つ

浮世繪を以つて有名なる葛飾北齋は性、快活瀟洒資を以つて意に介せず俗塵の煩はしさを厭ひ江戸の春木馬場と稱する静閑の地に居を卜したれども家は極めて狹隘にして只だ膝を容るゝに足るのみ冬時火爐を擁して纒かに寒を凌ぎ衣服を換ふることなきが故に虱之れに生ずれども晏如たり曾つて豪商某來り訪ふて揮毫を乞ふ翁偶々南軒に坐して虱を捫りてありけるが答へて曰く我れに差掛りの急用あり乞ひに應じ難しと見向きもせず依然虱を捫りて止まざるにぞ某は失望の体よて立去らんとするを見て翁も氣の毒とや思ひけん急よ之を呼び止め其の需め應ずべしと云ふに予某も初めて喜

こび謝して歸らんとするに又呼び止めて曰く他人若し我居宅を開くとあらば清潔華美を以て答へよ」と翁又初め馬琴と深き交あり馬琴が南柯後記を作れるとき翁に挿畫を依頼せし圖の刀屋道次が立廻りの場にして口は草履をくわへ裾を寒ぐるの狀を注文しけるに翁笑つて曰く此の汚穢物誰か之れを口にすべき若し然らずとせば君先づ之れを口にせよと馬琴大ひに怒り遂に交を絶らたりと云ふ其磊落にして粗豪なる概ね常よ此の如し

●國會は猶ほ猫の如し

英王チャールズ一世は暴政を極め一千六百四十九年の大革命に命を刑臺に落したる人なり會つて劇しく國會の抗撃を受けたるとき王は歎息しつゝ左右に語りて曰く「國會は猶ほ猫の如し」左右其の故を問ふ王曰く「卿等夫の猫を見ずや其の少弱なるも當りてや柔順極めて愛すべきも其老ゆるに隨つては次第に狡黠となり又た次第に悪くら敷なりゆき復愛し近く可らず國會も亦多く年を経るに隨ひ益々御し易からざるを覺ふ」と王は英國の諸王中最も國會の爲めに窘なめられたる人なれば斯く感じたるも無理ならぬことこそ

●徹夜國會の議事を開く習慣

英國著名の記者ヘンリーメイン氏の記する處に據れば英國々會の開會時刻は古代に在りては一般に早く大抵午前八時頃には一同に打揃ひ其最も早きは午前六時若くは七時に開會し同十一時頃散會し午後の委員會を開くを例とせり、其後チャールズ二世の頃には一般に公務を執るは午前九時より始むるを通例とせるに當時國會は午後四時より開會するを常例とし爾來時を経るに従つて次第に遅くなり近代に至つては大抵午後十時の開會を恆とするに至れり左れば散會は何時も翌日の午前二三時にて少しく重要な問題の出るときは始終徹夜に開議する程なれば議員中にも種々の苦情の絶ゆる趣なるが就中アーサー、オンスロー氏と一千七百五十九年の國會開期中は書簡を其知友の許に寄せて不平を洩らしたるとあり曰く「前略」近來我國會の開議時刻の段々遅く相成り候は誠に閉口の至り又御座候一体今に始めぬとながら斯く夜中に至り開議致候義は甚だ以て不都合千萬の事と奉存候拙者事此儀に就ては毎々之が弊風を矯正せんと

努め候得共古來漸積の習慣とて拙者の提議は何時も排斥せられて行はれず慨嘆の至りに御座候抑も如斯人間安眠のため必要なる時間を消費せしむるは幾んど天理に背き人生快樂の時を盡く奪去るものと謂ふも強ち過言に有之問敷云々」至極情理に合ひたる評言といふべし

●國會議場の夢物語

國會又は古來夫々成規ありて開議退散休憩の時間とも大抵一定し居る事にて休憩時間又は必ず休憩するの例なるが今や英國中世の記者アイザック、デズレリー氏の記録中に左の一話を載せたり一千六百二十八年四月の國會開場中國王は何か議決を急がせらるゝ事のありてや一日使者を國會に遣りせり其宸翰の畧に曰く「追々閉會の期も切迫せるの今日可成休憩等を見合はせ議案の決了を取急がんことを冀望す云々」議長は書記をして朗讀せしめ之を衆員に報道するや一同其恆例に非ざるを訝かり屢々請求して宸翰を讀直さしめ大に駭き噪ぎ或は王命の恆例に反するを太く非難し或は王は國會の權利を蹂躪する者に非ずや等憤然色を作す者さへありければ此結局如何あらんと

互ひに顔見合せたる際頗がて末席に扣へ居たる一人の田舎風なる議員はツト起つて議長と呼び掛けたり一同何人ならんと視返ればこれ別人ならずゼームス、チサルソール氏なり氏は先づ大聲に「請ふ本員をして予が昨夜の夢を譚るの自由を與へよ」と述ぶるや議員中一二の者は堂々たる斯の國會議場に夢物語りの無用なりとて之が制止を議長に求めたるもありたれども氏は之を耳にも掛す説き出して曰く「昨夜予は夢に二ヶ所の良牧場を觀たり其一所には群羊多く集り他の一所には牧人在り而して兩所を横ざりて巨溝あり相隔たると數十間粗末なる獨木橋ありて之に架せり」議長於是其議事に關係なきの發言なりと認め之を制止せしに衆議員は其譚の如何にも面白氣に聞えければ「制止するに及ばず續いて發言せしめよ」と呼ぶもの多かりければ氏は更に話を續ぎて曰く「時に一方より羊の一群牧場を出で、橋上に来る又他の一方より同時に一人の牧夫將さに橋を渡り過ぎんとするに會せり而して其橋は極めて狹小にして兩者同時に行き過ぐるを得ず、斯る場合に遭遇せば諸君は將に如何せんとするや（謹聽々々）斯くて群羊と牧夫とは互に相譲らざるの体に見ゆるが群中一頭の老羊は群羊に

語つて曰く余等は牧者に一步を譲らざるを得ざるべし乞ふ一同に橋上に匍匐し彼れをして背を越えて過ぎらしめよと群羊終に其意に従へるを目撃せり」と最と淀みなく演べ了るや否や議席を退き去りしるにぞ一同は此の諷言に感ずる所あり終に王命に應ずるとに決したりと

議員撰舉御免の出願

方今に及んでは英國人民は幾千萬金を散ずるも適當なる代議士を撰出せん爲めには毫も惜むの色なければと今より數百年前の往時に遡りて當時の實況を見れば未だ代議權の重んずべきを知らず議員撰舉の如きも甚だ輕んじたりしものと見ゆエドワード王二世の頃は議員は一日二「シルリング」(我五十錢弱)乃至四「シルリング」(我一圓弱)を支給せらるゝ成規にして如何にも駭く可き輕少の額ながら尙は手當を與へたるに拘らず當時數多の撰舉區ハ其議員に多少の補助を爲すを迷惑に感じ政府に代議士撰出の御免を出願せるものさへ多りし由なるが現にブラックストーン氏の記載する所によればエドワード王三世以後五代の間に在りては其費用は堪ふる能はずとて代議士を撰出

せざりし撰舉區其數甚だ多かりしと云ふ又一千四百六十三年にジョン、ストレンジ氏を撰舉せるダンツイッチ地方の撰舉人一同は氏に手當を與ふる能はずして若干俵の麥及び鹽漬の魚幾何を贈りて之に代へたりとぞ

夫子自ら言ふなり(飯盛岡持、墨金の話)

蜀山人の家は月次歌會を催せる折當時有名の狂歌師四五人參會しけるが野見丁納言墨金(立川談洲樓とも云ふ)は四方八方の話の序は太田道灌の「急がずばぬれざらまじを旅人の後より晴る野路のむら雨」の歌を評してこは必らず野路の夕立とあるべき筈なり村雨にては穩りならず故に余の之を夕立とあらため道灌の碑を立てたく思ふなりそも「ゆふたち」の字は夕立と書くべきか又ハ白雨とすべきかと宿屋飯盛(當時有名の狂歌師なり)に對して語り且つ問けるは飯盛は常々墨金を輕侮してありければ一言の返答もなく空ろそふきて居たり此時の容体墨金の淺學にして道灌の歌を難するさへ奇怪なるに之れを改めて碑を立てんとするは片腹痛しと云ふ様の顔色にあらわれて甚だ憎体なりければ席上の人々孰れも飯盛をいやらしく思へり扱て稍々ありて劇場の談出

でけるに當時興行中なりし源平盛衰記を手柄岡持批評して小枝の笛をこゑたの笛と云ふは狂言作者の謬にてのよもあるまじし是等は必らず役者の文旨なるに由る事なるべしと云ふを飯盛聞いて役者の文旨は云ふまでもなく小枝はおるか此外普通の詞を謬れる類は實に牧擧（枚擧と云ふべきを）に違わらずと云ひたりしに最前より飯盛を憎くたらしく思ひ居たる人々は互ひに顔見合せ竊かに失笑したりしが主人蜀山人はこゑみながら是れ夫子自ら言ふなりと打つぶやきたるにぞ衆客皆な抱腹したりけり

● 蠟燭要求の動議

英國の國會が夜會ある由は前項にも記載したるが其昔し夜會の未だ定例とならざる頃在りては偶々日没に及ぶも常に點燈の用意もなかりしものと見ゆ議員は交々「蠟燭を持ち來らしめよ」「點燈を命せられよ」どの動議を提出して甚はだ騒がしかりければ一千七百十七年の二月六日に國會は布告を發し「本議事中若くは委員會議中日没に至るときは議員の發議を待たず傳令使をして點燈せしむべきを以つて自今各員より蠟燭の要求も及ばず」と達したり

● 最長時間の議事

ロバルト、ワルポール氏が物せる英王ジョージ三世の記事中に左の一項を載せたり曰く一千七百四十二年にウエストミニス、ター州の撰擧問題の起りたる時下議院に在りて各議員十七時間着席したりとこれ既に長時間の開議と謂ふべし然れども其後一千八百七十七年七月三十一日より翌八月一日に亘るの會議は古來最も長時間なりき即ち三十一日の午後四時に始まり全く徹夜にて翌一日の午後六時迄幾んど二十六時間打ち通して議事を開きたるも遂に決了するを得ざりしが扱てその問題と云へば左まで重大の事件にてはなく南亞弗利加洲に關する件にて全く愛蘭議員が頑固にも議事の経過を妨げたるが爲めなりし

● 勅語の讀直し

ゼームス、グラント氏が一千八百三十六年の國會開院式の景況を記せる中に左の一語を載たり英王ウイリヤム第四世は資性極めて淡泊にして物に拘泥し給はざる君なりしが英國の慣例として國會開院式は國王臨場ありて勅語を朗讀し給ふの成規なるによ

りウイリヤム王も式の如く恭々しく臨場あり議員一同に向ひ開院式の勅語を讀ませ給ひり然るに當日は偶々曇天にして晝尙は薄暗く加ふるに王は年齢已に耳順を過ぎ給ひ自然眼光も鈍くお在したりければ勅語を讀み給ふにも頗ぶる御苦惱の体にて屢々滯阻せしのみならず借屈讀み難き語句のあるに遇ひば王の座右に侍りたるメルポールン侯を顧み「此條は如何に讀むべきや」と少しも憚り給ふ御様子亦く滿場に聞ゆ渡たる程の大音に問ひ給へば侯はソト小聲にて御案内に及びたる時さへありし程にて滿場の議員も窃かに見苦しく思ひ居たる折侍従は之れを推量し豎子をして燭を齎らし御机の上にて置かせければ王も漸やく便を得させ給ひ頓かに御容を更ため給ひてイト高朗なる聲もて

貴族及紳士、朕が今ま卿等に向つて告げんと欲する所のものは事國家人民の休戚に關し頗る重大の件なれども偶々燈火を欠きたりしが爲めに朗讀に惱みたれば定めし聞苦しきとにやありつらん今や燭來る仍て更らに初めより讀直さんとす請ふ各員諒焉

とてこれより再び開院の勅語を其冒頭より讀み直し今度の朗々讀了り給へたり

●月界より來る

英國ウエンドーワ撰舉區にハフルチー伯の所有地殊に多かりけるが伯の撰舉權を有する借地人一同に向て約すらく「議員撰舉の節は必ず余を撰舉せよ然る時は余は報酬として汝等の借地料を全免すべし」と借地人等皆な喜び諾して年々借地料の全免を得たりしといふ然るにオールドヒールド氏の記する所に據れば一千七百六十八年の撰舉に當り意外なる結果を生じたり今其次第を記さんに茲にアッドキンスなる人あり密に伯より逆つて他の候補者の爲めに撰舉を周旋したるが其計略の如何にも秘密なるより伯及び伯の黨友には一向に聞えざりければ世間にては伯其人こそ當撰せんと待設けたるに該日開票するに當りて意想外も伯の反對黨なるロバルト、ターリング氏が當撰し而も大多數の得點にて勝を制したりければ伯は必定借地人等が約を食みたるによるならんと一同に家屋立退を嚴命せり於是借地人等は大に愕き騒ぎ愁訴嘆願すれども更らに聽き入れざるも不得止戚な野外に出で、或の纒かに天幕を帳り或は茅舎を構へ

或<sup>ある</sup>其<sup>その</sup>等<sup>ら</sup>の用意<sup>ようい</sup>を爲<sup>な</sup>すの資<sup>し</sup>にさへ乏<sup>とほ</sup>しきものは露宿<sup>のじゆく</sup>をなし又は所<sup>ところ</sup>々に漂<sup>さまよ</sup>ひ歩<sup>ある</sup>く杯<sup>なほ</sup>慘<sup>さん</sup>憐<sup>れん</sup>寂<sup>せき</sup>寥<sup>れう</sup>たる有<sup>あり</sup>様<sup>さま</sup>を呈<sup>てい</sup>したり斯<sup>か</sup>くて六<sup>む</sup>ヶ月<sup>げつ</sup>を経<sup>へ</sup>たる後<sup>のち</sup>漸<sup>や</sup>く伯<sup>はく</sup>も一同<sup>いっとう</sup>の哀<sup>あは</sup>訴<sup>そ</sup>を容<sup>ゆる</sup>れ再<sup>また</sup>たび斯<sup>か</sup>る違<sup>ちが</sup>約<sup>やく</sup>のなき様<sup>さま</sup>固<sup>ちか</sup>く誓<sup>ちか</sup>ひしめ元<sup>もと</sup>の如<sup>ごと</sup>くに借<sup>か</sup>地<sup>ち</sup>權<sup>けん</sup>を附<sup>つ</sup>與<sup>よ</sup>するととなりたり然<sup>しか</sup>るに其<sup>その</sup>後<sup>のち</sup>一<sup>いち</sup>千<sup>せん</sup>七<sup>しち</sup>百<sup>ひゃく</sup>七<sup>しち</sup>十<sup>じゅう</sup>四<sup>し</sup>年<sup>ねん</sup>に至<sup>いた</sup>り又<sup>また</sup>々<sup>くわん</sup>一<sup>いち</sup>椿<sup>ちん</sup>事<sup>じ</sup>を惹<sup>ひ</sup>起<sup>おこ</sup>せり當<sup>たう</sup>年<sup>ねん</sup>撰<sup>せん</sup>舉<sup>きよ</sup>の際<sup>さい</sup>偶<sup>ぐう</sup>々<sup>くわん</sup>伯<sup>はく</sup>は他<sup>た</sup>行<sup>ぎやう</sup>中<sup>ちゆう</sup>にて不<sup>ふ</sup>在<sup>ざい</sup>なりければ伯<sup>はく</sup>に反<sup>はん</sup>對<sup>たい</sup>の黨<sup>たう</sup>人<sup>じん</sup>は二<sup>にん</sup>人の候<sup>こう</sup>補<sup>ほ</sup>者<sup>しや</sup>を舉<sup>あ</sup>げんと其<sup>その</sup>黨<sup>たう</sup>議<sup>ぎ</sup>に於<sup>お</sup>て六<sup>む</sup>千<sup>せん</sup>磅<sup>ぱう</sup>（我<sup>わが</sup>凡<sup>おん</sup>そ三<sup>さん</sup>萬<sup>まん</sup>圓<sup>えん</sup>に當<sup>あた</sup>る）の撰<sup>せん</sup>舉<sup>きよ</sup>費<sup>ひ</sup>用<sup>よう</sup>を決<sup>けつ</sup>定<sup>てい</sup>し某<sup>はら</sup>日<sup>じつ</sup>某<sup>はら</sup>所<sup>しよ</sup>に會<sup>くわい</sup>せんとを撰<sup>せん</sup>舉<sup>きよ</sup>人<sup>じん</sup>は豫<sup>あ</sup>らかじめ報<sup>ほう</sup>道<sup>だう</sup>し置<sup>お</sup>き扱<sup>さ</sup>て當<sup>たう</sup>日<sup>じつ</sup>の一人<sup>ひとり</sup>の遊<sup>ゆう</sup>説<sup>せ</sup>員<sup>いん</sup>を派<sup>は</sup>遣<sup>けん</sup>せしに撰<sup>せん</sup>舉<sup>きよ</sup>人<sup>じん</sup>は其<sup>その</sup>遊<sup>ゆう</sup>説<sup>せ</sup>員<sup>いん</sup>を知らざるを以<sup>も</sup>つて一同<sup>いっとう</sup>に問<sup>と</sup>ふて曰<sup>いは</sup>く「貴<sup>き</sup>客<sup>かく</sup>何<sup>なに</sup>れより來<sup>きた</sup>る」答<sup>こた</sup>へて曰<sup>いは</sup>く「余<sup>よ</sup>は月<sup>げつ</sup>界<sup>かい</sup>より來<sup>きた</sup>れり衆<sup>しゆう</sup>又<sup>また</sup>問<sup>と</sup>て曰<sup>いは</sup>く「貴<sup>き</sup>客<sup>かく</sup>遙<sup>ちゆう</sup>々<sup>くわん</sup>月<sup>げつ</sup>界<sup>かい</sup>より來<sup>きた</sup>降<sup>かう</sup>せらるる必<sup>かな</sup>らず面<sup>おも</sup>白<sup>しろ</sup>き奇<sup>き</sup>話<sup>わ</sup>珍<sup>ちん</sup>談<sup>たん</sup>を齋<sup>も</sup>たらし來<sup>きた</sup>られたるならん」答<sup>こた</sup>へて曰<sup>いは</sup>く「別<sup>べつ</sup>段<sup>だん</sup>奇<sup>き</sup>話<sup>わ</sup>珍<sup>ちん</sup>談<sup>たん</sup>を齋<sup>も</sup>たさず但<sup>た</sup>だ諸<sup>しよ</sup>君<sup>くん</sup>に配<sup>わ</sup>たため六<sup>む</sup>千<sup>せん</sup>磅<sup>ぱう</sup>を齋<sup>も</sup>たらし來<sup>きた</sup>れり」衆<sup>しゆう</sup>曰<sup>いは</sup>く「ソハ何<sup>なに</sup>よりの土<sup>ち</sup>産<sup>さん</sup>なり」と遂<sup>つひ</sup>に遊<sup>ゆう</sup>説<sup>せ</sup>員<sup>いん</sup>の云<sup>い</sup>がま、地<sup>ち</sup>主<sup>しゆ</sup>の約<sup>やく</sup>に背<sup>そむ</sup>いて二人<sup>にん</sup>の候<sup>こう</sup>補<sup>ほ</sup>者<sup>しや</sup>を撰<sup>せん</sup>舉<sup>きよ</sup>するを約<sup>やく</sup>し此<sup>こ</sup>度<sup>ど</sup>もワルチー伯<sup>はく</sup>は敗<sup>は</sup>れ取りたりといふ、人<sup>ひと</sup>の詩<sup>し</sup>云<sup>い</sup>ふ人情<sup>にんじやう</sup>薄<sup>はく</sup>似<sup>に</sup>紙<sup>し</sup>と黄<sup>くわう</sup>白<sup>はく</sup>の勢<sup>せい</sup>力<sup>りき</sup>も亦<sup>また</sup>大<sup>だい</sup>なる哉<sup>かな</sup>戒<sup>かい</sup>めざるべけんや

● 盜賊に非されば國事犯人ならん

英國<sup>えいこく</sup>著名<sup>しやうめい</sup>の詩<sup>し</sup>人<sup>じん</sup>ウオルツウオルスが「リリカル、バラッド」と題<sup>だい</sup>する有<sup>いう</sup>名<sup>めい</sup>なる詩<sup>し</sup>篇<sup>へん</sup>を著<sup>あ</sup>はさんとする際<sup>さい</sup>氏は英國<sup>えいこく</sup>中<sup>ちゆう</sup>に於<sup>お</sup>て最<sup>も</sup>幽<sup>ゆう</sup>遠<sup>えん</sup>にして且<sup>か</sup>つ最<sup>も</sup>も風景<sup>ふうけい</sup>に富<sup>とみ</sup>みたるオールフォルクスデンと唱<sup>とな</sup>ふる地<sup>ち</sup>を下<sup>くだ</sup>して此<sup>こ</sup>に筆<sup>ひつ</sup>硯<sup>えん</sup>を移<sup>うつ</sup>せしが此<sup>こ</sup>地<sup>ち</sup>と森林<sup>しんりん</sup>鬱<sup>うつ</sup>蒼<sup>そう</sup>として晝<sup>ひる</sup>尚<sup>なほ</sup>は暗<sup>くら</sup>らく蜿<sup>えん</sup>蜒<sup>てん</sup>たる岡<sup>こう</sup>陵<sup>りやう</sup>其<sup>その</sup>間<sup>かん</sup>に起<sup>お</sup>伏<sup>ふく</sup>し數<sup>すう</sup>道<sup>だう</sup>の清<sup>せい</sup>流<sup>りゆう</sup>樹<sup>じゆ</sup>影<sup>えい</sup>を倒<sup>たう</sup>涵<sup>かん</sup>して之<sup>これ</sup>を圍<sup>ゐ</sup>繞<sup>ねう</sup>し雲<sup>くも</sup>を隔<sup>へ</sup>つるの村<sup>むら</sup>に鷄<sup>けい</sup>犬<sup>けん</sup>の聲<sup>こゑ</sup>を聞<sup>き</sup>き烟<sup>けむり</sup>を帶<sup>お</sup>ぶるの汀<sup>なみさ</sup>に鳧<sup>ふ</sup>の戯<sup>たむ</sup>るゝを見<sup>み</sup>るなど詩<sup>し</sup>人<sup>じん</sup>卜<sup>はく</sup>居<sup>きよ</sup>の地<sup>ち</sup>には屈<sup>くつ</sup>竟<sup>やう</sup>の處<sup>ところ</sup>なれば當<sup>たう</sup>時<sup>じ</sup>ウ氏<sup>し</sup>と殆<sup>ほと</sup>んど其<sup>その</sup>名<sup>な</sup>を倅<sup>ひこ</sup>せし詩<sup>し</sup>家<sup>か</sup>コレリツジ氏<sup>し</sup>、サゼイ氏<sup>し</sup>等<sup>ら</sup>も亦<sup>また</sup>ツ氏の書<sup>しよ</sup>齋<sup>さい</sup>の近<sup>きん</sup>傍<sup>ばう</sup>に別<sup>べつ</sup>業<sup>ぎやう</sup>を構<sup>かま</sup>へ互<sup>たがひ</sup>に相<sup>あ</sup>會<sup>くわい</sup>して批<sup>ひ</sup>風<sup>ふう</sup>抹<sup>ま</sup>月<sup>げつ</sup>の閑<sup>かん</sup>談<sup>たん</sup>又<sup>また</sup>時<sup>じ</sup>を移<sup>うつ</sup>すと日々<sup>にち</sup>の如<sup>ごと</sup>くなりし然<sup>しか</sup>るに此<sup>こ</sup>の人<sup>ひと</sup>々に就<sup>つ</sup>て最<sup>い</sup>と面<sup>おも</sup>白<sup>しろ</sup>き話<sup>わ</sup>ありといふは此<sup>こ</sup>の人<sup>ひと</sup>々は詩<sup>し</sup>思<sup>し</sup>を練<sup>ね</sup>らんが爲<sup>た</sup>めに或<sup>ある</sup>は空<sup>くう</sup>を嘯<sup>せう</sup>きつ、一<sup>ひと</sup>人<sup>にん</sup>よて邱<sup>きよ</sup>を上下<sup>じやう</sup>するとあり或<sup>ある</sup>は袂<sup>たもと</sup>を連<sup>つ</sup>ねて林<sup>りん</sup>中<sup>ちゆう</sup>を徘徊<sup>はいかい</sup>するとあり時<sup>じ</sup>としては深<sup>しん</sup>夜<sup>や</sup>又<sup>また</sup>山<sup>さん</sup>河<sup>か</sup>を跋<sup>はつ</sup>渉<sup>せう</sup>して明<sup>めい</sup>月<sup>げつ</sup>を賞<sup>しょう</sup>するとさへあるを土<sup>ど</sup>人<sup>じん</sup>は之<sup>これ</sup>を見<sup>み</sup>て固<sup>もと</sup>より文<sup>ぶん</sup>人<sup>じん</sup>なりと知る由<sup>よし</sup>なければ種<sup>しゆ</sup>々<sup>くわん</sup>なる取<sup>と</sup>沙<sup>さ</sup>汰<sup>た</sup>を爲<sup>な</sup>し甲<sup>かう</sup>は曰<sup>いは</sup>く彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>は曾<sup>かつ</sup>て立<sup>りつ</sup>派<sup>ぱ</sup>の地<sup>ち</sup>位<sup>い</sup>に在<sup>あ</sup>りし者<sup>もの</sup>が落<sup>お</sup>魄<sup>はく</sup>れて此<sup>こ</sup>に至<sup>いた</sup>りしならん彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>の衣<sup>い</sup>裳<sup>しやう</sup>は野<sup>や</sup>鄙<sup>ひ</sup>ならざればなりと乙<sup>おつ</sup>は曰<sup>いは</sup>く然<sup>しか</sup>らず必<sup>ひつ</sup>

定彼等は紳士の状を粧ふて陰かに盜賊を爲すものならんと丙は曰く彼等は必らず何事にか失敗して痛く心を悩まし居るものならん何んとなれば彼等は時々月を眺めて何んか我々に解せざる言をつぶやき居ればなりと丁は曰く彼等の國事犯人なるも知る可らず何んとなれば彼等の居室を窺ひ見るに時として酒宴を催はし居るとわれども極めて静かにして嘗て政治上の事などを話し居りたるとなればなりと其噂と取々なりしが此の囂々たる俗評の中に在りて何時しか彼の文雅を以て詩壇を壓倒したる「リリカル、バラッド」の一大詩篇は稿を脱したり

●兩學士蛇肉のスチューに辟易す

ドクトル、ブラック氏とドクトル、ハットン氏に共に高名なる化學者にて其交情も最も親密なりしが或る日兩人相會し種々の話ありし未食物の話に移りたるとき互に曰く世人は様々の食物を愛すれど扱て蛇を食ふものとは甚だ少なし化學上の試験より依れば蛇の随分滋養分多きものにて現に伊太利人の如きは之を愛し食ふとなるに當國に於ては人之を恐れて食はざるの不道理の話にわらずや去りながら我々とても未だ實際食

ひ試みよるとあらずイデ是れより食ひ試みんものをと臆がて料理人に命じて蛇肉の「スチュー」を作らしめたるに料理人は命に隨ひ之を大皿に盛りて兩學士の前に差出せり兩人は平生物に臆せざる性なれど尙ほ是れ人間なりイザヤ食ひ試めさんとする場合に臨みては流石も心地わしく互に顔を見合せ暫ばしの間は箸も得取らでわりしが斯くて止むべきあらねば勇を鼓して一櫛の肉を丸呑にしたれど何分にも心地悪くて二の箸は容易に皿に下るべくも見えざりしがブラック氏は蛇肉の白き所を露はしながら黙然として之をハットン氏に示めすにハットン氏も亦蛇肉の蒼き所を抉み出して之をブラック氏に示めし今少し食ひ試み給はずやと云へばブラック氏は得耐えずやありけん思はず椅子を離れて之を避けたる状は餘所目も可笑かりしとなん如何なる化學者にても人情は同じきものと見えたり

●詩人自りら鬼神ありと稱す

博士サンテネール氏一日カルデナー、ル、モルンと稱する大學校の近邊を通りかゝりしが折しも同校の生徒は紙と鉛筆を持って運動しながら何にか頻りに考へ居る有様なるに



ぞ氏は早くもこれを認めては必らず課題の詩を作らんが爲め推敲し居るならんと思量し試みに之を問へば果して推量の如くにてありしかば氏は其題を問ふて答を得るや否や俄かに書生が手に持ちし紙を奪ひ見る間に數十句に渉る長篇を書き附けて之れを與へ曰く若し教師が何人が汝を助けしやと問ひたらんに鬼神なりと答へよと云ふや否や足早やに其處を去り須臾にして其形を失へり書生は惘然として後に残りツクト思ふ様彼れ決して人間にはあるまじ人間ならば斯く計り速かき詩を作る筈はなし世に所謂の仙人とは彼杯のことを云ふならんぞ恐れを抱て校に歸り此事を詳らかに教師に告げたるにぞ教師は其詩を見るに到底凡筆の企て及ぶべき思構にあらねば教師も舌を捲て尋常人あるまじと稱賛しわへり然るに其後公開の學術演説ありて其校の書生も多く傍聽席ありしが例のサンテチール氏は演壇にあらはれ出で演説を始むるや否や先きに詩を作り貰ひたる書生は驚ろきたる顔色にて聲高らかに「バケモノ」「バケモノ」と連呼したりサンテチール氏も演壇にありて前日の事を思ひ出し遽かに噴出しつゝ演説を中止して其所以を左も滑稽に演説したるにぞ氏が當日の演題も就ての演説よりも反つて非常の喝采を博したりと云ふ

●書籍館と字引なり

米國の或る大學に於て其附屬書籍館の書籍を増加せんと評議せることあり評議の末遂に増加することと決したりしかば校長は書肆を招いて其旨を告げ色々注文せしに書肆の主人の驚きながら問ふて曰く貴校の書籍館は無慮數十萬の書籍を蔵せど聞く然るに今又更らに増加あるべしとは最も驚くに堪へたりサテモ貴方は藏書を盡く一讀し終られたる乎校長曰く予は皆な讀み終らず又讀終らふとも思はず書肆曰く悉く讀み終り給はずば更らに増す必要もあるまじ校長曰く足下は妙なことを云ふものかな足下の所持の字引を徹頭徹尾通讀したることありや書肆曰く否校長曰く然もあるべし當書籍館は予の字引なりと

●書籍を列すれを十五英里に達す

英國の博物館中にある書籍館は其珍奇の書に富むと其の冊數の多きとは世界第三に位す即ち數年前の調査に依るに四十五萬卷の書籍を藏すと云ふ而して保管人の語る

所に據れば之れを一行に並ぶれば十五英里即ち我六里許りに達するどぞ亦た盛んなりと云ふべし

●細君嬌暎を發して良人の草稿を焼く

アンスウオルスと云るは英國に於いて高名なりし小説家なり氏は平生羅旬語の字引が甚だ不完全なるを憂ひぬか一部完全なる羅英對話字書を編纂して世の學者の不便を補はんものと思ひ立ち非常の勉強と忍耐とを以て數年間其編述に従事しSの字まで及びたり此間氏は一切の來客を謝絶して一室の中に思を潜め時に寢食をさへ打忘る程の勉強なりしかを氏の細君は徒然の折打語らふべき友なく爲に無聊に耐へ兼ねて折々氏に向ひ少しく勉強の時間を省きて互に會話するの愉快なる時間を作りたまへと請ひたれど氏は一向に聞入るゝ摸様の見えざるにぞ細君も今忍びかねてや一日良人の不在なるを好機とし數年の間鑽心嘔血も嘗ならざる辛苦もて作り出せる草稿をば借げもなく火中に投じ心窃らふ復讎せりと喜べり尋常の人ならんみは此れにて大概は失望し筆を投じて此の編纂を思ひ止まるべきなれども氏は毫も屈することなく最初に幾

倍したる勉強を以て卷首より再び編述し遂に其業を全ふしたりといへり

●トーマス、カムベル英皇の厚遇を蒙る

英國のウヰクトリヤ陛下が即位の際當時有名なる文學者トーマス、カムベル氏も盛典を拜觀せんものとして式場にありし然るに當時陛下は未だ妙齡に在しませしかど流石の大英國を支配し給ふ御器量丈ありて萬事を見事に處し給ひ數時間に涉りて人々皆な退屈を催はす程の儀式なれども陛下は更らふ倦ませ給ふ氣色も見させ給はざりしかばカムベル氏は最も難有ことに思ひ感激の餘涙を流したる程なり扱氏は歸宅の後餘りに敬服し奉りたるが故何か物を獻じて寸志を表し奉らんと多年來著作せる種々の出版物を一纏めとなし之を捧げんとソル、ヘンリー、ホイートレー氏に其の執達を請へり然るに陛下は決して民間よりの贈物を受け給はざる持前に在しけるが故に氏も執達を辭せしがカムベル氏は大に立腹し率士の濱普天の下大英國にありとあらゆる物一として陛下下の有にあらざらんや民間より物を奉ること何の差支かあると強て執達を請ふにぞホイートレー氏も辭する由なく遂に之れを陛下に奉りたり然るに翌朝皇室よりカムベ

ル氏の許に御使ありて奉りたる一包の書籍をば更らに封して返し給へりカムベル氏は失望せしかども萬一やと思ひ封推開らさて見れば内には陛下の親筆に係る一書ありて「好意の謝するに餘りあり一層のことに毎冊貴下の自筆にて姓氏を認め貰ひたし」と云ふ文言なりしかば氏は喜ふこと大方ならず早速命の如くにして奉りたるにぞ陛下も満足に思召し給ひ返禮として御自分の寫眞の裏に畏くも自ら筆を取らせ給ひ御名を署して賜はりしとなん

●電信奇話

電氣が比類なき速力を有することは何人も知る所なるが爰に「一千八百四十五年に發したる電音が一千八百四十四年に届きし」といふ一奇話ありそを如何にと云ふに「グライト、ウエストルン、レールウイー」と稱する鐵道線路に沿ふて架設せる電信線の「ステーション」即ちパデングトン分局の吏員が一千八百四十四年十二月の午後十二時を報ずると同時にスラウと稱する分局の吏員に宛て「謹賀新年」と電報せり然るに早速返事あり「折角の祝賀なれど當方は未だ一千八百四十四年よ有之候」と返報したりと

此事甚だ奇怪に聞ゆれどパデングトンとスラウとと多少緯度に相違ある爲めパデングトンの十二時は少しくスラウの十二時より早し然るに電音は一瞬千里なればスラウ地方の時計が十二時を報せざる前に達したるものと知るべし地球運轉の速度に比すれば電氣の速力と幾倍するものあるが故に斯る奇話を生ずるも強ち驚くに足らぬこといふべし

●佳人才子の奇遇

有名なる人士が婚姻の屢歴は古今萬國共に奇談あるものにてガートイと稱する詩人は自己の位地を高むるが爲めに娶りニイバルと云へる文學士と我狎人を歡ばしむる爲め娶り、ケヤルケルの貧窶なりしが爲に娶りナポレオンは武權を握らんが爲めに娶りたり爰に佛國のバルザックとなむ呼べる小説家の婚姻に關し一奇談あり扱も此の小説家が非常の名譽を佛國文學社會に博せし頃風景を以て歐洲に著名なる瑞西内地の旅行しけるが此時休息せんとて一旅店に立寄りしに恰かも佛國有名の貴族ハンスキ公と文學社會に著名なる同婦人どが此旅舎を立出で夫婦手を携へて馬車に乗るときにてあ

りしかばバルザックと窓に憑りて何心なく其有様をば打眺めてありしがハンスキ婦人は之を見て遽しく馬車を下りてその倚りかゝり居たる窓近かく歩み來りバルザックに向つて曰く「もしや私は其邊に書物を落して置きは致しませなんだり」と迦陵頻伽も斯やと思ふ計りの聲にて問ひかけられたりバルザックはツクツクと其容色を見るも其艶やかなるさま尋常にあらず殊には一寒措大たる小説家の目には喩へ難く見えたりければまばしい惘然として在りしが俄かに心附き然あらぬ体にて彼方此方を搜索せしに婦人が尋ぬる一冊の書籍はバルザックが坐を占居たる後方にありけり乃ちこれを婦人又渡さんとして不圖何の書なるやと表題を見しに是れなん自分の著作にかゝる小説にてぞありければバルザックは驚きながら「コハ野生の戯むれに物したる小説なり」と告ぐればハンスキ婦人も驚ろきたる顔色にて「果して貴君の高著なるか此書は私が最も愛讀する所にて若し此書なりせば一日の旅行も出來ざるのみならず幾んど此世の中に存在する希望なし」と問答中多少の時刻を移せしに其時既に車上にありたる年の頃六十に超ゆる良人は頻りに婦人を呼んで乗車を促すにぞ良人の命復背くに由なく婦

人の其書をバルザックより受取り残り惜氣に乘車するや否馬車と直ち駟せ去りたり斯くて後年バルザックが遂に此婦人を日耳曼にて娶る迄は實に唯一の邂逅にて其後十五年の間は互に忘れ難くて始終文學上の通信をなし最も懇親なる間柄なりしが遂に氏が日耳曼に漫遊中文學上の通信よりは一種喜ぶべき通信に接手したりとは他に非らず妾は即ち良人たる貴族の巨萬の財産と土地の讓與を得て足下に嫁するの承諾を得たれば枉げて所夫たるを諾し給へとの書簡にてありしかばバルザックは當時猶は貧窶の小説家に過ぎざりしかば一議に及ばず承諾し其婚儀は贅澤なる佛國社會を驚かす程の盛式なりしと云ふ

●忍耐家の頓才

英國のツオルスタルと云へる地方にハウトと稱せる高名の牧師ありけり、此人至て忍耐力に富みたる性質なれば世人推して其美德とはなせり或日の事數人の來客ありて種々の會談の折柄ハウトは兩三日前五十圓はを費やして購ひ得たる新奇の晴雨計を客人に誇り示さんと家僕に命じて之を座近く取寄せしに僕は之を客人に渡さんとする際如何

はしけん手を外しさま牀上に落し微塵に破壊せしめたるもぞ居合せたる一同は興を醒まし座席白らけて見えたるが流石は忍耐強き教師なれば毫も怒りたる顔色なく客人に向て微笑しつ「私と此れを以て誠と吉兆だと思ひます此の五七日は旱續きにて困りましたるに斯く晴雨計か下り(牀上に落したるを指す)ましては必ず間もなく雨が降るで御座りましやう」と人其大量を稱す

●非凡の記憶力を有せる通信者の事

ウイリヤム、ウードフオール氏の英國に於ける著名なる新聞記者の子なり此人天資鋭敏なるが上非凡の記憶力を有し父の新聞事業に少からざる助をなしたる中又就て氏は毎に上下二院の議事を傍聴し之を精密に筆記して新聞紙上又登録するを以て最も大なる役前をなせり英國出版の文學叢書に載する所に據るに氏は日々國會に出席し三四時間若しくは七八時間に渉るの長演説を傍聴し其要點すらも手帳に扣ゆるとなく瑣末の點までも精確に記憶し歸社の上は凡そ新聞紙面の十六段に渉る記事をば寸間の休憩もなく宛がら水の流るゝが如く之を記し了るを常とせり去れば此新聞紙は議院傍聴筆

記の精確を以て非常の信用を江湖に博し紙數頗みに増加し他の諸新聞紙を壓倒するに至れり、去れば各新聞社共に非常の注意を以て議事筆記の精確を競ふたれど奈何せんウードフオール氏の如き非凡の人を有せざるが故に氏一人よて容易に成し得るの仕事をば他社よては數名の筆記者に分擔せしめ各時間割を以て更代せしめたるも尙ほ氏が筆記せる者に比すれば大いに精密を缺きたりと云ふ

●鐘聲を聽いて婚姻を決す

希臘の古書中可笑けれども自ら人情を穿ちたる一話を載せたり或る商家に一婦人あり不幸にして所天を失ひければ更らに良人を迎ふべきや否やに就き頻りに心惑ふてありしが終に之懇意なる僧侶之れを謀らば善き分別もあらんと一日寺院に到りて住職に面接し未亡人「妾事も良人が没しよして以來の商賣向きも思ふよ任せず困却致し居りまを就ては多年我家に奉公せる番頭の中萬事に忠實なる男あり之れを所天と定ては如何」僧「そは屈竟の配偶なるべし速かに其人を良人と定めらるゝこと得策ならん」未亡人「然し番頭を良人と致したら世間の者の何とぞ評判しますまいか」僧「そんな

悪念あらば見合せの方得策ならん」未亡人「然し妾一人にては逆も家業を盛んにする譯に参りませんもの」僧「それならば矢張り良人と定めらるゝ方得策ならん」未亡人「然し定められた後其男が想像外の悪漢なりし事を知りましたら何ふしませう」僧「然らば見合せらるべし」と問答數刻に涉り僧の始終婦人の言ふことと賛成してありしが兎角婦人は表面には色々悪念の様子見ゆれど内心と嫁し度思ふ情瞭然たるに不僧は窃に一策を案じ告げて曰く「その内に寺院の鐘が鳴りますから、その時まで待つて鐘が嫁せよと鳴るか嫁すなど鳴るかを静聴して御身の心を何れにも決せられよ」と且らく他事を談話して居る内華鯨一吼暮れ合を告げ來りたれば婦人のしはし之れを諦聴してありしが喜び顔色にあらはれ僧侶に告げて曰く「鐘聲を聞きまするに何となく嫁せよくと鳴る様で御座り升」僧の漸やく其の心の決したるを察し「然らぬ愈々良人と定めらるべし」と云に婦人は勇むで我家に歸り番頭より此事を告げて終に己か所天とは定めたり然るに年を経て其男に善からぬ行狀ありて大に産を破りたれば婦人は大に怒りて之を離縁し再び寺院に到り僧侶に面接して事の次第を告げ貴僧は妾を欺きたりと

怨すれば僧は微笑しつ「余は決して御身を欺きたるにあらず必定御身は彼の節鐘聲を聞き違へたるにてやあらん試みに今日再び聴かれよ」と云ふ内寺鐘の鳴りたるにぞ婦人は之れを静聴すること暫時にして覺る所あるが如く僧侶に謝して曰く「如何にも彼の節は妾の聴き損じと見ゆます今聴けば鐘の嫁をなくと鳴ります」

●國手の頓才損害を回復す

英國にて著名なる外科醫學士リチャルドゼツプ氏が存命中毎々人々語りたる一條の滑稽談あり氏會て或る貴族の招きお應じ診察し赴きしが辭して歸らんとする時其家の執事は謝儀なりとして三「ギニー」(貨幣の名)を與へたり氏は平素往診料を五「ギニー」と定め現に此の貴族の家に來る毎に必ず此の定額を請取る習ひなるも此度に限りて僅か三「ギニー」のみを與へたるを以て心竊かに平かならず或は執事が二「ギニー」を私したるにのわらざるかと疑念を發し日を経て再び往診せる際氏と一策を設け態と主人の面前にて三「ギニー」の貨幣を敷き物の上に落し遊て之を拾ひ上げ三個共に拾ひ上げたるも尙ほ頻りに四方を搜索してありしうば主人曰く「貴方の幾箇の貨幣を落し

まし「氏曰く「今ニッ落ちた等て御座ります何せなれば私の只だ三個のみ拾ひ上げませんうら」と左も意味ありげに云へば主人も終には其意を覺り先きに來診の節「ギニイ」を與へたる當擦を云ふならんと心付き氏が歸宅せる間もなく「ギニイ」を贈りて之を謝したりと云ふ

●裁縫の術を知るや否や

英王ゼームス一世の時博學の少女ありけり或人之れを陛下に奏上して謁見を賜ひらんとことを請ひけるに王は快よく承諾ありしにぞ其人は少女を伴ふて宮中に伺候し恭しく奏上すらく此の女子の尙や妙齡にはあれと學は哲理の濫輿を極め語は羅旬及希臘へブリニュー等又涉り實に稀有の博學者に候と云へば王は之れを聞き濟し靜かに宣ひらく實に稀有なる女子かな然し朕は其女子に問度きことあり其元は裁縫の事を承知し居るや否や

●謹んで星に謝す

ラランド氏は佛國著名の天文學者なり夫の激烈なる革命の乱起りてロベスピエール等狂

暴の振舞となし干戈を以て巴里の市街を荒れ廻はり手當り次第に良民を殘害し具に慘毒を極めたる際には氏は恰かも天象臺に在りて切りに天体を測量してありしが漸やく觀測を終りて我家に歸らんと市街を通行するも四方の慘狀實に見るも忍びざる者あるもぞ氏は悚然として恐れ心竊かに思へらく余にして若し前宵天象臺に在らずんば亦た兇徒の爲め斃ふれたるならんにと天を仰て大息することや久ふして曰く吁々星よ余は爾の好意を謝す

●書籍を借るに抵當を要す

今より五百年前に於て歐洲諸國もても書物の非常な不足にて其價の驚く可き高價のものなりしに似たり「レラックス、オフ、ソテテチユール」と云へる書の記載する所に據れば佛王路易十一世がラシスと稱する當時巴里に住せし亞良比亞の醫師より一卷の書物を借入れたる際にはラ氏は無抵當にて貸すと欲せず佛王は爲めに多くの金銀塊を抵當として借らんと試みたり然るに尙ほ氏は王に請求するに貴族一名證書に加判し若し紛失せる場合い若干の地面を以て償ふとの文言を加へんとを以てせりと又當時に何

人にも書物一卷を寺院に寄附するよ於ては其人が娑婆に犯したる百般の罪を許すの法なりといへり

●處女の著書全都の紙價を貴からしむ

マダム、タルピイと稱して文學社會に名譽を博したる婦人が未だバルチーと呼んで十七歳の處女たりし頃「エウ井リナ」と名づくる有名の小説を著はし人知れず之を都に上ばせて出版せり然るに出版後間もなく父なる人の都に上ばりたることありしが當時「エウ井リナ」の評判非常に高かりしかば父人は娘の土産にとて一本を購ひ數日滯留の後ち家に歸りたり其家族の者は田舎住居の習とて父人の歸りしと聞かざれども出迎へ都下の近事を何にくれ尋ね問ふに氏の云へるやう別段珍らしき話も聞かざれども余が土産として持歸れる小説の其評判の高さと驚くべき程なりと聽がて座を占めつゝ其小説を取出して讀み聞かす小説の表題は是れなん別の書ならでバルチーが物したるものなれば處女は耻らへて臉上忽ち紅を潮したれど流石に言ひ出づる機會を得ず只だ俯向いて聞居たるよ父は頻りに稱揚しながら數章を朗讀するを一家眷族皆な傾聽して其妙

處に至る毎に稱賛して置かざれば始終無言よて父の傍はらゝ在りたるバルチー今の耐え難くやわりけん父の膝下に身を投出し涙ぐみながら是迄秘め置きし罪の許したまへ著者は即ち妾なりと語り出づるに父の更なり一家の者は憫され果てたる中にも大方ならず喜び合ひしと云へり

●フランクリン時間を惜む

著名なるフランクリンが書物屋と新聞屋とを兼業せし頃一日新聞印刷にて非常の繁忙を極め居る際一人の紳士然たる客人店頭に入り來り店一ぱいに駢列しある許多の書籍を是れ彼れと打詠め居りしが少時ありて番頭を呼び一小冊子を指して其代價を問ひけるに番頭一弗で御座り升客一弗……今少し引く譯にはゆかんか番頭何う仕りまして一弗がギリ／＼決着の代價で御座り升」と彼是れ掛合ふうち既又數刻を移せり客人は番頭又掛合ふても埒明すと思ひけん客フランクリン氏の在宅なるか番頭只今印刷所に居ります客何うか遇ひ度いものだ」氏は此時恰も勘定場に在りて先刻より客人の厭煩こく掛合ふを耳にしてありければ直ちに店頭に出で來り客人に一揖し終るや客



人は冊子さうしを手てに持つて之これを氏うぢに示しし此書物このしよぶつは幾いく何なんまで負まかり升しやう主人しゆじん一弗廿五錢いちふにじゅうごせんに致いたして差上さしあませう客きやく一弗廿五錢いちふにじゅうごせんと云いふ、それそれの又また何なん様やう云いふ譯わけです、先刻せんこく御店ごてんの人ひと一弗いちふだと云いふたではないか主人しゆじん如何いかにも左様さやうで御座ござりました先刻せんこくなら一弗いちふに差上さしあても宜よろしかつたのですが斯しかく時間移じかんうつつては一弗いちふには差上さしあ難がたし」客人きやくじんとフ氏うぢの寓意ぐいある言ことばに氣附きづざれば更さららに曰いくマアそんなそんなに云いはずに幾いく何なんまで引ひけるう早はやく云いはれよ主人しゆじん一弗五十錢いちふごじゅうせんに致いたしましよ客きやく一弗五十錢いちふごじゅうせん……可あ笑わしいことを云いふではないか現在げんざい足下そくかの口くちより今いま一弗二十五錢いちふにじゅうごせんだと云いつたではないか主人しゆじん如何いかにも、アノ時刻じこくならば一弗廿五錢いちふにじゅうごせんで上あても宜よろし御座ござり升しやうした然しかし斯しかく時刻じこくが費つひへては一弗五十錢いちふごじゅうせんも差上さしあても尙なほ割わりに合あひません」客人きやくじんは漸ややく覺おぼる所ところある者ものの如ごとく急いそぎ一弗五十錢いちふごじゅうせんを投なげ出し一弗定價いちふていぎやうの書物しよぶつを購かひひ得えてソコそこに立た去されり云いふフランクリン氏フランクリンの一刻じこくの二十五錢にじゅうごせんの價あいを有あすと云いふべし

●世界第一の奇癖

英國えいこくにバルシイ、セリイとなん呼よべる一奇人ひとありけり此人このひと性來せいらい一種しゆの奇癖きへきを有あせり、

开ひは如何いかなる癖くせぞと云いふに恰あたりも我國わがくにの小兒こわらが戯たはむれに紙かみをもて福助ふくすけ鶴龜つるかめ等の形かたちを作つくるが如ごとく紙かみにて船ふねを作るの童癖どうへきを有あせり「ニユー、モンズリイ」新聞しんぶんは此事このことに就つき一の奇報きほうを載のせたることあり曰いく氏は紙片かみを以もつて擬船ぎせんを作り之これを盆水ぼんすいに泛うかべて玩弄がんろうするを以もつて無上むじやうの歡樂くわんらくとせる人ひとなり去いれば氏うぢの家うちに在あると外ほかに在あるとを問とはず暇ひまさへわれば紙片かみを以もつて玩弄がんろうし談話だんわの際さいにも會食かいじきの際さいにも甚おしきに至いたりては散步さんぽの際さいにも絶たへず紙片かみの氏うぢが手中てのちゆうにあり他人たにんの家うちを訪まへる時の如ごとく座上ざじやうにある紙片かみは一應いっおうの挨拶あいさつもなく自家自家の童癖どうへきを満足まんぞくするの材料ざいりやうも充あて看みる十葉じふはつ若わかくは二十葉にじふはつ位の紙片かみを盡つくすことあり、座上ざじやう紙片かみなき時は自家自家の「カクシ」を探たりて何なににても手ても觸ふたる紙かみを引出ひ出して材料ざいりやうに充あて或あるの自ら必要ひつたふにして失うしふ可べからずと思おもふ手紙てがみをも初めの内うちは躊躇ちゆうちゆうして數々しばしば之これを「カクシ」の内うちも收とむれを終つひに之これを以もつて其材料そのざいりやうに充あつ、如ごとく「カクシ」中ちゆう不幸ふこうもして手紙てがみなき時の平素身へいそみに離はなる書籍しよせきの表紙ひょうし若わかくは餘白よこしろの紙かみを剝はぎ取りて此このの材料ざいりやうに充あてたり故ゆゑに氏うぢが座右ざいじやうに置く所ところの書籍類しよせきるいにて完全くわんぜんに表紙ひょうしの備そなはりたる者ものとて一ひと巻まきもあるなし(但し氏うぢの讀書どくしよを好このむ人ひとなりければ絶たて文字もじの印刷しよつ刷しある部分ぶぶんを剝はぎたることな

し)氏曾てサルペンタイン河畔に徘徊してありしが偶々河水の流るゝを見るや遽かに平生の童癖勃興し來り切りに「カクシ」を探れども此時の生憎一片の紙だもなく只だ烟包の内に五十圓の銀行手形のみありし氏は流石に之を己が癖を満足するの犠牲に供すること躊躇して在りしが兎角に禁へ難くやありけん數々躊躇せる後終に之れを取出し極めて精巧に擬船を作り一旦水に浮べたる上は更らば取上ぐる心組にてサモ樂しうに之れを岸近かき河水に泛べ且らく打詠めてありしが一陣の北風颯と吹來ると同時に五十圓の價格を有せる手形丸は遙く手の及び難き所よ吹去られアハヤと云ふ間もなく忽ち見失ひて氏の惘然自失すること須臾なりし

●ペートル大帝齒醫者となる

ペートル大帝は小學の兒童も熟知する著名なる露國の君主なりし此王深く理學を修め給ひしかば自然醫術にも御心を傾けさせ給ひ殊に外科解剖の術を好み給ひければ病院にて解剖ある節は必らず萬事を抛つて臨席あり時々には醫師に代はり自ら術を施し給ふこともありし然れば大帝には常に外科器械一式の具はりたる小さき「カバン」を提げ

外出の際には必らずこれを携帶されたる程なり曾つて此王の施術に就ての奇談あり王の近臣に「バルポアロツフ」と稱するものありて平素其妻と中わしく機會もあらば困らせ呉れんと待ち構へ居りたり此のもの一日甚だ愛ひたる顔色にてありければ王の其故を問はせ給ふに(バ)曰く然れば荆妻は平生齟齬を患ひそれが爲め非常に惱み居れども何分にも醫師をして其齒を抜うしむることを嫌ひ私しも當惑して居りますと王は之れを聞て眞實の事と思ひ足下の婦人を朕に接見せしめよ必らず療治致し呉るゝ程に(バ)は之れを聞て大に喜び直ちに僞患者なる己が妻を陛下の前に誘ひ來りたり王は婦人に向ひ懇ろに患所を問とせ給ふに婦人は固より齒痛あるまあらざれば別に患處はなしと答ふれども良人は側に在り強て其指を妻の口中に押し入れ此齒こそ患處なれ始終療治の節に患なき様告ぐるが此女の癖で御座り升ソ一して醫師が去りたる後の痛むゝと切りに愚痴をコボして私を困らせ升(王)ヨシ／＼決して長くは苦しませぬ程に「と立あがりイヤがる女の頭と腕を捉らへさせ矢庭に機械を差し入れて患處なりと指し示したる齒一本を抜き去れり」後王の其妻を困らせんとする惡意に出でたる事を知り給

ひ怒らせ給ふこと大方ならず御手を以て「バルボアロツ」を打たせ給ひたりと云ふ

●復た熱病に罹る勿れ

英國アン女王の御宇に當り老徳ヘムブロークとなん呼べる貴族ありけり此人一種の奇癖を有し何事にも最と嚴密なる規律を立て、之を守奉し假りにも自から其規律を破ぶるが如きとわらず去れば細君と同居する時刻の如きも午後十時と定めて其以後の時間ハ必らず夫婦別れを爲し居る程の人なりしが斯く規律正しき性質なれば家法も亦頗ふる嚴密を極はめたり其家法の一に曰く凡そ我れの下僕下男たらんものは必ず酒を飲む可らず犯す者と直ちに放逐すべしと然るに此家の下僕となりて久しく忠勤を重ねしジョンスト云ふ者あり老實の習ひとて萬事の注意淺からざれば主人の覺ゆる目出たかりしに一日何づれの家にて強ひられけん日頃慎み居たる酒を痛く飲過したりと見ぬて満面さながら朱を施せし如く酔歩蹒跚として歸り來たる折柄運わるくも門口にて主公の外出するに出逢ひたりジョンストも今は心ならぬとしてけりと酔中ながらも後悔するものから酒氣ハ益々逆上して雙の眼まで血をかき込みし如くなるを主公は徐ろに打見

やりジョンスト、汝は急性の熱病に罹りたりと覺へたり其の顔色にては容易ならぬ容体なり早く寢所に入りて休息すべし其内に藥を得さすはとど餘りも意外なる言葉を聞てジョンストは心中に喜びもしつ又恐れもしつ、遽かに病体を粧ふて寢所に就きしが主公は人を以て熱病に用ゆべき劇劑を取寄せ之を服さしめし、外出したり扱て翌朝となれば酒氣は全く醒めて唯だ疲勞を覺ゆる体なるにぞ主公ハ之を見て曰くジョンスト、汝は實に命の強き人なり若し那時予の在らずして藥を與ふる者なかりしならば汝の命は實に危うしならん幸に藥効空乏からず汝の恙なき顔を見るは予に取りて満足の至りなりかしと忽ち威儀を正して曰くジョンスト、汝に戒む以後は決して斯る熱病に罹る勿れ

●狀師は蜘蛛の如し

英國の文學社會に一時名聲を鳴らしたるデー氏が會て其の友人ミウイリヤム、ジョンスト氏を訪ひたる時氏は恰かも書齋に在りしが手に持ちたる書物を脇に置かんとする折しも何處より來りけんいと大きやかなる蜘蛛のデー氏の前に下りければジョンスト氏は

ず聲を揚げデー君其虫を殺し給へど叫びたりデー氏は濟したる顔色にて予はこれを殺すことは能はず予に何の権利ありてか之れを殺すを得べきを請ふ且らく思ひ見られよ例へば今我々が共にウエストミンスターの高等法衙に至りたりとせよそこには我々を制するの權力を有すること恰かも蜘蛛が我々を於ける如き法官あり然るも法官は傍人に向ひ其狀師を殺るせよと云はば如何我々は何んと思ふべきや實を云へば狀師の如き蜘蛛が我々に於ける如く社會に忌まるゝ者なり

●化學者の金嫌ひ

カウインデッシと云へる著名なる化學者あり此人一意思理學の研究に耽り金錢を見ること恰かも土芥の如し然れど氏は生來質素の人なりしが故に資産に富めり嘗て氏が取引ある銀行に於て一年の決算を爲したるに八萬ポンド(我四十萬圓)程銀行の方にて預りある勘定となりぬ由りて銀行者思へらく斯る大金を無利子にて預り置くは如何にも不徳義なりと當時「クラファム」と稱する地に住居せる氏が許に至り氏に面會を求めたるに執事は其來意を問ふ(銀行者)是非共先生に御目にかゝりて申上たし(執事)然らば主

人が呼鐘を鳴らすまで客間に御待あるべし宜敷節申上けん」斯くて二十五分程待つに氏は呼鐘を鳴らして執事を呼びたれば(執事)あなたにお目に掛りたいとて先刻よりお待ち申居るものが御座ります(カ氏)誰が來た何用事ありて來た(執事)御關係ある銀行の手代だと申しまして是非御目にうゝりてお話し致したいと申しました「カ氏は之れを聞いて借金の催促にでも來たと思ひたりけん非常に狼狽したる様子なりしが兎角する内銀行者は既に戸外まで近づきたるに予氏は未だ目禮だも終らざるに遷てながら「お前は何用があつて來た、己れに何用がある」と云ふのだ」銀行者は一禮を終り「別用では御座りません決算を致しました所貴方より銀行へお預けななりし金圓は澤山御座り升無利子にて御預り申も如何と存し伺の爲上り升した(カ氏)左様か、其れならば好し、何卒かこれから後は斯る事の爲めに態々尋ね來て妨けて呉れるな

●讀む者の勝手に任かす

西洋の文章には何人も能く知る如く其段落に種々なる符號(「」?等)を附して意味を明瞭ならしむるとなるが此符號を附くるとは容易に似て容易に非ず著者によりて色

々附け方を異にし随分異論を生ずる事あり茲もテモセイ、デッスターと呼べる人あり「イ、ビケル、フアル、ズイ、ノウイング、ワンス」と題する書を著はしたる際氏は兼て符號の附け方又異論の多きとを五月蠅思ひ之を出版するに當りて文章に一切符號を附けず其代りに滅茶苦茶に符號ばかりを臚列したる附録を巻尾に附し讀者の勝手に文章中に挿めて讀むに任かすと斷り書を爲したり

●一人の傍聽、廿年後の邂逅

高名なる神學者ドクトル、ビイチャル氏が傳道の爲め米國の内地を周遊せる際時恰かも嚴冬にて氏は積雪を踏むで或る會堂に到りしが兼て廣告せる説教時間となりしも傍聽人は僅かに一人のみにて更に何人も來るべき様子の見へざるにぞ氏は失望して幾んど説教を見合せんとまで考へしが竊かと思ふ様設令ひ傍聽人は一名に過ぎずとも説教をするは余が役目なりと遂に説教をなす事に意を決し多衆に向つて演ふるがごとく唯一人の傍聽者を相手ふ凡そ二時間又渉るの長説教を爲し終ると間もなく其場を立去れり然るに其後凡二十年を経て氏はオハヨウ州の村落を旅行せる際後方より氏が姓名

を呼ぶものあり誰れならんと顧みれば曾て知らざる白髮の老翁なるにぞ氏は不審に思ひ誰人なるや予は少しも記憶致さずと云ふに翁曰く其許は記憶なき筈なり私は能くお知り申して居ります二十年前風雪の際私一人で其許の二時間に渉る説教を聞いたことが御座ります御承知はなきやとビイチャル氏も漸く思ひ付きハタと手を打ち足下はあの節の傍聽者でありたるか予の當時足下の熱心なる感服したりと云へば翁曰く貴殿の薰陶より私も今は一門戸を張るの傳教師となり現にオハヨウ州に數千の信徒を生じたるに實に君の庇蔭に因れりと互ひに手を把つて奇遇を感じたりといふ

●佛王の冷語

家に汗牛充棟の書を藏むるも之を讀まずんば何んの益かある佛國の路易十一世曾て此等の亞流を箴戒して曰く家又萬卷の書を藏して之を讀まざるの徒は恰かも重荷を擔ふたる佝僂の如し彼れ振返りて己れが背上の物を見んと欲するも得んや

●文學者蜘蛛を食物とす

佛國にて有名なる文學者ランド氏は蜘蛛を生ながら喰ふを以て食物中の絶品とし平

生多く捕へて之を伺ひ置き外出の際などには數匹を籠に入れて不時の食用に供したりと云へり

●小説家スコットの大迷惑

ウオートル、スコットは英國著名の小説家あり随つて諸方より著書の添削を請ふ者多く案上常に書冊の堆を成せし程なるが氏が自記の日記の一節に曰く「或る朝非常に嵩ばりたる郵便物を配達し來りたれば何人より送り越せし者なるやも詳か又調べず封押し切りて之を見るに紐育なる或る若き婦人の著はしたる演劇脚本の草稿にてありし其副文を披き見れば總べて鄭重なる文言にて何卒貴覽の上御添削被下序跋ども御執筆被下度又御添削被下候上は適當の書肆に命じ板權をお取り被下たしとまで記るしわり餘まりに厚面しき請求ゆゑ彼是れ當惑し不圖封紙を見れば迷惑は雷だに是れのみならず五ポンドの不足税さへ取られたることを發見せり是れ既に余に取りては容易ならざる損害なり然るに損害は猶是よ止まらずして二週間程を経るうち又も嵩ばりたる郵便物の到着せしかば此度も氣附かず開封せるに又々中より同一の草稿飛出し今度の副文には

先郵便船に托したる草稿は最早御落掌相成候哉實の其節は風模様も悪しかりしに付さ或は不達等の事もあらんと懸念し他船に托し重ねて差上候と認めありて前同様五ポンドの不足税を取られたり云々」亦た以て氏の小説を以て當時に鳴りし一斑を想見するに足れり

●武田信玄の男色

左の誓書は元老議院官神田孝平氏の所藏に係り信玄自筆の寫なり、宛名の春日源助なる者は甲州石和の豪農春日某の男にして後高坂彈正虎綱即ち是なり源助青年の頃容色優れしが故に戦國の常として男色盛んに行われりしかば信玄之れを小姓に用ひ鍾愛すると甚しかりしに源助信玄の心彌七郎と呼べる同僚に移れるを疑ひ遂に此の誓詞を書せたる者と知らる、彌七郎の爲に人は群書を涉獵するも分明ならず「又内々法印に然可申へ共」とあるの當時誓詞を認むるには必らず牛王實印の神紙を以て之れ又充るの習慣にて法印の即ち實印の事なるべく全体の文意は「内々誓詞用紙を取寄せ認むべくなれ共」と云へる義なるべし又其後段に「甲役人多候間白紙に

而」とあるは甲府役人四圍に多き故尋常の白紙に認めたり」と云ふの意ならん又其後段「明日重なり共可やい」とあるは若し疑はゞ明日誓詞用紙を取寄せたる上重て認め遣してもよろしとの意なるべし

誓詞之趣意書

一彌七郎に頻に度々申候へ共虫氣之由申候間無了簡一候全我偽になく候事  
一彌七郎に伽ねさせ申候事無之候此前にも無其儀候況晝夜共彌七郎と彼義なく候就中今夜不寄存候之事

一別而ちいん(案知音)申度まゝ色々走廻り候へば還而御うたかひ迷惑に候

此條々いつわり候者は當國一二三大明神富士白山殊に入幡大菩薩諏訪上下大明神可蒙罰者也仍如件

内々法印に而可申候へ共甲役人多候間白紙に而明日重なり共可申候

七月五日

春日源助どの

晴 信 華押

豊太閤の尺牘

豊公秀吉の書簡といふを見るに

そのいご文にても申よりいでは心もどなくおもひよりわかざみ(案秀頼を云)いよく大きくなりいやそこやと(案そこ許の意)のひのよじん又いしたくまでみだれになきようにかたくやつけられいん事せんにてい(案專一の意)廿日ころにかならず参りいてわかざみだき可やいそのよさにそもじをもとばにねさせやい可いせんかく(案折角の意)はまちい可い(も)

かへすくわかざみひやしいはんようすやつけい可いなにかにつけてゆだんあるまじくい

おちやく参る

て ん か

返くはゆかしくいまゝやがて参つてくちをすひ可やい又われくるすに

人にくちを返すわけははんとれもひらりたかのがん三さを進上  
 文給いほうれしくれもひらりことよみ事のつめかたな一しはまんどくやいやがて  
 く参つては禮可やいへどもまづくはりのかみをもてや上いおのくへも口(案  
 其か)事やいべくひめでたくし

正月二日

大さり

大かう

涉ひろい

返事

右書札二通の内第一通は何人の所藏なるを知らず文意は別に解釋を要せず明瞭ありと  
 思ふ唯た宛名「おちやく」とあるの淀君の事なること或書に見ゆ又「てんか」とある  
 は殿下の事なるべしと修史局の考なり自ら署して殿下と云ひ我子を指してわかざみ  
 と云ふ豊公の眞率想像するに餘りあり第二通は元老院議官神田孝平氏の所藏に係り慶  
 長三年秀吉が大坂より伏見に居る秀頼の許へ贈りし書なりと云ふ其本文中「つめのか

たな」とあるの爪切小刀なるべく「はりのかみ」は「播の守」なるべし又添文の中「たか  
 のがん三さを」とあるは鷹及び雁三棹と云ふの意なるべし宛名「御ひろい」とあるは  
 「拾ひ」の義よて秀頼の正室の子にあらざるが故に此名を命じたること或書に見ゆ蓋し  
 秀吉が此書を秀頼に贈りたる時は秀頼僅かに六歳の節なり然るに文中常に感誼を雜へ  
 「やがてく参つてくちをすひ可申候又われくるすに人にくちを御すわけ候わんど  
 おもひらり」杯とあるの一方は「爺々遠く離ておん身の口を吸ひ愛る能はず他人の  
 みおん身の口を吸ひ愛ること羨し」と兒を思ふの眞情をあらわし一方には淀君にか  
 けて「余か不在を機として間夫でも持ちはせぬかどあてこすりの意を籠めたる者なら  
 ん

●尼將軍の書翰一通

鎌倉の尼將軍政子の書翰といふを見るに

御文たしかにうけたまはり候ぬ、もどさ候まじきことならばこそは世中ならひに候、  
 おどろくべからぬことに候、かようの事の候へばこそ、心もよくもなることに候へ、



いたくおもふこと候はぬもかへりておそれあることに候、佛道のなれといふことばかりこそ候べく候へ、はしがなげきはあさうらぬことに候へ、なぐさむべしともみぬ候はず、あやうさはとに候

七月廿八日

政子

右の一通の書札は頼家が鎌倉に於て刺殺されたる際急使其事を尼將軍に報じたるにより遣したる返書の寫なり書中の旨趣は「元來意外の事あるは世間の常なれば驚く可らず斯る事變を経て心も善くあるものあり餘り思はぬも却て恐れあり唯佛道なれと専ら念すべし母が悲歎は慰藉すべしとい見ぬ我ながら危ぶむ程なり」と云ふに在るが如し蓋し來書に無情を説き哀情を節すべし杯の語ありしに由り斯くの認めたるならん歟此の簡單なる一通の書札にても尼將軍の尋常平凡の巾幗子と同じからざるを知るべし

●古政治家の屋内運動法

身體保養の爲め泰西著名の政治家が兒戯に類する屋内運動を爲せる例は史傳の上に於て少くらず即ちベタウエス氏の執務に倦みたる際五分時間程を限り己が坐を占めたる

椅子を兩手に取り之れを高く差し上げて風車の如く振り廻すを以て樂みとなしリシリユと云へる宰相は家僕を敵手に高飛の競争をなして悶を遣りサミュエル、クラーク氏はテール椅子の類を飛び越ゆるを以て屋内適當の運動法となせりと云ふ扱て以上と類似の事に就き一の小話あり曾て佛國或る省の秘書官某が其大臣の使命を奉じ當時歐洲全土に大勢力を有せるマザリン僧正の邸に到りしとき僧正の家扶の主公の都合を計らず直ぐに客人を伴ふて主公の居室に入りしに僧正の恰かもチヨツキ一つにて小兒の戯るゝが如く傍らに並らばある椅子其他の家具をば頻りに飛び越へてさも快よげに戯むれてありければ伺候せる秘書官も間の悪るさことに思ひしが此人も然る者にてありければ驚ろきたる色を面にも顯はさず俄かに身構ひをなし「憚りながら小官もれ相手仕るべし併し賭物なくては興最と薄ければ負けたるものは金貨二つを出すことに約束いたすべし」と云へば僧正もとは一段面白しと早速に同意を表し秘書官の齎らしたる公務を聞くことは何時しか打忘れ堂々たる五尺の大丈夫か恰かも小學の穉童の如く互ひに勇氣を鼓して飛越の競争をなしたる又僧正の方熟練してありけん勝は僧正に歸し

たれどこれよりぞ此の秘書官は僧正の厚き寵顧を得て遂に歐洲著名の政治家となるを得たり

● ニュートン翁「シヤボン」玉を吹く

大賢は愚なるが如しとの諺ある如く大家の研究の兒戯に類すること少からず泰西理學世界の泰斗と仰がれたるソル、アイサツク、ニュートン氏が光線反射の理を頻り研究してありし頃の故ありて居をレースター、ブレースと呼べる所に移したり然るに氏が新居又隣なりて一人の年尚ほ若き未亡人ありて無聊の折には己が二階の窓よりニュートン氏の庭園を見下すこともありしが天氣清朗の日には白髮の老翁が小兒の戯る如く蓋の細管を取りて頻りに「シヤボン」珠を吹きて「玩ぶことの數々なるを見て最も可笑き事に思ひ一日龍動なるロヤル、ソサヤテイの會員某氏か此の婦人を訪ひたる時婦人の四方八方の談話をなしたる後此事を告げて曰く「妾の隣家又近頃移轉し來りたる人は何人なるや」知らざれど見れば斑白を戴きたる老人なり此人一種の癖を有する者と見え毎朝日光の反射甚しく窓又カルテンを掛ずしては眩くて居耐へぬ程なる時

分を計り一時間若くは二時間位必らずシヤボン珠を吹て上なき樂みと爲すに似たり今頃は定めて例の戯れを始むる時刻と覺ゆれば窓内より私かに覗き給へ」某氏の婦人の云ふがまゝ窓内より密と覗き見るに奇癖ありと聞へたる老翁は別人ならず即ち當時名聲を理學世界に轟かしたるニュートン氏なりければ氏は驚きあから振り返りて婦人に其事を告げ氏は理學世界の一大問題たる光線反射の理を研究するが爲め斯くは兒戯に類する試験を爲すなり決して嘲る可らずと戒めたりとや

● 喫烟の代りに砂糖を嘗めたる時代あり

英國に喫烟の習慣の起りたるは何人も知る如くウオトルレイ氏が米國より煙草を齎らし來りたるより創まる其以前に當り吹烟者なりしと知るべし然らば當時の英國人の煙草に代へて無聊を醫する料を更らに有せざりし乎曰く有せり、そは何なるかと尋ぬるに奇怪にも今日我が村童が嗜む所の甘蔗(砂糖の木)にて當時人々何れも之れを二三寸の長さに切りて之を懷中に挿み恰かも今日巻煙草を口にするが如く戶外に歩する時杯よは憚らず之れを口に喰ひたりと云ふ現に史家の報ずる所に據るに第三世ヘンリ

一王の時には人々の之れを嗜むこと甚しく一日之れを欠く時は幾んど生存する能はざるの思をなしたりと云ふ又た千ニュークド、ガイスト云へる貴族がフロアと云へる所に刺殺されたる時は手は甘蔗管を握り居れり

●英國々會議事録の不体裁

凡そ事々物々其初めは皆な幼稚なり英國々會の議事傍聽筆記の如き今こそは極めて整頓無比の者なれども當初の實に不体裁言ふべからざる者なりし史家の報する所は據れば英國文學社會に於て國會の議事録を公刊せる鼻祖とも稱すべきはセントルマン、マガジインと稱する月刊の雜誌にて一千七百三十五年の八月より其登録を創めたり當時記者の議事を直筆することを憚り議員の姓氏の如きは大概首字若くは尾字を以て表するに止まり議論の如きも其大要を摘まむに過ぎざりし其後次第々々に記者も大膽となり遂に姓氏を明かに記載するに至りしが終に國會議院の注意を惹き果ては議院に一大動議を見るに至れり其の次第は當時國會の議員未だ辯論に熟せず随分粗末なる議論を並べ立る徒も少なからざりしに麗々と其姓氏を議事筆記に掲げられり其の人の耻辱

なりとの事より一千七百三十八年の四月十三日訥辯者の間ある某議員の議場に立つて此事に關する動議を起したり然るに兼ねて不快な感じ居りたるヨンヅ、ウイドハム、トーマス、ウイニングトンなんと呼ぶる議員は直ちに同意を表せしかば忽ちに議場の一問題となり激論百出する中にもウイニングトン氏の如きは怒氣を含みたる一場の演説をなし「若し今日の如くセントルマン、マガジイン記者の筆記するに任せば世界各國中我が議院の議事程馬鹿らしく見ゆる者いなかるべし」と迄論じたるを以て終に滿場の議員は「議事筆記を公刊することは議院を侮辱し其の特權を冒すの最も大なる者なれば速かに之れを禁ずべし」と議決したり國會の憤激斯くの如くなるが故に各新聞雜誌記者等も勢ひ初め如く臆病ならざるを得ずしてセントルマン、マガジインの如き「リリパット議院の議事録」と題する一欄を置き一の架空の議院に假て多少眞事を報じ又ロンドン、マガジインと稱する雜誌の如きは「政社議事録」と題する一欄を設け其議員には孰れも羅馬姓を附して發刊するに至れり其後有名なる文學博士ジョンソン氏がセントルマン、マガジイン雜誌社の聘に應じ編輯に従事するに及んで氏が執筆の

老練なるとその名聲の高きことにより議院の妨げを受くることもなくポツ／＼實際の議事を公録し始め終に今日の如き整頓を見るに至りたりと云ふ

●傳道師、俳優に如かず

僧正サンクロフト氏が當時梨園に評判高きベツタルトンを呼べる俳優に邂逅せる際僧正は問ふて曰く「余の平素最も不審に思ふことあり、それは餘事にわらず卿等の毎時劇場に於て想像架空の事を演ずれども充分観者を感動せしむることなるが余等傳道師は如何ばかり實事を熱心に説くも聴者は恰かも想像談を聞くが如く然のみ感動せる色を現いさず余が常に解しからず思ふに此事なり是れ果して如何なる理由なる乎足下の考を聞かん」ベツタルトンの之を聞き果て「私は別段これぞと云ふ程の考ひを有し候はねど或は俳優は架空想像的の事を左も眞實の如く演じ閣下等傳道師等は説教場に於て眞實の事をば左も想像談の如く説かるゝが故に由らざる歟」と答ひたり

●寧ろ二十五歳の良人二人を欲す

一老父わり息女を膝下よ召んで曰くおん身も早や嫁期は達したれば良人を定むること肝要ならん併しおん身は能く思案して當世の輕薄少年に嫁し一生を托する様の志ある可からず容貌風姿を撰ばんよりの年既熟して識あり經驗ある人を良人と定むること一生の幸福となるべし、今既に五十の坂を越たれど識あり經驗ある紳士が近來妻を尋ね居る様子なるがおん身は之に嫁する意なきか」と始終諦聽して居たる少女の面に紅を潮し恥しげと答て曰く「妾の五十歳の良人を持つより二十五歳の良人を二人持つ方がよいと思ひます」

●良人は隣家の造靴師あり

英國に一婦人あり其良人急病に罹り己が資産の分配に附て遺言を傳ふるの暇もなく鬼籍に上れり然るに英國の法として本人の遺言あるにあらざれば其妻子と雖も漫りに家産を處分すること能はざるが故に細君は總ての資産を我手に歸せんものと一と思案を運らし良人の死去せる事を世間に秘し置き隣家に住居せる貧賤の造靴師に事を言ひ含めて我が家と連れ來り之れを良人の寢臺に上せて病狀を粧はしめ扱て狀師を招いて遺言書を認め呉れよと依頼せり狀師の固より醫師にあらざれば假病と否とを知る由な

きゆる早速に承諾し病夫に就て遺言の次第を問ふに偽患者の苦しげなる聲よて資産の半分をば妻に與ふべしと云へり依りて狀師は其の半分何人又與へらるべきやを問ふに「隣家の造靴師は是れまで深く交りたる廉もあれば彼に與へ度思ふ」と云ひければ傍ら坐したる細君はこは失敗せりとは思へども眞道云ひ出る譯にも行かずモジクして居る中狀師は早くも遺言書を認め終り之れを病夫に渡して立去りたり

●治安裁判官たること易し

英國の治安裁判官ジョン、ウ井バルと云へる人一日節を河邊に曳き逍遙してありしが未だ七歳に満たざる己が愛兒の滿面汗を浮べてサモ嬉しげに走せ來るに不氏は其故を問ふに今しも友人と競漕を爲せるに私は一番に漕ぎ附けて一等の賞を得たり由りて今お知せに驅來りたりと云ふ氏は聞て大に喜び其の競漕の模様等を問答する内小兒は父又對ひ「私は航海師に成り度く思ひますが何うか左様として被下たし」父は之れを聞き「それは善き心掛けなり而し航海師となるには航海學は勿論の事天文數學其他の理學を深く修めなければならぬ故お前も充分勉強せねばならぬぞ」と言ひ聞かするに

小兒は迷惑の事と思ひけん、まばし黙してありしが父を呼びかけて更らに「私は航海師となることを止めて治安裁判官となることを心掛けます」と云ふ父は怪しみながら何故その様なる事云ふぞと尋ぬるに小兒は「治安裁判官となることは航海師となるより容易と思ひます其の證據には爺々は何もお知りなさらんければ治安裁判官となつて居なさる者を」と答へたり

●余は愉快を好まず

米國南北戦争の時、敵愾の氣は全國に滿ち到る所戦争の談を聞かざるなし一日或る紳士然たる壯年一村落に至り村民を集めて一場の演説を奇し將さに局を結ばんとするに當り一段聲を張揚て曰く「往矣往て我が國土の爲めに戦へ往て我が獨立の爲めに死せ我國土の爲めに戦へ我が獨立の爲め死するは抑も亦た愉快ならずや」とやがて演説終りし時來衆の一人進み出で「足下は國家の爲めに戦ひ獨立の爲めに死するを愉快なりと云ふ焉んぞ足下自ら進むて其愉快を取らざるや」と詰れば演説家は此の攻撃に對し當惑の色見えしが且らくありて曰く「余は不幸にして愉快を好まず」

●一彈以て二百頭の水牛を殺すべし

米國の西方に一獵夫あり其家弟と共にロッキイ山近傍に獵し一彈以て二百頭の水牛を射たりと云ふ或人之を怪み難じて曰く「僅かに一彈を以て争で二百頭の水牛を斃すとを得べきや」獵夫答て曰く「決して難事にあらず請ふ其方法を語らん先つ余等兩人は二挺の獵銃と二囊の火薬と一個の彈丸とを携へたり扱て水牛を見當る時はこれを挾さんで兄弟雙方に立ち火薬を籠めたる筒口を相對して持てば甲より放つ彈丸は水牛を貫いて乙の筒中に入るべし其間に甲は火薬を籠め易れば乙より放つ彈丸は又直ちに他の水牛を貫て甲の筒中に入るべし斯くして一日平均二十七頭の水牛を斃し一週間平均二百頭を斃すこと實に容易の事なり余等斯の如き方法に由り十二ヶ月間收獵を事としたるも嘗て彈丸を失ふことなく遂に歸宅の節これを持歸りたり」と

●學士ブットマン散髮師と誤解せらる

滑稽學者の研究する所に據れば凡そ滑稽に二種ありて彼の一時人を笑はしむるも時過ぎて人之を追思するときは更らよ可笑しく感ぜざる表示的の滑稽は世間最も多しと

雖ども是れ抑も滑稽の下乗なるものなり滑稽の上乗なるものは其時には餘り滑稽らしく見ゆざれども後に至りて追思すれば如何にも抱腹に耐へざる隱伏的のものは是なり例へば今一少年あり鬚を剃るの必要もなきに散髮床に入りたりとせよ散髮師は敢て顔に剃刀をも當てず其まゝにして己が座に就き澄して新聞紙を読み居るとせよ少年は必ず催促するに相違なし然るに散髮師は之に答へ「お鬚の生るを待て居るのです」と云はゞ是れ一種の滑稽に相違なければども客人は悪しき感覺を與ふるのみならず傍人が聴ても左まで可笑しくは思はれざるなり寧ろ剃刀を當るの必要な客人と知りながら然あらぬ体にて宛がら鬚深き人の面を剃る如く殊に難澁らしく剃刀を動かし僅か二三本チラチラと鼻の下に生ある毛をば「ね鬚は皆な剃り去りて宜しいか」杯穩かに問ひ質ま自ら客人を傲然たらしむるは其時には客人も覺らざれども後に至り談話なるを知り最も可笑しく最も恥かしく感ずることならん英國に希臘經學の博士と聞てゐたるブットマンと呼べる人あり其容貌と態度は能く散髮師に似たりければ人或は氏を眞の散髮師と思ひ誤ることありし或日氏は龍動の市中を通り過ぐるに或る商店の二階より手招

して呼ぶものあり氏の其意を得ざれと呼ぶるゝがまゝに二階に登れば全く氏を散髪師と誤認りたる者の如く「髪を剪りて呉れ」と云ふにぞ氏も初めて誤解されたりと覺るものから更に動する氣色もなく静りに諾して其家に備へたる鋏を取り上げ凡そ頭部の半ばを剪り了りたる頃客人は鏡に對して照らし見るに驚かざるごとく頭の半分は宛ながら小鳥の卵殻を破りて出でたる時の如く毛髮の存する所もわり全く存せざる所もあり其の剪様如何にも拙劣極まるよぞ客人は憤然たる顔色にて「れ前は髪は剪りて知らないな」と問ひかくれば氏は悠然として「足下は余に髪を剪れと命じたるを聞く足下が余に髪を剪るとを知るや否やを問ひ質したるを聞かす余のブットマン教授なり」と鄭重に暇を告げて立ち去れりと滑稽學者之れを呼ひて滑稽の上乗なるものとす

● 兩脚を失ふて自ら知らず

此の一小話は「シヨルナル、オフ、ナチュラリスト」と稱する理學雜誌に登載せる所の者にして事餘りに奇なるが故、人或は信を置かざるべしと雖ども話中の患者はプリストル病院の外科醫士リチャルド、スミス氏が自ら治療を加へて充分事實の確かあること

を證明せる者なり」會て一旅人あり冬夜或る逆旅に投宿せるが其夜は寒氣殊に激烈にて幾んど凍ゆる計りなりければ逆旅に投するや否や煉瓦製の暖爐に火を焚かしめ、ろの上に兩脚を上げて疲れたるまゝ椅子に倚りて憩ふてありしが火爐の温氣漸々増すに隨ひ次第に睡眠を催はし來り遂に其儘通宵死するが如く熟睡せり然るに暖爐を構造せる煉瓦の火氣の増すに隨ひ漸次に熱し來り疲れ果たる睡人の片足をば全く焚き盡せり然れども其の焚燒は急遽ならざりしが爲め憐れむべき旅人は毫も之れを感ずることなく熟睡してありしが焚燒漸やく脚部に及び拂曉逆旅の主人に起さるゝまで又は其の半ばを焼失し形は舊の如くなるも其實は全く石灰質と變化せり然るよ此時に至るも毫も苦痛を感せず更らに不幸を覺らざる憐れむ可き旅人は今主人の己が居室に入り來りたるに驚ろき遽かに目を覺まし漸やく兩脚を暖爐より下して起上らんとするに石灰質に化したる兩脚は如何でか全體を支へ得べき忽ちにして散々に崩れ碎けて人は牀上に倒れたり主人は驚きて介抱すれども其人更に苦痛の色あらはれざるにぞ共に不思議の感を起し終は煖爐の火氣が其原因なることを覺り其最寄なるプリストル病院に入りリ





し更らよ主人を海中に推し遣りたりラム氏は再度の不意に遇ふて怒ること一方ならず陸地に上りたる後は怨める顔色にて二僕に向ひ「其方共は我れをこゝこゝ殺す積り余はみこみこみ水に入るべし」と云ひしに又語窮しければ二僕は仰せ分りましたと云ひながら更に又海中に推し遣れりラム氏は三度までも不意を撃れたることなれば憤怒遣るに由なけれど又々言辭の通せざる内に不意を撃れては叶はずとや思ひけん今度の海を距ること二三間の所まで這ひ上り扱て嘆息しなから「今となりては最早や云ふも詮なきとながら余はみこみこみ水に入るべし然し今朝は寒氣甚しければいゝいゝ一回又て止めんと云のんとする内汝等は早まりて三度までも余を海中に投したりと怨じたりとか

●雇人請宿を「ケイアン」と呼ぶ由來

俗間雇人請宿を「ケイアン」と云ふと常なれども其の何故たるを知らず今安齋隨筆を閲するに追ひて初めて其の解を得たり今左に其の一節を抄録して好事家の一覽に供すべし

寛文の頃武州江戸木挽町に大和慶安と云ふ醫師あり又同遊に伊達三郎兵衛、長谷川助右衛門といふ浪人ありて常に慶安と參會し世間人々の出入或は訴訟公事沙汰又は男女婚姻の媒妁なせ此三人にて肝入す、あるとき慶安等酒井長門守の息女を何某方へ縁組取極め長門守より金五六千兩を息女の持參金と定む此とき彼の三人の者私かに謀つて二千兩を横奪する巧をなせり此事直ちに露見せしかば公裁となり寛文五年右三人の者を追放せり

これみ由りて見れば「ケイアン」は正さよ慶安と書くべく大和慶安より由來せること知るべし

●高尾の實事

萬治の頃名妓の譽高かりし北里三浦樓の高尾は仙臺侯の寵を蒙り其身を千金に換へ侯の邸に誘はれし時候の意に背き舟中に戮せられしとは人口に膾炙すれども近年或る人が仙臺に至りて實蹟を尋ぬるに全く當時仙臺藩中に奸徒ありて侯を黜けんが爲め設けたる虚誕にして高尾の現に侯の側室となりて享保の頃まで存命し其縁故あるものを

養子とし楢原氏を冒させ俸祿六百苞を與へられしとぞ 加之高尾は貞操才思ある婦人にして私に藩政に預りたることありしと云ふ現に仙臺荒町佛眼寺に高尾の古墳存じ碑面に「淨休院妙讚日清大姉享保元丙、申年十一月廿五日」とあり又背面に「楢原時之助範清義母逆修行年七十七歳而營之于時正徳五年二月廿九日」と刻しありと云ふ豫じめ死期の近きを知りて存命中墓碑を營みたるものと見ゆこれにても平凡の婦女子に非ざるを知るに足るべし

●木戸内閣顧問の葉唄

左に掲ぐる葉唄一首は故木戸孝允氏が維新の當時王事又奔走する際戯むれに作りたるものよし一誦頗る寓意の存するを覺ゆるが故に録して讀者の瀏覽に供す

竿鈴戲戒

昨日二上り今日三下り調子揃はぬ糸筋の細い世渡り日渡りも其處じやなぶられ彼處じやせかれ主の心に誠があらばつらい勤も厭やせぬ

●鞦韆暖を取る

俳客超波常に花柳の遊を好み資斧盡す一日大に雪ふる門人存義賞明の二人之に候す聞として人なきが如したる樓上憂々搖動の聲を聞く怪んで以爲らく偷兒ならんと窺うに之を覗ふに豈圖らんや超波身に濫縷を纏ひ帯を解いて輪と爲し自ら體を揺かすの状を爲し居れり二人喫驚其故を問ふ超波笑つて曰く近日赤貧一物なし夜來の大雪寒甚だしきも爐なく炭なくまた暖の取るべき計なし仍て戯れに舟を盪揺するの状を爲し以て聊か寒を凌ぐのみと二人大ひに笑ひ各々其衣類一枚を脱いで與へ去る曠懷軼蕩頗る古人の風あり

●奪刀の代りに自盡を賜ふ

上杉謙信の刑罰を設くるや第一奪刀第二死罪第三沒収所領第四軍屬剝奪第六禁錮の六種とす一將長尾右衛門佐なる者あり其操行不謹なるを以て罰を加へ所領沒収の刑を申渡さる法に於て終身帶刀を得ず親家大ひに駭る哀訴を爲す謙信其の先世の忠功あるを以て罪一等を減輕し特に雙刀を給して自盡を賜ふ

●四韓、四上野介

幕府の重役中古來上野介と稱する者四人あり孰れも其終りを令くせざりしと云ふ其  
 一、本多上野介正純は元和年中功を恃んで驕傲なりければ封邑を没収の上放たる其二、  
 堀田上野介正信狂暴悖徳の行多く或時朝告げずして私に邑に歸る國中其大譴を獲ん  
 とを恐れ正信又逼りて致仕せしむ其三、吉良上野介義英にして元禄年中終に淺野家  
 の舊臣の爲めに殺害せらる其四、小栗上野介忠順にして慶應の末年其職を辭して邑  
 に在りたる又遂ひに官兵の爲めに殺されたりと皆奇なりと謂ふ可し支那史上又之れに  
 類する例しあり即ち韓信は呂后の爲めに殺され韓通は杜后に韓侂胄は楊后に韓露の謝  
 后に殺され韓姓四人皆な均しく婦人の手に死せるも亦一奇なり

●空椀

昔時細川靈感侯の賢明の聞え高く精を勵まし治を圖る於是封内大に其徳政に化し道  
 遺物を拾ふものなきに至る侯また能く細事又意を用る輕舉苟くも下を傷つくるの行  
 なし一日宴會に招かれて嶋津の邸に臨むや饗禮甚だ殷なり侯膳に向ひ將さに箸を下  
 さんと坐客を顧みて曰く僕此頃腹疾を患ふ請ふ少しく恕せられよと乃ち起つて廁  
 に之く侍臣追隨す侯密かよ之に語つて曰く余れ別に腹疾なし飯椀の蓋如何おしても粘  
 着して開く能はず故に事に托して席を避け之を告げんと欲せしのみと侍臣大に駭き膳  
 部を撤し來りて之を検すれば豈に圖らんや空椀なりしかば始めて侯の意を悟り早速に  
 飯を盛りて進めたりければ島津侯の盛筵に一の失体もなく厨人も亦其譴責を免かるゝ  
 を得て一同蔭ながら合掌拜謝せり

●明人櫻を畫き邦人虎を畫く

田中宗益は幕府の髡豎(お茶坊主)なり老練滑脱を以て聞ゆ嘗つて權門貴人の宴に侍す  
 壁間俵屋宗達の畫く所の櫻花の幅を掛く古色黯澹欸印を辨せず宗益一見して嘆賞之を  
 久ふし以て明畫と爲す一貴人叱して曰く櫻花は彼邦に無き所る汝之を知らざる乎と宗  
 益平然として徐るよ言つて曰く「本邦人の虎を畫く公豈に之を忘れたる耶」と一座啞  
 然たり又其家の南隣は一顯官の邸宅たり時屢々舞馬の警めあり顯官嘗つて殿中より  
 戯れて曰く「もし北風の時は切に卿の用心を要む」と宗益聲に應じて曰く「南風の時  
 は貴官も同斷に願ひたし」と其の機警概ね此くの如し

●淺野、吉良の菩提寺は同號なり

元祿年中故の赤穂の城主淺野長矩吉良上野介義英を殿中に刺す幕府其大不敬に涉るを以て長矩の封邑を沒收し之に死を賜はり義英は後に赤穂の遺臣大石良雄等四十七士のために殺さる然るに長矩の墓は東京芝高輪なる萬松山泉岳寺に在り義英の墳は牛込築土泉岳山萬松寺に在りて二寺全く同號たる僅か上下を顛置せるに過ぎざるは奇と謂ふべし而して長矩の墓所は行人膜拜香火絶ゆるなく義英の墓は兒輩石を擲つて毀壞し殘缺殆んど盡きて今まや裁かに一小石墳を存する耳、人あり客と共に義英の墓を吊ふて「何ぞ其菩提寺の相似たるに拘はらず彼此墓前の冷熱相去るの甚なりぞ遠さや」と長嘆しけるに客側らより戯れて曰く「義英の墓石の一小石を留むるは彼れ地下に在りて當さに喜ぶなるべし何となれば彼れ死すとも大石を喜ばざるべければなり」と二人相見て一笑す

●耐軒能く溝の深淺を知る

乙骨耐軒は資性磊落不羈にして詩文を善くし毫を拈れば數十萬言立どころに就る然れども一生不遇にして卑賤の職に沈滞し坎軻年を終ふ平生他の嗜好なくたゞ酒を以て終生の至樂とし醉へば則ち倒れて地上に臥すまた溝渠泥濘を擇ばず人戯れに稱すらく耐軒翁能く各處の溝渠の深淺を知ると或人の隨筆に見えたり

●麵湯の饗應

尾州の人老鐵畫を善くす縦横毫を揮つて紙に灑ぎ自ら胸臆を行る家に擔石の資なく日々負債を索むる者麴り至る老鐵常に門を閉ぢて厨下より匍匐して出づ一日外に在りて二三の親友に邂逅す老鐵曰く故人契濶請ふ明朝貴臨われ將さに麵麥を供せんと某等老鐵の清貧を知る然れども折角の厚意背くに由なく翌朝其家を訪ふ老鐵大いに喜んで之を迎へ談笑切々として休まず方さに午及び腹枵然たり主人俄りに外出す須臾にして一小厮入り來り麵碗數箇を呈して去る主人尋いで歸る客渴望に堪はず將に箸を下さんどす主人遽て之れを制して曰く請ふ一言を謝さん頃者一縉士あり予は畫を索む約すらく今朝來り取ると僕意ふ必らず潤筆の料を齎すべし以て客に供せんと而るに其使者未だ來らず因て慙るに麵麥舗の主人に請ふて數碗を索むるも彼れ予が舊債を償はざる

を以て之を拒む仍て已を得ず今裁がに其湯を乞ひ來る耳と客相顧みて默然たり

禽獸の刑罰

一千百二十年より一千七百四十年に至るまで六百二十年の間佛蘭西國に於てハ人類と同じく禽獸にも刑罰を加ふるの法律を慣行せり此法律に據れば家畜類の犯罪ハ刑事裁判所にて取調らべ有罪と決まる上は之れに死刑を宣告し野獸の犯罪ハ宗教裁判所にて取調らべ有罪と決する上は之に流刑若くは死刑を宣告するとせり此法律を施行する間に宗俗兩種の裁判所よて取扱へる裁判件數ハ極めて多かるべしと雖ども今尙は記録に存する所は九十二件にして牛馬犬豚及び野猪等の人を殺し若くは傷くる等の事ハ付ては種々奇談あり雄鶏の姿をなまたる雌鶏の卵子を産みたりとて裁判所に召出し（この召喚は必ず拘引ならん）己れ雌鶏にありながら雄鶏の姿をなすは人を誑す魔物なりとして卵子と共に火刑に處せし事あり或は牝豚が小兒を噛殺せりとて之に死刑を宣告し市街の中央にて其牝豚に人衣を被たる籠頭と四肢を切りたるとあり或は親豚が六頭の子豚と共に一人の小兒を殺し其肉を喰へりとの嫌疑にて取調べの末親豚又は死刑を

申渡し子豚は其幼少なると小兒を殺すに與かれる證據不充分なりとて無罪放免を申渡せし事ありと

壽命を豫知するの法

英國のリチャードソン博士が各所の生命保險會社に就て研究したる壽命算定法は能く人の壽命を豫知し得るの法なり今其法を案ずるに四人の祖父と兩親の年齢を合せて之れを六に除す然るときは其商は即ち其人の壽命なりと云ふ例へは第一の祖父は八十歳にして没し第二は九十歳第三は七十二歳第四は六十四歳にして各々没し父ハ七十歳母は六十歳にて没したりとすれば其子たる人の壽命は七十四歳と豫知し得るが如し但し此の算法は兩親を亡ふたる後にあらざれば試用するを得ざるなり

他人の年齢を覺る法

西洋諸國にて婦人を尊崇するに付き種々奇異の習慣ある中に其年齢を問ふを以て一の不敬となすの習慣あり之れを不敬とするの理由は知るを得ずと雖も實際上随分不便を感じることなるべし此頃米國の或る理學者は右の不便を省かんとして感に左の如き一



なし鍾馗と達摩とに於ける亦然り試みに思へ辨慶は源豫州の爪牙にして無二の忠臣たり長範は伊賀の大盗のみ又達摩は乃ち清淨智識の佛師なり鍾馗は蓋し一勇將の想像人物のみ其心術孰れも月鬘管ならず然るも二者各々一様に描寫するの理あらんや」門人問ふて曰く「然らば即ち如何にせい可ならんか謹んで教を請ふ」祖仙曰く「用筆の間差異あるも非ず但だ用意の上にて於て斟酌すべき耳例へば辨慶を畫かんと欲せば須らく是れ剛勇なる源家の忠臣なるを想ふ可く長範を寫さんとするには彼れは強暴なる巨盗なりと想ひ宜しく切齒して筆を下すべきのみ苟くも此意を持て畫かば百に一も誤つとなからん」と蓋し至言と謂ふ可し

●午睡の自由

英國の慣例として國會の議事の夕刻より開らざり往々曉に徹することありて議員の之れが爲めに苦情を鳴らすもの少からざるよしは前項の雅談中に収めたるが何時の頃にやありけん年月は詳らに知るを得ざれども曾て市區警察の改良案を議院に提出したるとき議院の例によりて委員を撰び扱て委員會を開いて原案を朗讀せしに幾多の箇條中

「夜中の警察を嚴重にすべし」「夜勤の警官は必らず晝間若干時間熟睡するを要す」とある條項に至りて一人の委員は遽かに立つて「其の箇條は國會議員にも適用されんとを冀望す」と最と聲高かに發議せしにぞ一同は絶倒したりと云ふ

●野人尙は師とするに足る

圓山應舉が寫意の密にして苟くも實物に就き研究せたる後にあらざれば筆を下さざること何人も知る所なり或る時思ふ由ありて臥したる野猪を寫さまく欲し八瀬といへる山村の柴賣女云ひ付て若し臥猪あるを見急ぎ己お告てよと兼々頼み置けるにあり日彼の女いそがしく來りて今日こそ我家の傍なる竹林に猪臥し居れり、疾く來まして見そなはせと云ふに應舉は打欣び急ぎ彼處より立越て先づ其様を窺ふも最と大さやかなる野猪なれば應舉は日頃の宿望の一時に晴るゝ心地して時の移るゝを忘るゝまで筆に任して寫し終りぬ後に鞍馬の山村より炭賣翁の來りければ應舉は彼の畫を取り出て最と誇り顔に示せしに翁熟々に見やりて打笑ひながら難じて云へらく此は猪臥の圖に似たれども全くの是れ病猪なるべし其故の如何にと云ふに總て猪と云ふものは假令へ

睡中なりとも其の背上の毛の皆な堅立して侍るに今寫させ給ひし野猪の毛は皆打ち靡きて候わといふに應舉も驚きて八瀬の女に尋ねしに果して彼の猪は病猪又して日ならず彼處に倒れ居しとぞ

●莞翁鴨に換ふ

吉田莞翁書を善くす江戸昌平校に在りし頃古賀精里翁數々莞翁に托して書を抄寫せしむ一日古賀翁鴨一隻を饋くりて其潤筆料と爲す莞翁携へて校中に歸り人に命じて調理せしめて之を食ふ後ち一日を問て、古賀翁來校し下吏浦田某を召して曰く「汝が師頗ふる能書なりと雖ども未だ王右軍に及ばず」と某茫然として其意を解せず翁笑つて曰く「聞く晋の王右軍は鵝に換ふと今ま吉田翁鴨に換ふこれ右軍に及ばざる所以なり」と一座爲めに大に笑ふ

●文晁に非ず鶴なり

昔し東都に一客あり或青樓に遊ぶ壁間掛る所の衣裳綺衣の畫幅を觀て曰く「妙なる哉文晁」と一妓側らに在り笑つて曰く「これ文晁に非ず鶴のみ」と客爲めに索然たり其後客又一妓家に遊ぶ酒酣にして談偶々此事に及ぶ乃ち曰ふ「某樓の妓は文晁の何物たるを知らず痴愚笑ふ可し」と一老妓首座に在り揚々得色を爲して曰く「文晁は小鳥なり鶴といふ羽色も異なれり」と客是に於て呆然として言なし

●都還りの盃

三代目高尾の全盛を極めたる折、或る嫖客此名妓の咏歌を高蒔繪にしたる一の盃を贈れり高尾或歳の仲秋に月を賞しあがら此の盃を擧げ一杯を傾け盡し急飛脚を立て、其盃を當時京都島原に全盛を極めたる吉野に獻せり吉野之れを受けて一杯を傾け更らに急飛脚をもて之れを大坂なる名妓高圓に獻せしかば高圓一杯を傾けたる後吉野に返杯し吉野又飲むで遂に高尾又還せり因りて之れを都還りの盃と名づけ今尙は好事家の手又存すと云ふ當時の驕奢風流想ひ見るべし

●俳優の風流

今は昔し寛保年中市川白筵(海老藏)大坂に赴かんとて澤村訥升(宗十郎)の許へ暇乞ながら彼地の模様をも聞かんと尋ね行き種々物語をなしたる後、辭して立去らんとする



を納升も送り出けるに白筵履物を穿くとて如何しけん穿外したる途端誤つて放屁しければ白筵は取り敢へず「ブツト出て顔に紅葉を置き土産」といへければ納升「あまり臭さに餓別もせず」と即答しけるとぞ當坐の附合最とおもしろし、それより白筵大坂に着し翌日知れる者の方へ短冊「難波津にさくや着仕候」と認めて贈りけるとぞ昔しは俳優と雖ども優しかりし

●鵲鳴石

伊勢市瀬村に異石あり能く人語に答ふ土人因りて鵲鳴石と名づく或人曾つて之れを見んと欲し伊勢に赴き豐原に留宿し導者を求めて行く西山神田を經或は山或は里清泉茂林の間を行くと數里一巨石の山腹に偃すを見る之を鵲鳴石と爲す高十餘丈幅二十丈許其色青黒上に數十人を坐すべし人あり石上に立ち聲を發すれば石亦聲を作して以て之に答ふ鼓を撻ち絃を禪く亦た皆之に應答せざるなし但だ一行中笛を携へ來り吹く者あり輒ち答へず亦た奇なりと謂ふべし蓋し西土亦響石と稱するありと又た近日某氏の來書中云ふ志摩の海濱に安樂島あり島中亦た異石の應答恰かも鵲鳴の如きあり土人之

れを稱して同言石と云ふ

●牧童名畫を笑ふ

蘇東坡志林に曰く杜處士、戴嵩畫く所の鬪牛の一幅を藏し甚だ之れを珍重す一日牧童あり見て大に笑つて曰く牛の力を鬪はずや其角に在り尾當さに兩股間に在るべし然るに此の畫幅の牛を觀るに皆な尾を掉かして鬪ふと謬れりと此れ圓山應舉が臥猪の事と頗ぶる相類せり名手と雖も時に此の失あるを免かれざる歟

●頼三樹春雨の曲を賦す

頼三樹曾つて春雨の頃東都向島なる或友人の別莊を訪問ひしお闕として人音もなく戸を叩けども出来るものもなかりければ腰なる矢立筆を把りて門の扉に左の今様並びに詩一首を書き遺したり

雨はしきりに降りしきる、通りかゝりし小梅道、粹な住居の柴折戸を、喚べど叩たけど音もせず、まだお目が覺めぬじやナイカイナ  
春雨叩柴戸。閑無三人語聲。應下且帶殘醉。夢中聽曉鶯。

名妓の風流

貝原益軒京師遊學せる頃、恰かも壯年血氣のときなりしかば、折々島原の青樓に遊ぶこともありし由なるが、成業して故郷に歸らんとする際、益軒の愛妓小紫は切に別を惜み、己が肖顏を畫かせて

姿こそ繪には寫せど中へ通ふ心は筆に及ばじ

と一首の歌を詠じ書付けて益軒に贈らんとすると、吉野と云へる名妓之れを見て益軒先生は尋常の人よあらず一言を寄するは榮譽なりとて繪の上へ

玉琴のひく手あまたの浮れ女に誠ありと心を盡す人々はあはれにもまたおかし、す

べて男は淺まきものはあらじと我のみ思ふかもしらず、古の佛刀自、靜なんど實なしと云んもやばらし、寔あだし野の露消なむ命もしらず人もしらず、遊ば遊べ西へ東へ

都の遊女

よし野

いくたりの目に鹽こぼす糸櫻

筑前學士

貝原氏によする

と題して贈りたりと、橋南谿の北窓瑣談に見ゆ

華盛頓氏死去の時日の奇なる事

米國の大統領華盛頓氏は其の赫耀たる建國の偉勳に由り三歳の童子にまで能く其の名を知らるゝのみならず其の逝去の日も米國人民が老若の別なく決して忘れざる所なり否「忘れず」と云はんよりは寧ろ「忘るゝ能はず」と云ふこそ穩當あらん何んとなれば天、米國人民をして長く華氏の名を記憶せしめんとするの意にや不思議にも氏は何人にも最も記憶し易き時に没したればなり則ち氏の逝去の日は、一千七百九十九年十二月三十一日(土曜日)午後十二時として實に前世紀の終の歳の終の日の又終の週日の終の時間に其の終の呼吸を絶ちたり亦奇なりと云ふ可し

動物の壽命は發情期よ五倍す

博士フアラデー氏の説に據れば凡そ動物の壽命は其の發情期よ五倍すと云ふ如何にも事實に吻合するもの、如し則ち駱駝は八歳にして交尾を始むるが故に八歳の五倍即ち

四十歳、馬は五歳獅子は四歳犬猫は二歳兎は一歳にして交尾するが故に犬猫は凡そ十歳兎は五歳、獅子は二十歳、馬は二十五歳の壽命を保つて通例とす而して右の割合より人類の壽命を推すに風土に依て遅速別あるも大体十五六歳を以つて發情期と爲すが故に其の五倍則ち七八十歳を以つて没す、これ又事實に吻合せり

●市川白猿の逸事

俳優市川白猿(五代目)が質素にて風流なりし事、普く人口に膾炙して江湖の人の知る處なるが同人梨園を退きたる後江戸の向島に構へたる別荘は僅かに六疊の一ト間に臺所あるのみの茅葺にて天井はなく三尺の佛壇を造り附けあれども陶器の佛具を並べたるのみにて佛像はなく正面に唯だ一枚の白紙を貼付けたり或人不審に思ひ之を問ふに白猿打笑ひて能く見玉へ彼の紙は西の内なりと答へたりと(西方に阿彌陀ありとの俚語に本づきたる滑稽ならん)又天井へ竹を渡し屏風を其上に載せたる譯を尋ねしに白猿云く風吹は塵落て机上を穢す故に斯の如し尙ほ之に付き狂歌ありとて「天井を張れば鼠がさわりなり水たまらねば月もやどらず」と口ずさみたりと(水たまらねば以

下は有名なる古歌の下の句なり之を假り來りて一首の狂歌を詠みたるは妙なり)

●石谷十藏能く人を薦む

石谷十藏後に土入と稱す幕府天草の賊を勦すや土入其監軍と爲り頗る膽略あり好んで人材を薦む是に於て食客常々門に滿つ嘗て一士人を某藩侯に薦む曰く「渠れ極めて材藝あり又巧みに細腰鼓を作る」と侯大に喜び直ち召して之に祿を興ふ侯の封も就くや土之に従ふ侯曰く「聞く爾が巧みに鼓胴を作ると吾が爲めよ之を作れ」土愕然として辭するに能くせざるを以てす其後侯土入に語るに此事を以てす土入微笑して曰く「當時如何にも之を善くするを以て薦めたりと其故は某會つて僕の家在り會々響應の事あり命じて箸を作らしむ尋常箸の腹豊に尾瘦す然るは渠の造る所を見るに中瘦せ首尾ども又豊たり僕是に於て渠をして鼓胴を作らしめば必らず妙ならんと思ひ扱ては君に薦め參らせしなり僕今ま老たり前日の事すべて茫然請ふ恕せられよ」と侯亦笑つて止む

●野中兼山の江戸土産

土州の士人野中兼山奇行多し藩侯に仕へて一邑を治む邑俗古來茶毘と喜ひ藩政數々禁ずれども止まず兼山の邑に到るや乃ち命を下して曰く「今より後凡そ罪を犯して死刑に處せられたるもの其屍を焚き而して後ち葬るべし」とこれより火葬自ら止む又嘗つて江戸に在勤するや書を郷人に寄せて曰く「(前略)わ國元には山海の産物何に一つ不足も無之事に候得者別段爰許より齎し參るべき珍物も無御坐尤も蛤と申す介屬國許には産せざるやに覺え且最も滋味に有之候得者何れ歸國の砌りは皆々様へ薄饋として蛤一艘を齎し歸る可く存居り候海路幸ひに恙なく到着の日を待ちて御嘗味被降度云々」郷人蛤の味を知らずその珍味ならんとを想像し舌を鼓し頸を延べて歸國の日を待つ兼山既に歸るや漕輪し來りし所の一艘の蛤を盡く城下の海中に投せしめ復た一個を餘さず郷人出でて迎へ此体を見て皆々怪みて以爲らく兼山我等を欺くかど一人訝りて其故を問ふ兼山笑つて曰く「左ればとよ余が齎したる珍味は獨り卿等に饋らんが爲めにあらず併せて卿等の子々孫々までも之を飮かしめんと欲するなり」

衆茫然として自失する所あるが如くなりし然れどもこれより蛤大いに繁殖し遂ひよ土佐名産の一となりたり

●耳目の賊は鼻の監察を要せず

寛永の昔し幕府喫烟を禁ずると甚だ嚴なり時の執政堀田正盛嘗つて宿直す偶々廷中を歩するや監察役喜多見某隨伴して一廊舎の前を過ぐ窓隙より烟氣の縷々として洩るゝあり喜多見其芬馥たる香を嗅ぎて頗る不平なり乃ち容を改めて執政に告げて云ふ「これ豫ねてより申ねくの嚴禁を犯して烟草を喫せるなり請ふ急かに屬吏に命じて搜索せしめん」正盛微笑して曰く「吾れ聞く足下の命を承るや耳目を職とすと未だ鼻を以て監察するを聞かざるなり」と喜多見赤面して止む

●黄門光圀淀屋辰五郎を憐む

水戸の黄門光圀卿退隱して西山公と號せられたる頃北條時頼の餘風を慕ひ諸國に遊歴して民苦を察し遺才を求め給はんとて僅かの從者を具し諸國を遍歴し給ふ折或る日一旅舎に憩ひ給ふに亭前一雙の金屏風を排列したり公熟らくこれを見給ふに畫筆非